

比企谷、P辞めるってよ

緑茶P

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

それは比企谷君が346を離れた後のお話であります。

# 目次

その1	1
その2	11
その3	18
幕間1く千川ちひろは解からないく	28
その4	33
その5	39
幕間 その2	45
番外編：城ヶ崎 美嘉は愛を囁かない	52
その6	58
最終話 前	69
最終話 中	85
比企谷、P辞めるってよ 最終話 後	101
後日譚	115
雪ノ下建設 宮前平 源治の独白	128
ぬくもりは、そこに	136
甘く、蕩けるようなジレンマを	147

## その1

プロフという名のあらすじ

比企谷 八幡 男 22歳

大学の先輩に美味しいバイトだと唆され付いてった先が346プロだった。逃げようとするが時給の良さとチツヒの甘言に唆され隷属させられた。ちよろい。丁度、シンデレラプロジェクトによるアイドル部門立ち上げの事務処理などをしている時に武内Pに効率の良さを認められ、引き抜かれる。

最初は何人かいた社員・バイトは激務に耐えかねて徐々に消えていき、その度に乗せようとしてチツヒに（社会的に）殺されかけている。気付けば、プロジェクト初期メンバーとして芸能関係のあらゆる事に精通して普通の社員より働かざる得なくなった。

送迎（バイク&ハイエース）・発注・スケ管理・人員配置などなど上司二人の補助がメインだったが年数を増すたび丸投げされるようになった。やだ、優秀。

チツヒに組まれた地獄のカリキュラムにより単位も就活もギリギリだった（チツヒ的には就活は失敗するように組んだ）。それにより、無事に今春から社会人に。

アイドルからは最初は腐った目のせいで引かれるが、予想の斜め下ばかり着いてくる会話と根は真面目で誠実であることが伝わりと徐々に心は開かれる様だ（ちなみに小梅嬢は初期から好感度MAX）。また、前向きで頑張り過ぎないアイドルにとっては彼のやる気のない反応が程良い息抜きになる事もあるらしい（だいたい怒られてるが）。

ただ、将来のユメが専業主婦と言って憚らないのでよく女の敵だのクズだの呼ばれている。

武内P

真面目で紳士。よく逮捕される。比企谷と一緒にいると囲んでる奴だいたい警察。

仕事しすぎのワーカーホリック。好物はハンバーグ。

チツヒ

「鬼、悪魔、ちひろ」で有名なあの方。武内Pと八幡と同じ大学のOG。その経験を生かした魔のカリキュラムで八幡をバイト漬にした諸悪の根源。

シンデレラプロジェクトのやべー方。

—————

武P 「皆さん、大切な話があるのでご注目願います」

低く呟くような声。それでも、その声を聞き逃す者はこの部屋には誰もいない。ガヤガヤと明るく声を交わしていた乙女たちはたったその一言で佇まいを直し、声の主に視線を向ける。

その目に宿るのは強い信頼と、熱意。この男が命じるならば、全力でそれに取り組んで見せると雄弁に語っている。

見られる方が焦げ付いてしまいそうな眼差しを受けるのは、大柄な鋭い視線の大男であった。その視線に値するだけの成果を、結果を彼は彼女達に示し続けて来た。

彼が起こした伝説的な企画にちなみ、“魔法使い”と呼ばれるほどに。

その彼が、向けられた熱すぎる視線をゆっくり見まわし、重々しく口を開く。

「皆さんお忙しい中でお時間を頂きありがとうございます。こうしてお会いできる時間が減多に無くなってしまいました。それぞれの活躍を聞いたたびに、嬉しく思っています」

その言葉に乙女達が浮かべた表情は、本当にそれだった。

ココに集った誰もが今をときめくトップアイドル。こうやって時間を合わせて顔を合わせる事なんて本当に難しく、彼女達が昔のように集い、談笑する機会は全くという程なくなってしまうのだ。

その喜びと哀愁、そして不器用なプロデューサーの気遣いに最後は

みんな苦笑いで答える。

楓「あらあら、なんだか久しぶりの集合は湿っぽくて駄目ですね。これからは“週5回”で“集合”しましよー！」

川島「……楓ちゃん？」

しんみりとした雰囲気をぶち壊すような陽気な声がお決まりのお叱りを受けた事で室内の湿っぽい空気は笑いへと変わって行く。

きらり「によわー、でも楓ちゃんの言う事に大賛成だにー。きらり、みんなのお顔みたらもっーとハピハピでがんばれるにー!!」

杏「き、きらりはもうこれ以上元気出さなくて大丈夫じゃないかな……。く、苦し、い」

茜「うお——！なんだか熱い展開ですね!!新旧シンデレラ集めてやっちゃいます!?!なんかやっちゃいます!!」

ナナ「…新旧って深い意味はありませんよね?旧は最初にデビューした組の総称ですよ?ね!」

夏樹「私はナナさんの生き方、ロックだと思ってるぜ!!」  
くガヤガヤく

静かだった部屋に活気が再び広がり、各々がやりたい事や展望を語り始める。この眩い輝きこそが彼女達をその地位に立たせているのだと、改めて認識させらる。

凜「で、プロデューサー。今日の話ってなに?その、ホントにそういう企画があるなら嬉しいんだけど…」

明るく未来を語っている彼女達の中から、黒髪ロングの女の子“渋谷 凜”が控え目に話を切り出して来た。無愛想だった昔とは違い、自然な笑顔で問いかけてくるのだから感慨深いものがある。ただ、惜しむらくは彼女の淡い期待に答えられるような報告では無い事に胃が痛む。

そんな俺の憂鬱さが移った訳でもないだろうが、武内さんが気まづげに首元を抑えるいつもの仕草をしながら言葉を紡いでいく。

「いえ、将来的にはその企画もやってみたい企画ではあるのですが……今日は残念なお知らせをしなければなりません」

その一言に、部屋の空気が固まった。姦しくも温かかったその空間

に緊張が満ちてゆく。

重苦しい重圧に俺の胃がきつく締めあげられる。次に武内さんが発する言葉を今からでも取り消したい衝動に駆られるが、そんなことはいまさら出来ない。

自分はサイを投げ、もう目は出てしまったのだから。

「シンデレラプロジェクト」発足時から皆さんや自分を支えてくれていた比企谷君が大学の卒業と共に就職し、この役職を離れる事となりました」

「「「「「「.....」」」」」」」」

小さく息を整えた武内さんがそう言い切り、しばしの時間が流れる。

言われた意味が実感を持って伴わないのか、彼女達はゆっくりと武内さんの隣に立つ俺へ視線を移して行く。

どいつもこいつも一癖二癖ある変人と言って差し支えない奴らではあったが、素人から駆けあがって行くこいつ等を支えて、昇り詰めていく彼女らは間違いなく尊いものだと思った。

だからこそ全力で応援して来たつもりではあるが、この会社を去る自分にはもうそれは叶わない。

そんな自分に彼女達がどんな言葉を投げかけてくるのか、恐くてたまらない。だが、それすら受け取らずに逃げ出す事だけはしたくなかった。そのために武内さんに無理を言っただけで彼女達と最後の機会を設けて貰ったのだ。

続く沈黙に、なにか言うべきかと口を開けかけた瞬間に微かな掠れた音に口をつぐむ。

それは、ほんの少しずつ数を増し、遂には大きく、弾けた。

「「「「「wwwwwwwwwwwwwww」」」」」」

『どわはっはっはー』と吹き出しが入りそうな程の大爆笑である。なに？妖怪の仕業なの？

え、なにこれ？八幡急な展開の変化についていけない。シリアスパー

トじゃないの？これ？

唐突なアイドル達の反応に俺も、武内さんも戸惑いを隠せず困惑している。彼女から次々と言葉が飛んでくる。

星「ふふふひひひひひ!!し、親友が、しゅ、しゅうしよくWWW  
WWW!!」

周子「あつはつはつは!!マジで!!てか、留年じゃないんだ!!単位この間までギリギリだったのにWWW!!」

杏「ねえねえ。就職先はどこ？養ってくれるププツ、奥さん見つかったのWWW!!杏にも紹介してよー」

蘭子「折れし翼を休め再び羽ばたかんことを!!(また、がんばりましょう!!)」

……ここ、コイツら。てか、誰のせいでギリギリになったと…チツヒのせいだったわ

奈緒「しつかし、あんたらも人が悪いよな。大層な話かと思えば比企谷のドツキリかよ。一瞬、ビビっちゃったぜえ!!」

みく「ホントにや!!悪ふざけも度が過ぎると悪質にや!!」

リーナ「ちよつとWW就職しましたの報告がわるふざけて言い過ぎWWW!!」

……いや、マジで受かったんですけd

新田「比企谷君、失敗は決して恥ずかしい事なんかじゃないわ?そこから新しい自分を見つける事だって出来るわ?」

アニヤ「ダー!!これからも、がんばりましょう!!」

紗枝「ほんに、いけずやわー。万年就職希望が“専業主夫”の人が何をゆうとんのやらww」

文香「その目、私は好きですけど…」

……大笑いされるよりもしんみり言われる方が傷つくな。



幸子「まー、しょうがないですから？もう一年くらい世界一可愛い僕の面倒みさせてあげてもいいですよ!!」

まゆ「もうちよつとしたら養って上げますから、そんなに焦らなくて大丈夫ですよ!!」

拓海「まあ、他で内定貰えなかった事くらい気にすんなよ。辛いココで仕事は続けられんだから自暴自棄になんたって」

楓「採用、さいよう・・・さい、ハッ！即採用なんて、うそくさいよう!!」

くどわっはっはっはっは!!く

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・プツン。

武内P「あ、あの、皆さん。今回の件はドツキリとかで「うつせー」!!てめえら俺が就職すんのが、んなに滑稽か!!」

武内さんが気まずげに何かを喋りかけていたが、思わず俺の怒髪天が天をついてしまった。

八幡、：久々にプツンきちまつたぜ。

「もーいい!!ちくしょう!!人がせつかくシリアスにお別れの席を設けたのに!!お前らあとで泣いてもしらねーかなー!!俺が居なくなったら誰がロケ弁発注すると思ってるんだ!!言つとくけど、あそこまで鬼チツヒ予算で最上級の物なんか用意できる奴なんかいねーかなー!!」  
ちひろ「：ほほう、もつと削つてもいけたみたいですね」

なんか背筋が冷えたがもうここまできたらいい逃げだ!!い、いったれ!!

「てか、誰のせいでこんなギリギリまで単位と就活遅れたと思ってんだ!OBだつていう武内さんとかひろさんにカリキュラム聞いたらほぼココのバイト一色になる様なスケジュールなつてたんすけど!!おかしいでしょ、夜間部の授業単位まで受けてギリギリってのは!!」

あ、チツヒと武内さんが目をそらしやがった。コイツら。なんか「いや、ちよつと興が乗りすぎまして…」とかいつてつけどぜつ許。あーもう、ココまでできたら今日は言いたい事全部吐きだして行つてやる。大学四年間でために溜めた俺の愚痴を受けてみる。

そつからは何を言つたかあやふやだが、なんか日頃おもつてた事を一人一人になんか言つてた気がする。みりあはいい子過ぎるだの、森久保はもつと自信もてとか、なんか勿体ないんだけどバイトとして口挟むのもなく的な奴を全部ぶちまけた気がする。あと、なんか最後に酸欠気味に何かを叫んだ気がするが頭が痛いので思い出せない。

怒りが醒めて、気がついたらみんな顔真っ赤で相当怒つてるぽかったからヤバイ事だけは分かった。久々の黒歴史殿堂入り事件入荷である。ちなみに八幡は真っ青になってた。低血圧を疑うレベル。べー。マジべーわ。

4年間それなりに必死に努めて来たバイトの最後がこれとはなかなかな結末だけど、まあ、下手にお涙ちようだいとならず丁度よかったかも知れん。笑つて、怒つてくれたならこつちも飛び立ちやすいつてもんだ。

美少女達に泣く泣く引きとめられでもしてみろ。常務が投げつけて来た契約書に印鑑とサインしてしまふまであるボツチのちよろさ舐めんな。

そんな結論で自分を納得させ、ちよつとの寂しさと笑いをかみ殺して俺は部屋を出た。

なんか、武内さんが呼び止めたそうにしてたけど何だろうか？まあ、真面目な人だから段取り的な物を最後までしたかつたんだろうが俺らにはこれくらいがちようどよさそうなので勘弁して頂こう。

記憶があいまいなままだが色々ぶちまけたせいか気分がよくグツと背を伸ばし、窓から覗く桜のつぼみを見つめ、新春からの新しい生活と彼女らの活躍に思いをはせた。

社畜とアイドルに幸あれ!!

加蓮「いやー、今日は面白かったわー。まさか武内Pまであんな悪ふざけに乗ると思わなかったもの」

奏「意外ではあったわね。まあ普段はふざけた事しか言わなくてもやっぱり比企谷君にも意地はあったんでしよう?」

奈緒「アイツにそんななんあった方が驚きだよなー。逆に安心したよ」

周子「まあ、私もニートしてたから分かるけどなかなかしんどいんよ?そら卒業式二週間前に単位ギリギリ取った男をとる会社なんかあらへんやろけど、大手を振って他に内定無しとは言いづらいもんやって」

ま、私はそれで大手振ったから勘当されたんやけどー、と笑う彼女に苦笑が走る。

卯月「んー、皆さん笑ってましたからてつきり冗談なのかと思ってましたけど、ホントだった場合どうなるんでしょうか?」

未央「ちっちちちー、甘いなー。甘いよしまむー。武内Pは言ってたじゃん?」この役職を離れる”って”

卯月「どういう事ですか?」

未央「つーまーり、会社からいなくなるとは言ってないんだよ!!」

卯月「……あ、そういう事です、か!」

その場に居るアイドルが一様に大きく頷く。

美優「まあ、そんなギリギリの学生を雇う会社なんて普通ないし、この業界だと新入生は顔合わせを兼ねて色んな部署を回る事になりますからね。まあ、少し寂しい気もしますが戻ってくるまでの我慢ですぬ!!」

みく「ホーンと悪質な冗談にや。自分が一般企業の内定取れない恥ずかしさを誤魔化すためにあんなドツキリ仕掛けるなんて!!ミク達が真に受けたらどうするつもりだったのよ!!」

卯月「みくちゃん素が出ちゃってるよ…。で、でもでも、それはいい方の問題でホントに辞めちゃってたら!」

拓海「うーん、むしろそっちの方が難しじゃねえか?普通、あそこまで食い込んじゃまったら逃がさねえだろうし、大体、常務とちひろ

さん、武内Pのお気に入りでろアイツ。業界大手の大御所三人に気に入られてる人間を引っこ抜くなんて相当気合いがいるぜ？それが他業種だとしてもな？」

卯月「な、なんかそう言われてみると比企谷さんにそれ以外の選択肢がなさそうに思えてきますね」

凜「それに、卯月だって聞いたでしょ？最後にアイツが言ってた言葉」

卯月「う、ううホントにあんなストレートに言われて恥ずかしくなっちゃいましたよ」

杏「全員の痛いところ。いいところも悪いところも、ゼーんぶ指摘してって最後に“俺はお前らの全員のファンだぞ!!頑張れ!!”だもん。ホント恥ずかしいよね」

凜「あんな恥ずかしい事を宣言する奴がこの会社辞められる訳ないじゃん？」

楓「あんな事言われたら、アイドルも愛取られちゃいますね？」

くどわっはっはっはっは!!く

文香「新入生の入社式は4月1日らしいですね」

ありす「じゃあ、その日にあのマダオをみんなで笑いに行つてやりましょう!!顔真っ赤にして恥ずかしがりますよ!!」

夏樹「お、いいね!その案私も乗ったぜ。みんなはどうする？」

その他「さんせ—!!!」

やんややんやと姦しく、騒がしく、そして楽しく笑う私たちは意気揚々とその日を待ち望み、せわしなくも過ごすうちにその日を、迎えました。

ただ、どんなに見直しても新入生の一覧に、彼の名前が見つかる事はありませんでした。



## その2

く346プロ 某地下倉庫く

凜「え、え？話が違うんですけど？誰？無責任に”ドツキリだー”とか騒いでた人？え、未央さんでしたっけ？」

日の差さない地下倉庫の中、集まる乙女を照らすのはいくつかのカントラの明りのみ。そんな中、響く声は最早ホラーを通り越して、スプラッタのワンシーンだ。更に、その主演女優たる少女の瞳孔が開ききっているのだから今期のノミネートは間違いない出来だ。

未央「あつつ!!あつついから!!低温蠟燭なんてどっからパチツて来たのさ、しぶりん!!てか、それは皆で同罪じゃないかなー!?私を磔にしているのは、あの時笑わなかった人だけツツツツツあつつー！ー！ーい!!」

なんの企画で使ったのか分からないが置いてあつた磔セットにあられもなく張り付けられた未央の悲鳴がどうにもコメディぽく地下室に響く。そんな尊い犠牲を脇に他のメンバーが膝を突き合わせて協議を進めていく。

拓海「嫌でも実際、あの退職宣言がマジモンとは思わなかったぜ。いくら笑われて腹が立ったて言ってもそれで安定を手放すような馬鹿でもないだろ？」

紗枝「そうどすねえ。346が激務なんはウチラも身を以って知つとりますけど、待遇だけを考えるならここを超える様な所そうあらしまへん。ましてや、あんな状況やろ？」

単位ギリギリ・バイト三昧・就活期間2週間・性格。この目も当てられない四拍子が揃っているなら、マトモに就活に励んだとしてもココよりよい条件が難しい事は分かっているはず。バイトだった時でさえ一般社会人の給与は大幅に超えていた。ソレを超えるメリットは一体なんなのか？

周子「うーん、さらに言えば武内Pは分かるけど常務、部長、ちひろさんがあそこまで育てた人材を逃がすともおもえへんしなあ？」

武内Pは性格上、本人の強い意向ならば身を引くのも分るのだが、

他の三人はそう甘くはない。実際にちひろさんがあの手この手でちよくちよく辞めようとするあの男をやり込めていたのは周知の事実。

なんなら上の二人は必要とあらば、もっと直接的な圧力をかける事に躊躇いはないはずだ。この業界が長ければそのクラスの人間の黒い噂は嫌でも耳に入ってくる。

川島「て、ことは。あの二人に釘をさせるほどの後ろ盾。もしくは、比企谷君を手放しても惜しくないくらいの旨みをどっかの誰かに提示されたってことよねー？」

たかがバイトの進退一つに何を大げさな、と考えなくもないがこの巨大プロジェクトの実権を握る二人の仕事をたった一人で補佐しきる人材は探して見つかるモノではない。彼自身、自覚はないかもしれないが、学業との片手間でソレをやり切ったというのだから大概イカレている。

奏「でも、その彼の仕事っぷりを知ってる人間も結局は芸能関係に絞られる訳でしょ？前提が破綻しちゃうわ」

状況を考えれば考えるほど今回の件は不可解な点が多い。そんな謎ときに皆が唸る中、小さく鼻を嚙る音が響き視線を集めた。

仁奈「仁奈は難しい事も、おにーさんが居なくなつた理由も分らないでござーます。でも、おにーさんと最後に会つたとき仁奈、”ありがとう”って言えてないで、ござー、ます。あんなにやさしい”頑張れ”もらったのに、お返し、じとつもできてないでござーます!!」

「「「「.....」」」」

それは、きつとみんなが気付いていて、ちよつとずつズルして触らない様にしていた、核心。

何とか彼が辞めた理由を彼自身の中に求めたかった。

あんなに全部、良いところも欠点も見えてくれた彼が去つた理由を、自分たちの中に見つけたくなかつた。

そんな自分たちの醜い部分は何時だって彼が皮肉気に笑って請け

負ってくれていたから。

いなくなつた今だって、それに甘えようとしている。

どれだけ甘やかされていたのかを、思い知る。

「…だからだよ」

誰もが、俯いてしまつた中で凜とした声はその沈痛をうち切る。

その声に魅かれる様に、目を向ける。

握りしめた拳は真っ白になるまで握られ、悔しげに噛みしめられたその唇は微かに血が滲んでいる。

だが、その瞳だけは何処までもまつすぐを見据えている。

凜「きつとアイツはいまさら謝罪なんか求めないし、引きとめて欲しくなんかない。居なくなるぞって言う時に大笑いした私たちにアイツは楽しげに好き勝手にいって”頑張れ!!” って言つて出て行つたんだ。だつたら、アイツが居なくなつて前に進んでいける所を見せてやる。それだけがきつと、私たちが出来るたつた一つのお返しなんだ」

その瞳に、迷いはない。だが、たつた一つの後悔だけは、滴となつて地面を叩いた。

願わくば、最後に、たつた一つだけまた甘える事が許されるならば。

「ごめんね、ありがとう比企谷」

この一言を呟く弱さを、彼に願おう。

その一言に、張り詰めていた全員の糸が切れた。

涙を流すもの、肩を寄せ合うもの、至らなさに壁を叩くもの。

様々な感情を抱きつつ、彼女らは己の弱さと醜さを受け入れた。

楓「だ、そうですけど。どうします、武内くん？」

そんな空気にまつたくそぐわぬ穏やかな声と共に軋んだ扉の向こうから気まぎれに現れる巨軀の男。

まつたく誰もが状況が分からぬまま固まつた空間を彼はゆつくり見まわし、ゆつくり口を開く。

武内P「とりあえず、その蠟燭を片づけてください。…渋谷さん」  
蠟まみれになって何かに目覚めかけている未央の事は触れないだけの慈悲が一介のプロデューサーにもあつたのだ。



武内P「おおよその経緯と誤解については、かえ…高垣さんからお聞きしています」

そうゆつくりと語る彼の前にはきっかり正座で構えるトップアイドル群。なかなかシニールである。

武内P「私の言い方の問題もあつたのでしようが…正直なところ、あんまりな彼への対応に思う所も多々あります。ですが、彼の日頃の口癖を聞いているとそんな誤解が生まれてしまったのも仕方ないのと、先ほどの貴方がたのお話を聞かせて頂き、迷いも産まれました」滅多に見せない彼の強めの言葉に何人かのアイドルが吐血しながら地に伏せ、その他も脂汗や気まずさで軒並み挙動不審だ。客観的にみていた彼からすればまさに悪鬼の所業だつた事は想像にかた過ぎる。

そんな彼女達を見て彼は小さくため息をつき、言葉が続ける。彼はゆつくりと懐から携帯を出す。

「本来は余計なお節介なのかもしれませんが…貴方がたの新たな決意を、思いを知らないまま彼がこの仕事を辞めてしまうのは少々残念です。彼には、やって来た事の成果を実感する権利があります」

呟くようなその言葉を理解すると、取り戻せないと思っていた何かを、取り戻せるかもしれない。そんな期待に彼女達は思わず顔を明るく見合わせた。

「ただし、彼が承諾してくれた場合のみです。それに、もう関係者でない彼にあなた方が全員で押しかける訳にはいきません。会いに行けるは一人だけです」

その一言に、視線は自然と一人に集まる。集った視線に臆する事もなく、彼女は力強く頷き微笑む。

凜「うん。行ってくるね、みんな!!」

晴天の春の陽気は緩く空気をほぐし、それにつられた様に桜のつばみもその身を華やかに散らしている。軽やかに舞う花びらは、こ洒落たカフェテラスにも流れてゆったりと俺のコーヒーに流れ着く。

行き先ならいくらでもあるだろうにこんな所に態々来る不躰者に軽く片眉を潜めて遺憾の意を示してみるが、当の本人はこちらの意向など知った事かと真っ黒な湖面をゆらゆら舞うばかり。そんな気まぐれで不遜な姿に溜息を洩らし、これも春の風情とそのまま頂く事にする。

「…コーヒー相手に何を一人で百面相してるの、気色悪谷君」

口に広がる苦さに顔をしかめていると、心底呆れたような声を掛けられた。

「春の風情って奴を感じてたんだよ。あと、ナチユラルに名前を悪口に変換すんのいい加減辞めろ、雪ノ下」

「あら、てつきり友達がいなさ過ぎてついに食器相手ににらめっこを始めたかと思つて心配して上げたのにご挨拶ね？」

流れるように交わされる会話の剛速球（一方通行）に俺は顔をもっとしかめてしまい、俺の向かいに座るタイトなビジネススーツに身を包んだ“雪ノ下雪乃”が楽しげに笑う。

「失礼な事言うな。にらめっこなら産まれてこの方負けなしだ。なんなら見つめ合わなくても向こうが勝手に笑いだすまでである」

「はいはい、それは良かったわね。人を笑顔に出来るって素敵な事だわ。才能があるのね」

「…もうその優しげな視線が何よりの暴力つてのもある意味才能だよな」

優しく嗜めるようなその表情が何とも癪だが、少なくとも今日の彼女は随分上機嫌であるらしい事が窺えた。昔と変わらぬ紗のような黒髪は陽光を受けて艶やかに輝き、華奢で儂さすら感じる造形はいつもと変わらない。だが、いつもならば冷たさすら感じてしまうその伶俐な表情は、朗らかで優しげだ。理由は分からずとも無闇に藪を叩く必要もないので鼻を一つ鳴らして鋒をおさめる。

なにより、今日というハレの日を迎えられる恩人相手に毒舌合戦を仕掛ける必要もあるまい。

「しかし、良かったのか？初っ端の同期の奴らの集まりについてなんて。社会人じゃああいうのってたいせつなんでしょう？」

「適当な話題転換のつもりだったのだが、胡乱気な視線を向けられしまう。今日だけで睨めっこだけでなく蛇を引きよせる才能まで発覚してしまった。そりゃ友達もできねえわけだぜ。」

「ええ、そうね。学校と違ってながーい付き合いになる人たちとの大切な集まりを間髪いれずに断ろうとした誰かさんの用事が終わったら、参加させて頂く事にするわ。…誰かさんを引きずってね」

刺々しい言葉に気押されつつも、どうにも要領を得ない。入社式というハレの日で当然のように企画された同期達の宴会。友でありながらライバルである同世代の人となりを知るにおいてそれは様々な観点から見ても必要な行事で、それ如何によつては今後の立ち位置だつて変わってしまう。まあ、しかし。自分がそれに参加したところで結果はお察し。壁の花となれば良い方で、居るだけで盛り上げてしまう人種が居ては迷惑だろうから別件の用事を優先させたのだが…何故か雪ノ下が俺の頭をひっぱたき後ほど合流という流れにされてしまった。

社長令嬢でいつか自分がその社長の座につかんとしている彼女が、コネと温情で拾って貰ったような自分と関係を勘繰られて不快な思いをするのはどうにも忍びないし、今後を考えるなら控えるべきだ。という事を説明すればさらに大きいため息をつき「なんだか昔より拗らせてるわね、この男…」などと呆れたように呟かれた。意味が分からない。

「まあ、その辺はおいおい修正していくとしても今日の用事っていうのは何なのかしら？アナタにしては珍しく嘘じやないのは分かるけれど、今日で無ければダメだったの？」

「なんか前のバイト先の上司から電話が来て、大切な話があるらしくてな。詳しく聞こうにもどうしても直接にしてくれないかつて言われてたから会うまで内容は分からんけど、もしかしたら、退職か事務

関係でなんか不備があつたんじやねえか？」

「まさかと思うのだけれど、入社式まで済ませておいて今さらごねようって話ではないでしょうね？」

何気なく答えると彼女は整った眉をほんの少し潜めて聞いてくるが、それに關しては苦笑を返すしかない。

武内さんは言わずもなが、チツヒにも渋々といった体ではあるが了承を得ているし、肝心のアイドル達とは黒歴史確定級の清々しいほど派手に別れを決めて来た。ココまでやつといてあつちに戻れる程のハートは持ち合わせていない。

そんな俺の様子を見て彼女も眉間のしわをゆっくりとほどいて、微笑む。

「ま、そうだと良いのだけれどね。貴方はいつも甘いからせいぜい絆されない様に気を張っていないさいな」

桜が舞う中、悪戯っぽく笑う彼女に思わず見とれ、頬が少し熱くなるのを誤魔化すように視線を逸らす。そんな憎まれ口を叩く彼女が自分の為にあつちこつちに駆け回って、頭を下げ回ってくれた事を知っている俺は思わず心の中で悪態をついてしまう。

本当に甘いのはどっちだよ。

そんな心の声が聞こえたかどうかは分からないが彼女が今さら、といった感じで聞いてくる。

「そういえば、約束の時間は何時なの？待つのは構わないのだけど、あまり時間が掛かるならあつちのグループに連絡しなければならいわ」

言われて時計を見てみれば待ち合わせの時間まで後10分といったところだ。

生真面目なああの人の事だからそろそろ――

「比企谷！！」

聞き覚えのある声が、俺を呼んだ。

### その3

プロフという名のあらすじ

佐久間 まゆ 女 16歳

皆さんご存知、仙台の星“ままゆ”。優しく、気立ても良く、美人で、一生懸命という何拍子も揃ったスーパーアイドルである。東北女子らしく“毛も深けりや情も深い”との名言に違わず色々拗らせている。やだ、東北怖い。

小早川 紗枝 女 15歳

“舞子はーん”ならぬ“紗枝はーん”でお馴染みの彼女。京都人特有の言葉づかいは一見嫌みに聞こえるが、京都人特有の奥ゆかしさを理解すると気遣いに溢れている事に気付かされる。

紗枝「せっかくどすから、ぶぶづけでもたべなはれ」  
さて、貴方はどつちに聞こえました？

松永 涼 女 18歳

クールであり、パッションであり、キュート。万能系イケメン女子である。アイドル部門でも珍しい常識人であり、危険分子のお目付け役でもある。最初は胃を痛めていたが、最近は息するようにお世話しているので良いお母さんになりそうだともっぱらの噂である。『おまえがママになるんだよ』待ったなしである。

聞き覚えのある、と言うと少し語弊があるかも知れない。

涼やかで、その名に相応しい澄み渡った声は聞いたことがないくらい弱々しく震えていたから。

「…そんな日数経ってねえのに久々に会った気がするな、“渋谷”」  
「っ!!」

彼女の目深にかぶった帽子と眼鏡の奥の瞳が意図的に取られた距離感に不快感を表すが、あえてそれを気がつかない振りをして、ゆくりと周りを見渡す。

「武内さんが居ないって事は…用があんのはお前の方か。どうした？向こう二月分くらいの引き継ぎと書類に関しては個別に作ったファイルに纏めてるから「比企谷」

見え透いたその場しのぎの言葉を弱々しい声が遮る。

「仕事、辞めるって…本当？」

半ば予想していた問いかけ。そして、紡がれぬ事を願っていた言葉だ。

あの時、彼女達の前で問われなくて本当に良かった。たった一人でこれなら、全員分のならばきつと耐えきれなかったかも知れない。終わりが見えている物語に、あるはずのない未来にみつともなく縋りついていたかも知れない。でも、役割を終えきつた今だから偽りなく笑って答える事が出来る。

ほんのり苦さを伴いつつも、本心から、笑えるのだ。

「ああ、この前話した通りだ。どうした？弁当のグレードが落ちて早速、俺が恋しくなったか？」

「………なんでか、聞いても良い？」

茶化すように問いかけた言葉は絞り出すような彼女の言葉に塗りつぶされてしまう。

俯いた彼女の表情は窺う事が出来ないが、震えるほど握られたその指は怒りか悲しみか。或いはどっちも混ぜ込まれたものなのか、俺には分からない。だが、嘘だけは吐くべきではないのだろうと小さくため息をつき、言葉を紡ぐ。

「俺が、お前らにしてやれる事はもうやり切ったからさ」

「ツツ!!そんな事は「あるんだよ」

凜が俺の胸倉を掴み掛かり、激昂するのを遮る自分でも驚くほど冷めた声が出た。

「そんなこと、ないよ…」

「あるんだよ、“凜”」

かつてと変わらぬその呼び方に彼女の顔がくしやりと歪む。それでも、俺はもうその溜まった滴を拭う資格は無くなったのだから手をそつと震える彼女の手へと重ねた。

最初は、楽なバイトだと思ったのだ。

支給された車で指定された場所に指定された時間で送り届けるだけ。空いた待ち時間でちよつと設営や雑務を手伝えれば更に追加報酬。決め手は無口であればある程に好ましいというのも魅力的であった。送迎対象がアイドルの卵たちだと知った時にはさすがに肝を冷やしたが、「無口」という点で納得もした。余計な因子はちよつとでも省きたい業界として、それはある種のステータスですらあったのだから、自分でも雇われた理由は驚くほど納得できた。

だが、こつちが無言を心がけているのに好き勝手に暴走する彼女達に思わずツツコミを入れてしまったのが運の尽き。案山子かと思っていた運転手が移動中の暇つぶしに使える事が分かると仕事は一気に面倒になったのだ。やれダジャレの品評会だの、おすすめホラーだの、世界一可愛い娘のヨイショだの乗せる度にどうでもいい事に付き合わされる地獄と化した。

気がつけばバイトを紹介した先輩は消え、アイドルに同伴してたマネージャーも減り、雑用をこなしていたはずのニーちゃん達も居なくなつて、アイドルは倍増していた。

人は減つても、増え続けるアイドル。

それらが頭打ちになるまでには事務所のスタッフは三人までになつていた。

そこで、辞めればよかつたのだ。楽な仕事がそうじゃ無くなつた。たつたそれだけの話でいつものようにバックれてしまえば良かった。与えられた仕事を投げ出せば自分はお役御免。ただのバイトに責任感など不必要。そう思つて実行した事だつてある。

そんなときに送られてくる一言は決まつて『彼女達、待ってますよ？』という悪辣なメールだ。

人の仕事に好き勝手文句言いつつ、ステージが終わつた後に満面の笑みを浮かべてくる彼女達を人質に取る悪辣な事務員からの一言が

俺を働かせ続けた。

どうせ辞められぬならと、全てのスケジュールを網羅して、金に飯、メイク、発注、全てを最適化して纏められる物は纏め、彼女達の自助努力で出来るものは全てをやらせるようにした。

常務に目をつけられて厄介事に巻き込まれました。

彼女達個人の悩みを打ち明けられ、彼女達も人なのだ気づいた。

そうして、

馬鹿みたいに働いているうちに、彼女達は、手も届かぬほどの星となっていた。

“自分が押し上げた”などと自惚れる事が出来るほど恥知らずではない。彼女達は最初こそどん底であったものの、その中でも誰にも負けない輝きを放っていたのだから何時かそこに至っていたのだ。

それに気がついたときにふと見回してもうひとつ気がついた。自分は何にも持っていない事に。

大学四年の単位ギリギリで就活未定。バイト三昧で使う暇のなかった莫大な貯金通帳。絵に描いたようなクソ野郎がそこにいた。

もう一度、彼女達を仰ぎみれば嫌でもまた気づいてしまった。自分のやって来た事は、もう、彼女達には必要のない事なのだ。

人も、予算もないからこそ重宝されて来た。トップアイドルになった彼女達の周りには器用貧乏な自分には及びのつかないほどの一流がその席に名乗りを上げている。

それでも、何か無いかと言いつつ訳を探して絶望した。

原石を見つけ、宝石へと磨き上げたのは自分では無い。

武内さんの並はずれた真摯さと情熱がそれを彼女達に決意させていたのだ。

無から有を絞り出す様なちっぽけな運営資金をココまで膨らませたのは自分では無い。



ちひろさんの化け物じみた経営能力があつてこそその運営だったのだ。

考えれば考えるほど代えの聞かない大役を演じていたのはいつだってあの二人だ。俺はいつだってその補助だけで、二人がやって見せた事なんて出来やしない。誰にだって出来る仕事なのだと思ひ知った。

自分は、4年間、代用品、、、だという事も忘れていた本物の大馬鹿野郎だったのだ。

常務からの正社員の誘いに揺らがなかつた訳では、ない。

それでも、彼女達以外の誰かに自分が全力を出すのはどうしたってしつくりこなかつたのだ。

だから、例え就職が失敗していたとしても武内さんの元に残る事は無かつただろう。

あれは俺にとっては、仕事、では無かつたのだから。

じゃあ、何だつて？言わせんな恥ずかしい。

「…言つてよ。コレが、最後なんだし、さ」

掴んだ胸倉に押しつけるように頭を寄せる凜の声はわななくように震えていて不覚にも笑つてしまう。

普段は生意気で口うるさいコイツラだが、こういう所だけは似通つている。みんな揃いもそろつてひねてしまつてやがるのは誰の影響なんだか。…俺か？

「お前らは俺の『夢』だった。お前らが叶つたなら、もう俺はあそこ  
に未練はねえよ…言わせんな、恥ずかしい」

慣れない事を言つてる自覚はあるが実際口に出すのは恥ずかし過ぎて死にそうだ。

勘弁してくれよと深く溜息をついていると凜は人のシャツに頭を  
ごしごし擦りつけ、俺のポケットからハンカチを抜き取つて盛大に鼻  
をかんだ…おい、ポケットに戻すな。

盛大に顔をしかめている俺を彼女は軽く両手で突き放し、そのまま  
結構強めに俺の胸板にパンチを放つてくる。

「…辞めた事、後悔させるから。泣きつくなら、今のうちだよ?」  
「おう、やってみろ。ずっと見てやるから」

真っ赤な目じりや垂れてる鼻水を啜りながらも不敵に笑う彼女は、どんな撮影の時より輝いて見えて魅力的で思わず頭を撫でてしまう。こうやって気安く触られる事を嫌っていた彼女が今だけは誇らしげに笑っているのがちよつと惜しくなってしまう。

見上げた星に手は届かずとも、その名と、物語を俺は生涯忘れはしない。

何度だって見上げてそれを語ろう。

だって自分がかつてそれが夢追うタダの少女だった事を知っているのだから。

「…えっと、その、比企谷君?そちらが前の会社の方で良いのかし、ら?」

がつつりワールドを展開していた所に遠慮がちな声を掛けられ急速に現実に引きもどされ、状況を認識する。

気まづげな雪ノ下。

“なんかの撮影?” “カメラどこ?” などと騒ぐ周りの客。

今さっきまで言っていたハズイ台詞を反芻、爆死↑いまここNEW !!

「ち、違います!!いや、違わないんだけど!!違います!!」

爆死して自分の痛さに気付いた瞬間に密着していた凜から大幅に距離をとる。なんだこの浮気現場を見られた亭主の様な反応。もちつけおれ。

「だ、大丈夫よロリコン谷君。私は誤解なんてしていないわ。そうよね、いくらアナタでも未成年に手を出すほど落ちぶれてはいないはずよ…。YESろりーた、NOたっち」

「お前も大概動揺してんな!!?てか凜そこまで幼くねえだろ!!」

「嘘よ!!完全に変質者の目をしていたくせに良く言えたものね!!この犯罪谷君!!」

「てめえ!!」

くけんけんがくがく

喧々諤々と混乱している俺たちが言い合いをしていると、後ろから震える様な手によって中断された。

「ひ、比企谷？そ、その人とど、どういった関係？」

なんかさつきよりも形容しがたい表情をした凜がわなわなと雪ノ下へと指を指すが、一体こいつはどうしたんだろうか？ロリ呼ばわりされたのがそこまで腹たつたのか？若く見られるのも嫌とかマジで思春期ムズイな。

一方、指を差された雪ノ下はさつきまでの剣幕はどこえやら行ったのか、若干頬を染めつつこちらに一歩距離を寄せてくる。

「と、突然、そう聞かれると困るモノね。なんと言ったら良いのかしら。：そうね、彼とは親しくさせて頂いてるわ」

ん？まあ、付き合いもそこそ長いので表現に困るのは分かるのだが、普通に会社の同期とかでよくないか？雪ノ下にしては珍しいミスだかもしれないがまださつきの動揺から立ち直って無いのだろうか？

「ひ、親しい・・・仲っ!？」

「は！う、とつても、親しくさせて頂いてるの」

「?????!!」  
「な、なんだこの二人のやり取り？意味は分からないが、ひたすら空気が重いぞ？周りの客もなんか帰っちゃったし。なんなの？」

謎の緊迫の視線の交錯は一分ほど続き、凜がよたよたと出口へと向かって行く。

状況はさつぱり分からないが、あんな状態の女の子を一人で帰らせるのはさすがに不味かろうと彼女のあとを追おうとすると急に強い力で腕を引っ張られ、近くの椅子へ腰を落としてしまう。

“ ジョゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴオオゴオゴ ”

目の前に置かれたカップにやたら高い位置からポットのお湯がそそがれ、立ち上る湯気の先にはにっこりほほ笑む雪ノ下。

「さて、” 簡単な運送業 ” と言っていたバイトが何であんな可愛い女の子が関わってくるのか、じっくり教えてちょうだい？比・企・谷・

君？」

微笑むその姿は天使のはずなのだが、なぜこんなにも悪寒が止まらないのか…誰か詳細キボンヌ。

### 346 デレマス詰め所

松永「…えーつと？みりあちゃんの解読によってだいたいの経緯は分つたし、アイツなりに考えて辞めたつてのは分かるし応援してやりてーんだが、そろそろ立ち直れよ凜？」

凜「…ぜ s d f g y j i p e s r t f y ふい p d r f y ふじこー」

みりあ「ふむふむ、まだまだ立ち直れないつてー」

松永「めんどくせーな。別に“彼女”確定つて訳でもないなら良いじゃねーか。大体、それよりも恥ずかしいやり取り前半にしといて何言つてん「背 f 対 k i p h j g d j c i d k f v b s n d ああああ  
!!!」

みりあ「そこに触れるな!!?だつて」

松永「お、おう。みりあちゃんマジ万能翻訳だな…。人語の発音じゃなかったぜ（ゴクリンコ）」

紗枝「まあ、しかし、えらいよわかりましたなあ？まさかほんまに退職とは思いまへんでしたわ〜」

茜「むむ？確かにずっとフォローしてくれてた比企さんが辞めるのは確かに残念ですが、割り切り系の紗枝さんがそういうのはめずらしいですね!!やっぱり、紗枝さんも寂しいんですね!!分ります!!」

紗枝「んー？まあ、寂しいし、あの人ほど丁度ええ人もおりまへんですけどウチが言ってるのは多分別件どすえ？」

茜「どういう事です？」

紗枝「だつて、プロデュース業やめるーゆうことは『アイドルに手ーだしてもおっけー』ゆうことやろ？そなことあらへんと思うけど、比企谷さんがもしその気の娘がおつたらなんやコロッと騙されんか心配なんよー」

その他 「「「「「????」」」」」」」」  
!!!????

スッ

松永 「待てよ、まゆ。：何処行くんだ？」

まゆ 「…お手洗いですよー？」

松永 「なら鞆は必要ねえよな？置いてきな」

まゆ・松永 「……」

まゆ 「うふふ、今日はメイクのノリがわるくつ——て!!! (クラウ  
チングスタート)」

松永 「逃がすな!!あのマジきちなにすつか分かんねーぞ!!」  
その他 「おえー!!!逃がすな——!!!」

ドタドタと綺麗なお城には似つかわしくない騒がしい喧騒と共に  
美城常務の怒声が今日もけたたましく響き渡り、武内Pの胃痛は今日  
も深まるのでした、とき。

「紗枝「みんな行きましけど、いかへんでええんどすか？」」

「……………あなたのそーいう所嫌いや」

幕間1く千川ちひろは解からないく

プロフという名のあらすじ

美城常務（専務？） 女 ピー歳

荒らぶるシンデレラ達をまとめ上げる鉄壁の女「ミシロ・サン」。  
破天荒過ぎる彼女達とそれを容認するP達にかつてぶちぎれ大幅な  
整理（大乱闘）を行った事があり、業界内では多くの賞賛を浴びてい  
る。社内では好き勝手に言われてるが対外的にみれば至って普通に  
有能な取締役。むしろ、今までがやばかった。頭痛薬が友達。チツヒ  
とは親戚関係であるらしい。

今西部長 男 50代？

いつも笑顔で人を安心させるような人物。修羅場は華麗に避け、終  
わったところに現れ纏めて手柄を搔っ攫ってゆくその超人的嗅覚が彼  
をこの地位まで押し上げた。まさに管理職の鏡である。闇が深い。

明かりも落ち切った社内唯一光を上げている部屋を見かけ立ち  
寄ってみれば、見知った顔が眉根を寄せて唸っていた。

「精が出るな、ちひろ」

「美城さん!!どうしたんです?こんな遅くまで!」

「それはこっちの台詞だ、馬鹿もの」

時計の針はもう深夜と言っても差し支えなく、幾ら仕事熱心とはい  
え限度がある。だいたい、自分が定めた就業規約には残業時間上限が  
明記されているのだから気軽に破られても困るのだ。

「だいたいお前がココまで残らねばならない程の企画など今は動いて  
いないはずだろう?」

「えー、えへへへへ」

片眉を上げて問い詰めれば気まずげに笑ってお茶を濁す彼女に溜  
息をついて呆れてみる。美城の分家である彼女とは昔からの顔なじ  
みであるが、こういう時の誤魔化し方の雑さは全く変わらない。その

事がどうにも自分の深い部分をくすぐってくる。

「どれ、見せてみる。常務自ら手伝ってやるなんてめったにない機会だぞ?」

「あつ、だ、駄目ですよ!!」

疼いた悪戯心が彼女の手元にある資料をかつさらい、それを取り返そうとする彼女を身長差で圧倒する。昔からよくやったこの悪戯に懐かしさから笑いが込み上げてくるが、それも奪った資料の中身を見る度に冷えていく。

「……何だ?このどんぶり勘定の予算請求は?」

「……まあ、新人さんです。今からその訂正、というか、アドバイスと言いますか…」

私の冷めた声を聞いたちひろが「あちやー」と言わんばかりの顔で俯くがそれに斟酌していられるほど今の私に余裕はない。

新年度からシンデレラプロジェクトには大幅な増員を施した。むしろ、今までの体制が異常だったのであってこれで正常になったとすら言える状態だ。その分の予算増減だつて織り込み済みではある。だが、それでもこの予算請求は酷過ぎる。

このままいけば、半年も立たずに初期予算を超えるのは明白だ。

「必要な経費ならそれも一種の戦略だろう。だが、これは少々無駄が多すぎる」

「…今まで一丸で動いていたプロジェクトが、数班に分かれての行動ですからね。重複するものもありますし、トップアイドルのご機嫌とりに使う予算は前の倍以上です。絆を積み重ねていないプロデューサーとアイドルだったら…まあ、適整かもしれない数字ですね」

「…前の数値を見せつけて。それを参考に作りなおさせれば良いだろう。お前がココまで残ってしてやる事はない」

「それに素直に従ってやり直してくれるような方々でしたらよかったですかねえ?」

皮肉気に笑う彼女の顔に眉をしかめてしまう。新しくシンデレラ運営に入れたメンバーはそこそこにベテランと新人を折り混ぜている。だが、346という大手からスタートを切って育った彼らには



「極限状態」というものに親しみが無い。むしろ、自分たちのアイドルにどれだけの価値があり、どれだけ会社から引き出せるのかを熟知しているだけに質が悪い。

「そんな先輩を見た新人たちがどうなるかなど火を見るより明らかだ。」

「再編が、必要か？」

「いまはまだ、としか」

「簡潔なやり取りには冷たい意志が宿っているのを感じ、奪った資料をデスクの上に放り溜息をつく。大多数は粛清をしたつもりでもこういった事は何度だって起こりうる。それを理解していたつもりであつてもやはり徒労感はぬぐえない。」

「なんだ？ 言いたい事があるなら聞いてやるぞ？」

「投げ出された資料を無機質に眺める彼女に声を掛けると、こちらを見ないまま言葉を紡いだ。」

「…なんで比企谷君の退職を認めたんですか？」

「向けられた声に先ほどの無邪気さはなく、かつてのゾツとするほどの冷たさを彷彿させられる。」

「ふん、お前のプランではあつちから頭を下げてくる予定だったのだから？ 私が頼まれたのはそこまでで辞める人間を引きとめる義理なんてないさ」

「嘘ですね。それなら顔だしNGだった有名建築家の独占ドキュメンタリーと大手ゼネコンのスポンサー入りが同時に来た理由だつて一切誤魔化さずお話ししてくれるんですよね？」

「…まだその事は公表してないはずなんだがな」

「舐め過ぎです」

「誤魔化すように遠くに視線をやっても視線は緩まない。今回のお怒りはどうにも誤魔化されてくれるレベルではないようだ。と観念して深くため息をつく。まあ、こんな現状になっている責任は自分のせいでもあるのだから仕方なくはあるのだろう。」

「向こうから提示されたのはあくまで“本人の意思の尊重”だ。圧力と引きとめ無しに彼がこちらを選択するならこつちが丸儲け美味し

いプランだった。私としては勝算の高い賭けだったつもりだがね。結果はご覧の通りだ」

いつぞやのアイドルとの送別会があった時には期待もしたがそれも不発に終わったならば残った実を取るべきだと判断したのは経営者として当然の事だ。残らなかった事の要因をこちらに求められても困る。

そういつて腕を組み溜息をつけば彼女は本当に不思議そうに首を傾げた。

「…おかしいですよ。美城さんの引き止めに抜けたがあつたとしたって、4年間できっちり心の底まで追い詰めたはずなのに。ここ以外の選択肢なんて思い浮かばないくらいきっちり仕上げたはずなのに、急にこんな妨害が入るなんて完全に予想外です。何度だって私の予想を超えて来た彼でも絶対に越えられない数値に設定したのに：計算が、合いません」

そう呟く彼女の中ではきつと膨大な数式が巡り、全ての可能性を意のままに操る方程式が渦巻いているのだろう。その鬼子とすら呼ばれた化け物じみた能力が今まで間違つた事なんてほとんど見た事がない。彼女にとつては人も、経済も全てが計算式でしかないのだ。

だが、だからこそ今回の失敗に気がつく事はないのだろう。完全な数字として全てを計算式に当てはめる彼女にはそれは不確定な因子過ぎるだろうから。この頭でつかちな幼馴染が、それを考えるきっかけにでもなってくれるのなら今回の件はお釣りがくるくらいかもしれない。

「比企谷の“友人”が手を差し伸べたそうだ。チャンスだけならば作ってやれるかも知れないとな。そっから先はアイツの実力だったのだろうさ」

「…ともだち…ですか？」

私の言葉に今度こそ本当に理解が及ばないと言った顔を彼女は向けてくる。だが、その意味は私がどんなに言葉を尽くしたところで伝わりはしないだろう。計算をし尽くした先に残るその“何か”だけは自分自身が見つけねばならない。

少なくとも、私はかつての格好つけたがりの友人にそう教わり、ただその答えを探しているのだから。

懐かしい記憶を思い出した私は軽く苦笑を洩らし、壊れたロボットみたいな挙動で“友達？”と連呼するちひろの頭を叩いて再起動させる。

「ほら、いつまでバグっているつもりだ。さっさと帰り支度をすませろ。送ってやる」

「いたっ!?で、でもまだコレを直さないといけませんし…」

「その予算請求した馬鹿者どもを朝一で私の部屋に呼べ。それで解決してやる」

「ひえーひえー」

私の横暴な解決方法に目を回す振りをしているが口もとのにやけを隠せて居ないのだからお互い大概な性格だ。まあ、どうせ一度は暴君で通した名だ。こんな時くらいは有効活用してやろう。

そう考え、久々に武内の奴をいじめる切っ掛けに心を躍らせつつ口元を綻ばした。

## その4

### ●REC

皆さん、こんばんわー。まゆですよー。

今日は少し恥ずかしいんですけど、私と旦那様の愛の巣(キャツ)／  
／ 改め、おうちをちよつとだけ大公開していきたいと思いまーす  
!!

詳しい場所は秘密なんですけど、都内まで15分くらいで行き来できるし、商店街も盛んで昔ながらの町並みが守られてるとつてもいい所なんですよ？

まゆ「あ、こんにちわー。いつも彼がお世話になってますー」

ご近所A「あら、まゆちゃん！もう、最近みないからオバちゃん心配したわ!!所で、この前もらったウンヌンカンヌン……あらまあ、もうこんな時間!!子供たちが帰ってきちゃうわ!!それじゃあね!!」

まゆ「はーい。また今度ゆっくりー」

あ、さつきの方は町内会長の奥様ですね。彼ったら人見知りなせいか引越しの挨拶にもいかないものだから代わりにご挨拶に行つてから随分良くしてくれています笑。でも、ちよつとお話が長いのとたまに彼の事を悪くいつちやう時があるのが玉に瑕ですけど、ホントにいい人なんです。うふふ。

さあ、そんな事をお話しているウチに愛しの我が家に着きましたよー。

築45年ではあるんですけど、いい職人さんが作ってくれたおかげで頑丈な基礎はまだまだ現役のお家で全然痛んでいないんですよ！そのうえー(カチャカチャキイイ・・・ガツチョン、なんと外見の年季に反して中はリフォームされているのでピッカピカなんです!!

1DKなのでちよつと手狭にも感じますが、このどこに居ても、、、お互いを感じ合える距離感が心地よくもあります(キャツ。

あ、もー。私がちよつと目を離すとすぐ散らかしちゃうのが彼の悪い癖ですね。ぶんぶん!!

使った食器を浸けてくれているのはともかく、脱いだ服を脱ぎっぱ

なしで床に放置なんて。もう、私が居ないとホントにダメなんですから!!……スンスン……スウウウウ……アツ、……フウ。まったく!!コレは私がちゃんと、ちゃんと処理しておきます!!(バック回収。

早速、恥ずかしい所を見られちゃいましたね、お恥ずかしいです笑。

さあ、気を取り直してお部屋を見てきましょう!次は寝室の方です。こっちは旦那様の趣味が前面に出ている、本やアニメ、映画のDVDが所狭しと並んでいますよー!!お仕事や講義が終わった後にはこの部屋でビールを飲みながらいつものんびりしているのを眺めているとなんだかこっちまで和んできちゃいます!!

さて、旦那様の気になる最近の新刊はだいたいココに積んでいるのでチェックしてきましょう!!

えーっと、NOKの最新作の偉人物に……あ、コレは最近ベストセラーになった奴ですね。ム、可愛い女の子の漫画ですね!?没収したいところですけど二次元なのでコスプレで再利用させてもらいましうかね。後は……就職関係と?建設業の関係の過去問。ああ、就職関係で悩んでたようなので彼の苦悩が自分の事のように苦しいですね。こんな時に支えて上げられなかった自分が悔しくてしようがありません。

んん?一番下に何か……”忍び寄る危機!!粘着質なストーリーカー徹底解説及び撃退法く完全版く!!”……!?

ああ、分かります。私の旦那様は困った事に非常にモテルのです。まあ彼がどうしたって多くの女性の目に留まってしまふのはしょうがないと思うのですが、優しい彼はどうしてもその好意をきっぱりと断れないせいで勘違いしてしまう娘が出てきてしまうのです。その中にはこうして道を誤ってしまう子が出てきてしまうのは彼を独占している私としても心苦しいですが、譲るわけにもいかなないので妻としてしっかりと対処していきたいですね。

むしろ、こんな本を買ってまで悩んでいる彼に気づいて上げられなかった事こそ私の不徳です。今日だって彼に付きまとう悪女達が私たちの仲を引き裂こうとして来たのを撒くのに時間を取られたというのに……もつと精進しなければなりませんね。

あら、すみません。せつかくのお部屋紹介なのに湿っぽくなっちゃいましたね笑。

丁度良い時間ですし、彼に食べて貰う愛情、たっぷりのご飯づくりで気分転換しましょう!! 疲れて帰って来た彼が思わず夜まで元氣になつちやう特製レシピ大公開です (キヤツ!!)

.....

最後にマカの粉末を大匙3杯入れたら〜”旦那様大好き鍋”のできあがりです! これで疲れた彼だつてイチコロ!!

……皆さん、動物つて好きですか? まゆは、とつてもだ〜いすきでつす!!

さあさあ、ご飯も掃除もお洗濯も済みました。後は愛しい彼の帰ってくるのを待つばかり「せーんーぱーい。ご飯買って帰って来てるならメール返信してくださいよー。私まで夜ごはんの材料買ってきちゃったじゃ…ない…で…部屋、まちがえ”ドツツツ”ツツつひ!!?”

まゆ「はじめまして〜? 随分と手慣れた様子で入って来られた様子と? ココの二階は二部屋しかないって考えると? もしかしてもしかして、もしかして? よくここに来られてらっしやるんじゃないですか〜?”

あらあらあらあらあらあら? 亜麻色のきれいな髪に男の庇護欲をそそりそーな幼い顔立ち。もしかしたら事務所の仲間たちになつて引けを取らなさそうなの女性は一体どなたでしょうか? お名前と、彼…先輩とは、誰の事で、どんな関係かお聞きしても?

「い、一色いろはと、もも申しましたしゅ!? セ、せんぱい、というか、比企谷さんとは大学でお世話になって、ととつと隣に住んでる住民でしゅ!!?”

ほーん、お隣さんで、大学の…後輩です、か。なるほど、なるほど。なる、ほ、ど。

まゆ「ああ、そーだったんですか!!ごめんなさい!私ったらうっかりしてるからとんだ失敗をしちゃいました!!」

いろは「あ、あはははははは、そ、そういう事ってありますよね!!ありますありますありますよね!!!だ、だから、その手に持つてる包丁を……なんで振り上げるんです?」

まゆ「最初の一撃で仕留めるべきでした  
いろは「ちょおおおおおおお!!?!?!?!?!」

ああ、そうでした。てつきり事務所関係のことばかりだと思っていましたが、彼ぐらいの男性になると何処で阿婆擦れをひっかけてくるかなんて分からない事くらい想像出来るじゃないですか。私が至らないばかりに、彼は隣に住む悪夢にうなされ続けていたなんて!!ひっそりベットの下で彼と共に多くの時間を過ごしていたというのに、今になってそれに気がつくなんて!!

でも、でもでもでも!!安心して!!貴方を苦しませる諸悪の根源はきつちりココで仕留めるから!!

これで貴方に振り向いて欲しいだなんて怠慢だったまゆは今日でこの女と共に死ぬから!!

まゆ「新しい生活を!!新しい私と!!いざ!!!なむさん!!!」

いろは「……あ、死んだわコレ」

比企谷「……………人んちで何してんの、マジで?」

くつつたきたに疲れて帰って来た新社会人。

自宅前で揉み合う芸能人レベルの美女二人(片方E;万能包丁)。玄関に転がってるハンデイクム。

…え、もう、八幡せんぜん状況がわからない。どういう事なの?

まゆ「お帰りなさい、あなた!!ご飯にします?お風呂にします?それとも、その、わ、わたし…とか／＼?」

比企谷「…憧れであったその一言も包丁片手に殺人未遂犯から掛けられるとは夢にも思わなかったぜ」

なんなら下手なホラーも裸足で逃げ出す狂気を感じるよ、佐久間さん。

比企谷「…何この状況?」

まゆ「害虫駆除です」

比企谷「その後輩や。害虫やない」

まゆ「同義です。浮気です。もうプロポーズしてくれたんですから私だけを見てください!!」

比企谷「…もう、全然分らないけど一応聞いてやる?プロポーズ?」

まゆ「…これからはテレビの向こうからずっと見ててやるからいい加減にカメラ目線で撮れ!!」って言うてくれたじゃないですか!!つまり、これはプロポーズです!!」

比企谷「お前が撮影中に俺の方ばかり見て撮影になんねえつつてんだよ!!そのせいで何回スタジオ追い出されたと思ってるんだ!!」

まゆ「え…それってつまり、プロポーズじゃないですか。改めて言われると照れちゃいます／＼」

比企谷「え、何それもう…日本語で交信してもらっていい?」  
もうこいつは駄目だ。捨ててこよう。

比企谷「あー、一色。生きてるか?」

いろは「……とりあえず、現在進行形で私に包丁ぶっさそうとしているこのキ○ガイどかして貰って良いですか?…あと、オマエアトデオボエテロヨ」

前門の重度ストーカー、後門の怒れる後輩。

選ぶとしたら、どっちが勝率が高いだろう?いや、どっちかかっていうと…生存率か?

そんな意味のない現実逃避を思い浮かべながら俺は輝く夕日を眺める。きつと、こんな異常な日常も懐かしいと思える日が来るのだから。



うか？

多分、絶対ない。

コレを一旦解決したら、もう二度と思いだすものかと固く決意して俺は事態の解決に着手を始めた。

く蛇足く

雪乃「もしもし？こんな時間にいったいどうした——ウチの寮のセキユリテイ？それは、まあ、嚴重な方だと思わよ？仮にも大手だし、事件なんかあったら直接評判にも響くもの。嚴重にもなるわ。

は？いまから引越手続きしたい？何を馬鹿な事いつてるのよ。今が何月で、最初に寮なんか絶対に入りたくない言ってたのが何処の誰かだったのか覚えてない訳じゃないでしょうね？

あああもう、分かった！分かったからそんな情けない声を上げないでちょうだい！！ちよつと寮母さんに掛けあつて見るから待つてなさい！！

でも最初に言っておきますけどね、新入生用の空き部屋なんてもう女子寮の境になってる私の隣室ぐらいしか空いてなかったはずよ？騒がしくしたら即刻出て言つて貰うから肝に銘じておきなさい？

そう、分かったならいいわ。とりあえず、事情を聴いてもらわないと何とも言えないからこちらに向かつて頂戴。ホテル？———今日ぐらいいなら泊めてあげるからさっさと来なさい。馬鹿ね」

一色 いろは 女 21歳

本作での出番終了。報われない……。

一色のいちやラブが欲しい人は 渋 別作 いろはすデートへどうぞ。

彼女は犠牲になったのだ。

## その5

梅雨が明け、夏の始まりが密やかに近づいて来たそんな季節。場末の喫茶店で懐かしくも珍しい物を見かけた。

自分の中ではいつも皮肉気で饒舌な方ではなかった印象の強かった男が随分と柔らかな表情で楽しげに話しており、一瞬、見間違いかと思ってしまう。それでも、特徴的なアホ毛に濁ったその目から自分の知っている彼なのだと伝えてくる。

何事かと思つて動揺をしていると、その向かいに座る存在を見て緩く苦笑と納得と零れてきてしまった。

容易く手折れそうなほどに身体は華奢で、抜ける様な白さの肌と髪。そんな儂げな容姿の子がほんのり頬を染めて親しげに話しかけてくればどんな偏屈な男だつて緩んでしまうのは当然だ。

“ありやあ凜がシヨック受けるのも仕方ないわな”

好いた男が自分よりずっと可愛らしい女とタダならぬ関係だと見せつけられた上に、好みが自分と真逆だつたと思ひ知らされるなんて思春期には致命傷以外の何物でもない。いまだ傷心中の自分の後輩を思い浮かべて心の中で念仏を唱えておく。南無三だ。

さて、珍しいものを見たことで自分の中の悪戯心がムクムクと疼いて来たのを感じ、時計を確認すれば次の予定までは余裕がある。そのうえ目の前には可愛い娘と懐かしい友達の姿。

これを素通りしちまうつてのはあまりにロックじゃない。

そう自分の中で結論が出た瞬間に私”木村 夏樹”はその喫茶店の扉を開いた。

「よう、ダンナ。随分とマブイスケ連れてんじやねえか」

「…夏樹か」

私が楽しげに笑って話しかけると彼”比企谷 八幡”は綻ばせていた表情をしかめて不機嫌を隠そうともせず返事をするので思わず笑ってしまう。相も変わらずに人付き合いの下手くそさは健在ら

しい。

「おいおい、久しぶりに会った友人に随分冷たい反応だな。ロックじゃねえぜ?」

「いつ友達になったんだよ…。というか、流れるように席に座らないで貰っていいですかね?」

「なんだよ、鎌倉までバイクで遠乗りしたり、箱で一晩中ロックを語ったりしたんだから十分友達だろ? ついでに言えばアンタはもう一般人で、私だってoffだ。プライベートに誰と一緒にいても問題は無い。そうだろ?」

「前半はほとんど仕事だったんだけど…なに? 最近のパリピって友達感こんながばいの? マジベーわ」

ぶつくさと言いつつも本気で追い出しにかからなのだから人の良さも健在だ。そう思つて笑い、急な闖入者に戸惑っている可愛い娘ちゃんに改めて声を掛ける。

「ああ、急にお邪魔しちまって悪かったよ。私の名前は“木村 夏樹” っていうんだ。ハチとは前に一緒に仕事してた事があつてな。懐かしくてつい声を掛けちまったんだ」

「は、はじめまして。”戸塚 彩加”です。八幡とは高校の頃からの、その、“友達”なんだ!!」

はにかむ様に“友達”という彼女に思わずこっちまで赤面しちゃう。いや、遠目に見ても可愛らしかったけど実際に間近で話すと凶悪に可愛いなこの子。こりゃあ思わず顔も緩むし、横槍入れられたら不機嫌にもなりますわな。

「かー、”友達”だつてさハチ。お前も隅に置けないぜ?」  
「…うぜえ」

彼女のあまりの可愛さに思わず肩を組んでからかつてやると深い溜息をつくもんだから笑つてしまう。これでボツチだと言い張るのだからそのポーズだつて随分と微笑ましく感じちまう。

ニヤニヤしながらハチをこずいてると彩加が頬を膨らまし始めたので慌てて身体を離す。

「ああ、悪かった。そりゃいきなり来てこんなベタベタされたんじや

気分も悪いよな。調子に乗り過ぎたよ」

「い、いや別に、大丈夫。……でも、ちよつと嫉妬しちやつた、かな？」

「…天使かよ」

「天使に決まってるんだろ」

殺人的な可愛さに見惚れていると、間髪いれずにハチが訂正を入れて来たので彼女に見えない様に机の下で拳を交わす。ココに、教会を立てよう（崇拜）。

「で、何しに来たの？帰る？」

「もう、八幡！久々に会った友達にそんなこといつちや駄目だよ!!」

彩加ちゃんの彫像の型を取るには幾ら積みばいいのかを考えているとハチが不機嫌そうに問いかけて来たので我に返る。あと、マジ彩加ちゃんかわいいな…。

「ああ、忘れてた。この前はマユが迷惑かけて悪かった。それを伝えて置きたくてね」

「マジで笑えねーよ。松永が確保に来なきやマジで刺される一歩手前だ」

「あー、悪かったって。今はチーム全員で厳戒監視中さ。風呂どころがトイレまで見張ってるから安心してくれよ。仮に脱走してもGPSをくくってるからすぐに確保できる」

「…聞いたってあれだけど今をときめくスターの私生活じゃねえな」

あれだけの事をされても、ほつとしたような、わるい事をしたかのような微妙な顔を浮かべるのだから大概にこの男もアマちゃんだ。その甘さも個人的には嫌いではないが、心配にはなる。

「他の奴らは…元気か？」

触らなくても、見なくても許されるであろう事に向かい合う姿勢は尊敬できるが、心配にもなる。

「年頃な奴らは一時期荒れたり沈んだりしたがね、ベテランの楓さんや瑞樹さんが上手く纏めてくれたよ。層が厚いのはやつぱり他じや真似できない強みだよ。ただまあ、ちよつと時間がかかりそうなのは何人かいるがね」

一番顕著なのは“ありす”と“小梅”だろう。

最初っから懐いていた小梅が誰もいない空間に手を伸ばして『君も触れないんだね…』と悲しげに呟くのは良いとしても、心を開ききつたアリスは依存に近い形になりかかっていたのだろう。裏切られたと感じた心のささくれが、厚かった心の壁を更に硬く閉ざしてしまっている。文香が根気よく付き添っているが、どうなるかは何とも言えない。

「……そうか」

「まあ、それもなるようにしかならないからな。気にすんなよ」

「お前も、文香があるなら今のうちに言つとけよ」

沈み、怯えつつも、そんな事を言うこのお人好しに思わず笑ってしまふ。

こんな男だからこそ、私も笑って続けられるのだろう。

相談くらいはしてくれたらと思ったのは確かだ。

いや、正確にはアンタは何度だつてして来たのに私たちが受け取らなかったのが原因なのだろう。でも、きつと今回の件を見送つたとしても別れはそう遠くはない未来の話だつた。

どんだけ騒いでも、引きとめても、押しとどめても変って行く物は止まってくれないし、無理に引きとめても何時かは無理が出て歪んじまう。だから、アンタが去つたのは何にも気にする事じゃないんだ。

後は残されたこっちの問題なのさ。止められなかったちっぽけな自分の非力も、変わって行つた仲間の道も、全部呑みこんで進んでいくしかないんだ。数少ないチャンスを手握んでいながら、それが出来ないならソイツだつて去って行くしかない。私たちがいるのはそういう世界なんだから。

「…案外、ドライなんだな」

「バンドをやってりやね、こういう事も少くない。だから、いつだつて笑って送り出すようにしてんのさ。友情と思ひ出はくさりやしななんだから、その方がロックだろ？」

そういつて締めくくつた私を見て、ハチは小さく笑って吹き出す。

「くく、やっぱりお前、男なんじやねえの？こんなに女にカツコよくさ  
れたんじや立つ瀬がねえよ。絶対に付いてんだろ」  
「おいおい、彼女の前で下品な話なんてすん——」

戸塚・夏樹「へ？男（女）？」

蛇足

夏樹「まじかー。こんな可愛い生物が、えー、まじかー。ベーわ、ま  
じっベーわ」

戸塚「あの、その、ごめんね。あんまりカツコいいからてつきり：  
てっ、これも女の子には失礼だよ。えーっと、」

八幡「もう性別：戸塚と性別：イケメンで良いんじゃない？小さい  
事に拘んなよ」

夏樹「そうかなー、でも、確かにあんまり拘んのもロックじゃねえ  
よなー。そうしとつかー」

戸塚「ええええ、納得しちゃったよ…」

夏樹「まあ、でも納得だよ。あれだけ美人に囲まれて平然としてつ  
からまさかと思ってたけど…性別：戸塚じゃしようがねえよなー。可  
愛いもんな彩加ちゃん。親しくもなっちゃうよなー」

八幡「…ん、なんかどっからか腐の波動が。海老名さんか？」

夏樹「よっしゃ！俺は二人を応援するぜ！！アイツらにも上手く説明  
しといてやんよ！！ついでに、今日これから昔の身内を集めたライブや  
るんだ！！二人もぜひ来てくれ！！」

戸塚「え、いいの！！僕ライブとか行った事なかったから凄く楽しみ  
！！いこうよ、八幡！！」

八幡「ん、あ、ああ。いいけど。…なあ、夏樹、親しくってなんの  
「そうときまりや早速いこうぜ！！今夜は最高のライブにしてやるぜ  
！！」

戸塚 「わーい!!ありがとう!!」

——後日、元アシストP“八幡”が二刀流だったという噂がながれ、ありすの人間不信は深まり、文香の頬はほんのり赤く染まったそう。

プロフィールという名のあらすじ

戸塚 彩加 性別：戸塚 22歳

説明不要の大天使である。癒される。

スポーツドクターになった。靱帯を痛めてリハビリで寄りそわれない。

戸塚の別作はこちら ↓ <https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=5463858>

木村 夏樹 性別：イケメン 18歳

説明不要のビツクロツカー“なつきち”である。多分、ステッカー張ってる車がライブにいっぱい来る。

バイクをもっているため、たまに仕事の移動でハッチーとツーリングを楽しんだり、出張先のライブハウスに連れ回したりと普通の友達みたいな感覚。

可愛いものに目がない。

## 幕間 その2

朦朧とした意識に、唄が聞こえた。それは、誰もが耳にした事のあ  
る有名な童謡で。

祈る様に、願うように。ただただ健やかにあれ、と望むその声に思  
わず息をするのを忘れてしまう位に耳を奪われる。

紡がれた歌に合わせるように頭を撫でられ、思わず息をそっと吐い  
て身体力を抜く。柔らかな感触と温もり、そして、包み込むような  
まどろみがゆったりと自分を包み込む。

この安らぎを自分は二つ、知っている。

遠い記憶にしかない懐かしき母と呼ぶべきあの人と、

決して、手を伸ばすべきでなかった、

最愛の人の

温もりだ。

「あら、お目覚めですか？こんな所で寝ちやうなんて…三下の私が言  
うのもなんですが、”お疲れさんした”。ふふ、悪くない出来です」  
深い悔恨を胸に、抗いがたい誘惑を振り切って目を開けてみれば、  
さつきまでの神秘的な歌声はどこへやら。別の意味で深く息を吐か  
される。それでも起き上がろうとする身体をそっと押しとどめて離  
さないのに抵抗出来ないのは惚れた弱みか、思っているよりも自分が  
弱っているからか。後者である事を願いつつ、せめてもの反撃を口に  
する。

「ええ、楓さんに虚を”つかれたので”、疲れました」

「あらー！トップアイドルの膝枕に酷い言い草ですね、武内君？」

言葉とは裏腹に楽しげに笑いながらほっぺを抓ってくるこの美女  
が語るその肩書に、今度こそ自分の深くまでに根付く職業倫理がメツ  
ク刺しにされている事を解かっているのかいないのか。ただ、その笑



顔になんだかんだと絆されて笑ってしまう自分の甘さがこの胃痛の原因であるのだから彼女ばかりも責めれない。

彼女の名は“高垣 楓”。

最近日本に留まらず世界に名を知らしめたトップアイドルで、私の恋人だ。

多くの人にいまだからかわれるが、色んな意味で“一目ぼれ”と言う言葉を自分が体験する事になるとは思わなかった。

当時、若輩の自分に丸投げ渡された巨大プロジェクトの企画。失敗して元々。そんな大企業ならではの様々な事情の絡み合った末での人選だったと今西さんから聞いたのはかなり後の事であった。

それでも、生来の融通の利かなさか自分は真剣に人選を考え、あらゆるデータとシミュレーションを予想して取り組み、一年近くかけて準備した段取りを——全て、ゴミ箱へ投げ捨てた。

高尚な目的や、理由があつた訳ではない。

廊下ですれ違つただけの、たつた一目見たその瞬間に思つてしまつたのだ。

“彼女”が輝くステージを、見てみたいと。

いったい何人に『気が狂つた』と言われたのかなど覚えてもいない。自分でもそう思つていたのでから否定のしようだつてなかった。

アイドルの消費期限は15—18歳と呼ばれるその業界で最も最初に口説きに掛かったのが無名のモデルで、23歳だと言うのだから。そもそも口説かれた本人が無表情で“…当て馬、という役柄でしようか？”と言つて首を傾げるのだから救いがない。それでも、各所を強引に黙らせ、彼女を何度も説得し、舞台へ引つ張り出した。

そして、彼女が謳うたびに、舞うたびに、

——世界が揺れた。

正直、一気に変わった世間の評判や自分の実績なんてどうでもよかった。

ただ、凍ったような彼女の表情がステージが終わるたびに解けていき、輝いていくのが、嬉しかった。

その、輝きが何より、尊かったのだ。

そして、その輝きが増すほどにそれだけに目を向ける事は許されなくなつた。多くの人が、企画が、夢を抱いた少女たちが自分の元へと雪崩れこんで来たのだ。

彼女が評価されるのが誇らしかった。

新しい輝きに出会え、それを押し上げていくのが堪らなく嬉しかった。

自分の裁量で出来る事が増えていくことが、気楽であつた。

そんな順風満帆の流れの中で——当然のように、彼女の担当を外された。

“プロデューサー”として、“アイドル”として、当たり前の事を二人揃って忘れて有頂天になっていた事を、思い知らされた。どんなに固い絆で結ばれた二人も、結ばれてはならないという、そんな当然の事を言われるまですっかり忘れていたのだ。

そんな事を語っている自分がこうして彼女に膝枕をしてもらっているのだから、世の中、どうしようもない人間で溢れているのをどうしたって咎められない。

「んんん？・どうかしました？・？」

上機嫌で自分の髪を梳いてくれる彼女に大きいため息をついて“貴方のせいで頭が痛くて”と八つ当たり気味に返せば“あらあら殊勝な心がけですねー。お詫びにもっと撫でてあげましょ”等と言つてわしゃわしゃしてくる彼女にまた大きいため息を着いてされるがままにする。

まあ、結果的に言えば、

超ごねたのだ。

二人揃って。

会社のあらゆる極秘を暴露する準備と、軌道に乗ったアイドル部門の丸ごと余所に移籍する段取りを完璧に整えて、自分の先輩が所属する765プロに受け入れ準備もバッチシの状態でハリウッド出演まで達成している“高垣 楓”と大層に魔法使いと呼ばれ始めた“武内 駿輔”が『やだ』と、眩くのだ。

だれが止められるだろうか？

ただ、一生に一度の我儘は冷静になった自身の良心を容赦なく締め上げ、その他の業務への滞りなど一切許さぬ姿勢へと駆り立てて度々こんなざまをさらしている。

そんなとき、散々まきこんだ周囲は気を利かしているのか周りに誰もおらず、彼女だけがこうしてくれている事がある。それを嬉しいと思うか、恥ずべきかは微妙な所だ。

そんな微妙な心境のせいか、余計な言葉が、こぼれ出た。

「ちよつとだけ、比企谷君を、羨ましく思ってしまった」

「ん？どうしてです？」

零してしまつたあとに慌てて口を噤むが、どうにも聞き逃してはくれないらしく微かに色身の違うオッドアイが覗きこんでくる。

「…最高の状態で見送って、綺麗なまま思い出として去って行った：からでしようか？」

この目に、自分は弱い。自分以外には決して開かないその冷たげな視線が、自分にだけは無邪気に問うてくるのが嘘を許さないのだ。たつた一つの嘘がこの輝きを奪ってしまいそうで、本音だけを引きずり出す。

「彼の辞めた理由が、羨ましいいんだと思います。努力や能力が足りずに辞めていく人はたくさん、たくさん見てきました。でも、彼はそんなことはなかった。同年代の自分が同じ事をやれと言われても絶対に無理なくらい彼は優秀だった」

「ええ、そうですね」

「そんな彼が辞めた理由は“見届けたから”でした。自分にとっての最高のアイドルが、最高に輝くのを見届けて“彼女達”以外には尽くしたくない。そういつて彼は去って行きました」

それは“仕事”として彼女達に携わる自分たちにとってはあまりに眩し過ぎ、妬ましい去り際だ。

誰だつて何十年と時間を費やして“最高のアイドル”を探し求める。そして、それを最後に引退を夢見る。そして、夢見るだけで実際に自分の様にその後は続いていかねばならない。

彼は彼女達を“夢”だつたと語つた。

そして、その在り様を残酷なくらい理解して、去つて行つた。

どうしたらあの年齢でそこまで割り切れるのか、不思議なくらいにその先の惨めな結末を理解していた。

そう、語つた自分の言葉を聞いた彼女は、ほんのちよつとだけ嬉しそうにほほ笑んだ。

「ふふ、そんな話を聞いちゃうと自惚れちやいそうです」

「…何がですか？」

「だつて、そんな事を言われたら、自分が貴方にとっての一番星だつたと勘違いしちやいそうで」

「……………自惚れではないと、思つて、頂いても、その、大丈夫…です」  
「ふふ、そんな事いいつも別の女の子にトキメキだつて感じているのでしょう？浮気者ですネ？」

「うっ!？」

悪戯氣に言われた言葉に返す言葉がみつからず、目線を逸らしている癖で首筋を擦ろうとするとそれも遮られ、正面から顔を合わせられ、囁かれる。

「うふふ、そういつて貰えるのは嬉しいですけどね？でも、貴方は何度だつて何処でだつてちよつとの輝きに手を差し出さずにいられないんです。それが貴方の、“プロデューサー”の在り方なんです。比企谷君は“家族”として接していたんでしょう。だから、身内の為ならなんだつて頑張れる彼は身内以外にそうする自分が許せない。たつたそれだけの違いなんです」

それは、在り方の違いだと。

魂の在り様の違いだと彼女は言う。

納得出来る生き方の形でなく。納得できる後悔の終わり方の違いなのだ。

「..そう、なのかもしれませんね」

「でなければ、ここまでボロボロになって尽くさないでしょう?」

呆れたように微笑む彼女の瞳と撫でてくれるその手の労わりに、ちよつとだけ胸が痛む。だが、頭の片隅で自分が新しく担当する子達のプロデュースを考えるのはどうしたって止まってくれない。

ああ、まったくもって彼女の言うとおりである。

自分の惚れた女を傍らにこんな事を絶えず考える自分のなんと浮気性な事か。

だが、ココだけは、ちよつと訂正が必要だ。

「楓さん」

「はい?」

——自分だけのものにしたいたいと思つたのは、貴女だけですよ?

そう伝えた彼女の真っ赤に染まるその顔にちよつとだけ気分が良くなつた。

高垣 楓 女 25歳

346グループどころか日本全体で見ても類を見ない程の著名を誇るアイドルである。業界内で後に伝説とされる“シンデレラプロジエクト”の由来が彼女と武内Pの馴れ初めへの祝いを込めた皮肉である事を知る人間は少ない。

元はモデル部門で働いていたが、あまりの無表情に評判は良くなかつた中での引っこ抜きだったため意外と交渉は簡単だった。なお無表情の理由はダジャレに誰もツツコミをくれなかつた事が原因であつたらしい。

346を潰そうとしたりなんやかんや在ったが、グループの纏め役としてしっかり働き、恋も勝ち取った英雄としての地位を順調に固めている。

番外編：城ヶ崎 美嘉は愛を囁かない

輝かしい玄関ホールに飾られる巨大な時計は煌びやかにそびえ立ち現実感を奪う。何度訪れても、一介の元読書モデルごときには馴染めそうもなく、足元はいつだって空を搔くようにフワフワして現実感を遠ざける。ふらつきそうになる足に活を入れて、微かに薫る喫茶からの紅茶と甘い焼き菓子の匂いに後ろ髪をひかれながらも足は迷わずにある場所を目指して突き進む。

おそらく、事務的な役割を担っているであろう華やかなお城の裏側に押し込まれた無骨な廊下。薄暗く、少々埃っぽいようなこの薄暗さにちよつとだけ安心感を覚えるのは日本人の性か、自分の貧乏性か。まあ、女子高生としては枯れた感性だと思いき小さく苦笑を洩らす。華やかで、熱狂的な舞台も期待を一身に受ける撮影も、誰よりも輝いて魅せる自信は揺るがずにあるが。それとこれとは話が別なのである。

飾り気のない乱雑な廊下を進み、分厚い防火扉の前で足をとめ、その扉に手を掛けた。

それに何より、自分よりもっと好き好んでこんな所をベストプレイスにしている変人だつてこの世にはいる事を考えれば、そんな変な癖でもないのだろうと開き直れるというものだ。

埃っぽい空間に春の足音を感じさせる独特の湿った空気と、微かな紫煙の香りが鼻孔をくすくすつぐて通り抜けていく。

暮れる夕日が強める陰影の中に、季節外れの蛍のように灯ったその光点。

ともすれば、影に混じってしまいそうなほど鬱屈とした空気を感じさせるその瞳が気まづげに眼を逸らすその仕草に、歳の離れた妹を思い出して笑ってしまいそうになる。

「煙草、辞めるんじゃないかっただけ？比企谷さん？」

「あの時の俺はどうかしていたよ、カリスマJK」

「意志弱過ぎ」

からかう様に嫌みを言つてやればさっきの後ろめたさは何処へや

ら。悪びれなく禁煙中のはずの煙草をふかしてシレつと言い返して  
くる彼の肩を叩き緩く笑う。

何処も彼処も豪華絢爛なお城で、私、”城ヶ崎 美嘉 は今日  
もこの日蔭者の隣に腰をおろす。

ふらつく足元が地面につき、冷たく味気ない硬さが伝わるココが、  
私は嫌いではない。

「こんな辺鄙な所でこそこそ引きこもってまで吸いたいもんなの？正  
規の喫煙室あるんだからそっちで吸った方が暖かいでしょ」

季節は二月。暖かくなりつつあるとはいえ、非常階段の下という日  
の差しにくいココはそれなりに肌寒く快適とは言い難い。それに、縮  
小傾向ではあるものの業界柄か館内にも整備されているのだからそ  
ちらに居てもいい気はする。

「馬鹿、あんな密閉された空間で暇そうに煙草なんてふかしててみる。  
説教好きなのか、寂しがり屋なのか知らんオッサンに絡まれちまっ  
て、息抜きがストレスタイムに早変わりだ。あと、チツヒに見つかっ  
たらここぞとばかりに仕事を増やされそう」

「もう八割くらい後半が理由じゃん…」

言わんとしている事も、その気持ちも分からなくは無いものではあ  
るのだが、もうちよつと年上としてマトモな理由づけする努力をして  
ほしい。脱力する私を余所に呑気に煙を吐きだす彼にもう一度深く  
ため息を吐き、視線を送る。

身長も顔もマトモに見ればこそこそ悪くないはずなのに、気だるげ  
なその瞳と声。そして、ゆつたりと煙草を啜えるその唇が退廃的な雰  
囲気で覆い隠してしまつて台無しだ。もつとマトモに身だしなみと  
受け答えをすればそこそこに見えるようになるだろうに。随分と昔  
に聞いた、彼の憧れの人もこんな風に煙草を吸っていたのだろうか？  
「ん、ていうか何でお前がいるんだ？今日はレッスンも仕事も無かつ  
たんじゃないっけ？」

思いだしたように聞いてくる彼に、頭をよぎったおかしな感想と不  
愉快さを振り払つて、今日の目的の物に意識を移す。



ポケットに収まる程度の、シンプルにラッピングされた小さな箱。偶然に街で見かけて思わず彼を思い浮かべて買ってしまったソレ。いつもならなんという事もなく渡せるそれも、日取りが良いのか悪いのか今日だけはなんとなく気恥ずかしくなってしまう。いや、他意は決して無いのだけでも。

「はい、これ」

自分の中の良く分からない感情を誤魔化すように、つつけどんにポケットの中のソレを渡す。

他意は無い。ただちよつとした悪戯心と嫌味と、ほんのちよつとの日頃の感謝。籠めた思いはたったそれだけなのに何故こんなに自分は居心地の悪い思いをしなければならぬのか。そんな身勝手な感情を八つ当たり気味に視線に乗せて隣の男を睨んでみると、一気に気が抜けた。

「…なに、今日がどういう日か知らないとか言わないよね？それとも、”お菓子会社の戦略には乗らない”的な感じ？」

渡された当の本人を見てみれば、ホントに不思議そうに渡された箱をほうけた顔で眺めているのだから。渡したこつちだつて拍子抜けもいい所だ。変な期待をこの男に求めていた訳ではないがちよつと反応としては失れ――

「いや、素直に嬉しいもんだな。こういう風に普通に貰えるつてのも」  
溢れだす苛立ちは、スツと眩かれたその一言に塗りつぶされてしまった。

本当に、本当に見た事も無いくらい、柔らかな表情を浮かべた彼に思わず、息を呑んだ。

え、いや、ちよつとばかりかしの表情は、反則だ。いつもの、皮肉気な表情と軽口を返してくれなければ、どうしていいのかわからない。必死に空回りする私のオツムは何とか言葉を絞りだそうとするが、金魚みたいに上下するだけで役に立ってはくれない。

「そうだよな、下手に難しく考えたりする必要もなくこうやって普通に気持ちを伝える様な日だもんな。今日って」

「ききききよつきつききき、気持ちって!!ぎ、義理だから!!つかかかつか

「かか勘違いしないでよね!!!?」

「あ、そりやそうだろ?俺がそんな初歩的な勘違いするか。開けていいか?」

「…どーぞ」

な、何なんださつきから。いつもは絶対に言わないような事をポンポンポンとツツ。というか、別に事実だから良いんだけども、そんなあつさり言われるもなんとなく癪に障る。狂いつばなしの調子に深くため息をつきながら促せば嬉しそうに丁寧に箱を開けていく様がいつもより幼げで二割くらい爽やかに見える。…大丈夫か、私?

「…洋物煙草?」

「にひひひ、早速試してみてよ」

中身を見た彼が訝しげに首をかしげるのを見て若干気分が良くなる。そうそう、カリスマの贈り物は相手の予想をいつだって越えていくのだ。ちよつと得意げに彼が啜えている煙草を取り上げて開ける様に促せば彼は不思議そうにしながらも箱から一本ソレを取り出し――驚いたように動きが止まって小さく笑った。

「すごいっしょ?」

「ああ、こりや予想外だった」

彼が片手に持つそれも、包装されていた箱も、きつと遠目から見れば何の変哲もない煙草に見えたはずだ。だが、手にした彼と隣にいる私だけには分かる。

ふんわりと薫る柔らかなカカオの香り。それはさつきの紫煙よりももつと柔らかく私の鼻をくすぐった。

輸入品のアクセサリーショップの隅っこに小さく展示されていたこの“シガレットチョコ”。

ちよつとした悪戯はどうやら上手く成功したようで何よりだ。

「降参だ。大人しく禁煙に励みますよ」

「ん、莉嘉とか年少組も増えて来たことだしね。それがいいよ」

深く溜息をついた彼は差し出された私の手に大人しく喫煙セットを引き渡して行く。

初期の頃は自分や楓さんぐらいの年齢の人達ばかりだったシンデ

レラプロジェクトも随分と人数や層が厚くなって今では小さな子だつて多い。送迎などで接する機会が増えていくなら今のうちにやめてしまった方がお互いの為だ。それに。

「単純に身体だつて心配だしね（ボソツ）」

「なんかいったか？」

「いや、なんにも。ほら、せつかくのカリスマからのチョコなんだから喜んで食べてよね？」

「はいはい、頂きますよ」

誤魔化すように笑つてチョコを美味しそうに食べる彼を眺めて思う。

彼が言っていた事を。

さっきの言い草では、まるで気持ちを伝える事が、出来なかつた事があるかのような言い方だ。それが、どんな事情だつたのか。或いは経緯だつたのなんか、分かりもしない。

でも、あの時の彼の優しい表情が、自分に向いていない事だけは嫌でも分かつた。

一生、向けられる事は無いのだとは、分かつてしまった。

どうにも、自分はこういう事が多い。いつだつて魅かれるのは年上で、自分の気持ちを意識して動こうとしたときにはもう相手が別の人に魅かれていた時だ。

それが分かるのはいつだつて——この日だ。

「もうちよつと待つてれば年少組のレッスンは終わるから一緒に送るぞ？」

「いや、いいよ。帰りによりたい店もあるし…少し歩きたい気分だしね」

立ち上がった私に掛けられた声を緩く断つて軽く手を振つて歩きだす。

「ん、分かつた。ホワイトデーは期待しとけ」

「三倍返しでよろしく」

掛けられる声を適当に返しながら、防火扉をゆったりと閉じる。一歩、二歩、三歩目で力無く壁に寄りかかった。

声は震えずに、返せていただろうか？溜まった滴を悟られずに済んだだろうか？なによりも、こんな情けない顔を見せずに、済んだのだろうか？

今日はバレンタイン。

世間は甘く愛を囁き、輝く奇跡に目を輝かせるもう一つの聖夜。だけど、今の私にはこれくらいの冷たい廊下が心地いい。

私は、この日が、嫌いだ。

## その6

『この化学式は〜』

広い講堂に響く朗々とした解説は外でミンミンうるさい蝉にも劣らないほど耳朶を叩き、内容の難解さも含めてもたらされる頭痛は留まる所を知らない。

朝から延々と続くこの苦痛にうんざりしつつも溜息一つに納めて再びペンを握る。

セミたちが一生を声高く歌いあげ、太陽が猛々しく大地を焼く過酷なこの季節。垂れ幕に掲げられた言葉を信じるならば“夏を制する者は受験を制す”との事だ。

個人的な鬱屈で聞き洩らせるほど安い講義料では無いし、びっしり埋まっているはずのスケジュールを必死に自分の勉強の為に調整してくれたプロデューサーや、気を使ってくれているユニットの事を思えば、立ち止まる事は許されない。

もはや、呪文か早口言葉にしか聞こえないその言葉を必死に追いかけて私“城ヶ崎 美嘉”はペンを走らせる。

盛夏の日差しもなりを潜め、一生を声高く謳う蝉の声が鈴虫の恋唄に変わる夕暮れのなかでぼんやりと慌ただしい人の流れを眺め思う。この中で“アナタはなぜ大学へ？”と唐突に問われて答えられる人間は一体どれくらいいるのだろうか？

『私は…やっぱり文学に魅かれていたからでしょうか？もつと深くソレに携わりたくて…』

『うーん、“本当にやりたい事”っていう物を見つけるためかしら？』

『ん〜？高校にあつた彫像が面白くて』

近しい知り合いに聞いて回ってみれば、目的を持って、目的を探して、中には意味の分からないモノまで様々だ。

だが、それでも自分よりはマシなのかもしれない。

いけそうな成績で、行っておいした方が役に立ちそうで、ほんの

ちよつとだけ”ギャルは勉強できない”っていう偏見を見返してやりたくて。そこまで出ただけで理由なんか底を尽きてしまった。もつと言つてしまえば小さな頃から聞かされた”進学”という選択肢はまったく疑問に思わないほど自分に根付いていて、今でも出来るならばそうするべきだと言う考えがずっとそばにある。

それが普通の事だと、ずっと思っていた。だが、世間を賑わすカリスマJKのこのステレオタイプな考えは随分と周りには意外だったようだ。

ラジオでぼろつと洩らただけで反響は様々。

てつきり周りの同年代のアイドルと一緒に本格的な芸能活動に本腰を入れるものだと思われていたらしいのだが、ファンや視聴者からの意見や感想はともかく、仲間たちやプロデューサーまでが驚いていたというのだからなんともはや居た堪れない。

周りには苦笑と共にそれっぽい言葉で言い繕いはしたものの、こっちの内心だつて中々に複雑だ。

今でこそアイドルのトップランカーとして引きたてて貰つてはいるものの、それが永遠に続く訳が無い事は誰にだつて分かる。それが途絶えた時に、誰がどんなふうに保証を取ってくれるのかと思えば身の毛がよだつ。プロジェクトのみんなや、プロデューサーが信じられない訳ではないが芸能界は残酷だ。

そんな考えがチラつく自分には、明るく、何の迷いも無く自分の才能を信じて飛び出して行ける仲間が眩しく、ちよつとだけ妬ましい。

そこまで考えて小さく頭を振つて、溜息をつく。

疲れているせいかどうにも思考が暗い方向に引つ張られがちだと自覚して、気分転換に周りを見渡し、目についたのは自動販売機に並ぶ特徴的なシルエットの缶コーヒー。

かつて知り合いに一口飲ませてもらつて暴力的な甘さに咽かえつた記憶を思い出してクスリと笑つてしまう。あの時は甘過ぎて飲めなもんでは無かったが、今ならなんとなくいけそうな気がした。

買つてみたそのコーヒーの相も変わらず尖つたデザインに苦笑しつつも、タブを空ける。

——コレを毎日飲んでいたあの男ならば、自分の選んだ進路に  
なんと言っただろうか？

「ワンツ」

「…わん？」

小さな感慨は足元から聞こえた謎の鳴き声に上書きされ、思わず目を向けてしまう。

毛むくじやらかな生物がはっはつと忙しく舌を出して、くりんくりんしているおめめを興味深そうに向けてくる。——端的に言って、犬がいた。

「うおっ!!? って、あちゃ!!」

「わふうっ!!」

急に足元に出現した存在にちよつとカリスマらしからぬ声が漏れ出ってしまった上に、せつかく買ったコーヒーをその拍子に落としてしまった。突然の闯入者も唐突に奇声を上げた変な女に飛びずさって抗議の声を上げるが、原因はお前だ。

「あーあーあー、もう、アンタどつから来たの？御主人はどうしたのさ？」

「わふう？」

「いや、そんな疑問形で首傾げられても…」

言葉が分かっているのかいないのか間の抜けた対応をしてくるこのワンちゃんにがっくりと肩を落としてしまう。

まあ、首輪は何故か着いていないが、この人懐っこさと毛並みの良さから見るに野良ではないだろう。おおよそ、主人の目を盗んできた脱走兵つとどこか。このまま放置するのもなんとなく罪悪感が沸き、どうしたものかと頭を巡らせていると私の周りをぐるぐる楽しそうに駆け回っていた彼が元気にじゃれついてくる。自由かよ。

毛が長めのミニチュアダックスな彼は大層体温が高く、出来ればこの夏場には御遠慮願いたい。あ、ちよ、顔舐めはNGでお願いします！化粧崩れるし、犬的に大丈夫か分からんし!!

「サ、サブレー!!何処行ったのー!!」

そんなこんなで彼と戯れて（激闘）いると遠くから、何かを探す声

が聞こえてくる。

その声に一瞬だけ彼が振り向くが何事も無かったかのようにスル―して、またじやれてくる。いや、十中八九アンタのご主人さまなんだから反応しろよ…。

「サブレ!!また人様にぐ迷惑を!!ごめんなさい!!」

駆けつけて来た飼い主はじやれつく毛玉を抱き上げ、しかりつけた後に私に大きく頭を下げる。何度も謝ってくる彼女に苦笑をしつつ、私は飼い犬から想像していた飼い主像と違っていた事にちよつと驚いた。

てつきり活発だけどちよつと抜けている人だろうと予想していたのだが、そんな想像をひっくり返すかのように女性は落ち着いた茶髪をゆつたりとお団子にまとめ上げた大人な雰囲気身をまとった人だった。暖かくて柔和な雰囲気の中にどこか目を離さなくさせる何かを感じさせるその人に見惚れているうちに彼女の視線が何かに向いている事に気がつく。

「あの、もしかして、そのコーヒーって貴女のだったりするの…かな?」

気まずげに聞かれたその言葉で合点が行って、笑ってしまう。

「あー、気にしなくても良いですよ。私が勝手にびっくりして落つことしちやっただけですし」

「だ、駄目だよ!ウチの子が迷惑かけたんだもん!!ほら、サブレもお姉ちゃんに謝りなさい!!」

「わふ?」

「全然聞いてなかった!!」

飼い主の気苦労どこ吹く風で他所見をしていた彼の間抜けな返答に再び雷が落ちるが、傍から見ている自分でも可愛いと思ってしまうのだから効果の方はお察しだろう。そんな飼い主とペットの心温まるコントに笑いかみ殺していると、唐突に手を握られちよつと驚く。

「本当にごめんね?もし良かったらお詫びに代わりの甘いもの、御馳走させてくれないかな?」



見上げる様な上目づかいで申し訳なさそうに囁く彼女と、腕の中で同じようにこちらを窺う彼女の犬があまりにそっくりで、私は思わず笑ってしまう。

——— こういう所がそっくりなのはちよつとズルイ。

「へー、美嘉ちゃんは受験生なんだ」

「あはは、まあ」

長い日差しもなりを潜め、涼しげな月明かりと小さなランタンの明かりに揺られるカフェテラスで甘いパンケーキの香りと、柔らかな声が響き、ちよつとした非現実感が自分を包み雰囲気だけで酔ってしまいうようになる。そのせいがお愛想みたいな返答しかできなかつたのだが彼女こと“由比ヶ浜 結衣”さんは気分を害した風も無く樂しげに笑って言葉を続ける。

「そっかー。この歳まであつという間だったから忘れかけていたけど5年前は私もそうだったんだっけ」

「結衣さんの時はどんな感じでした？」

懐かしそうに遠くを見つめる彼女になんとかそう問うと、彼女はちよつと恥ずかしそうに笑ってコーヒーで口を湿らせた。

「私は頭良くなかつたからボロボロだったよ。” 大学行くー” っって言つたときに先生や親に何回も説得されちゃつたくらい」

「へえ、なんか全然そんな感じがしないから意外ですね」

そういつて笑う彼女に自然とそんな言葉が零れた。彼女と話しているとなんとなくだが理知的な部分が見え隠れするのだからタダの謙遜の類だとすら思つたのだ。それが表情に出たのか分からないが彼女はちよつと樂しげに言葉を続ける。

「私の当時の数学は12点くらいだったからね」

「……………」

「マジ」

悪戯が成功したような顔で結衣さんは笑うが、それが本当ならば親や教師が正気を疑うのも無理は無い気がする。だが、彼女の出身大学

は聞いた限りではそこそこの中堅所だったはず。計算が合わない。

「…裏口？」

「全うに合格したし!!」

彼女の可愛い容姿の下に付いたたわわな果実をマジマジ見つめながら言うと彼女は胸元を隠しながら強めに否定して来た。冗談である。……冗談、である。

私の疑惑の視線に苦笑を浮かべながら彼女は言葉を紡げる。

「当時はもう必死に勉強したよー。友達が付きつきりで教えてくれるのに全然分からなくて、友達の方が自信喪失しちゃうくらい。身近に無かった言葉や歴史、考え方がどうしても分からなくて、混乱しちゃってさー」

困ったように笑って言う彼女の笑顔にちよつとだけ影があるのは当時は本当に悩んでいたのだろう事を窺わせる。それに、その悩みはきつと多くの受験生が抱える苦しみなのだろう。

「…そこまで苦しんでも大学に行きたいと思つた理由って、何でした？」

無意識に口から零れてしまった言葉に思わず口を抑えてしまう。初対面の人間にするには少々踏み込み過ぎた質問だったかと思ひ、恐る恐る結衣さんの方を窺つて見れば彼女は恥ずかしそうに頬を掻いて視線を逸らしていた。

「あ、すみません。初対面なのにちよつと失礼でしたよね…」

「えっ!? いや、全然そんなこと思つて無いよ!! ただ、まあ…私の志望理由はちよつと不純な動機だったから、ね」

「不純？」

気まずげに答える彼女に首をかしげると、もつと困つたように笑うのだがどうにも分からない。大学に進学を希望するのに純粹、不純があるモノなのだろうか? 例えば、就職を先送りにするため等、前向きな理由じゃなくなつてそれもプラスに働く事の方が多いのだからそこまで恥ずかしがる様な事でも無い。

その他にも色々と考えてみるが、どうにも納得できそうな答えを見つける事が出来ずにいた私を見かねたのか結衣さんは小さくため息

をついて何かを呟く。

「——い」

「え?」

「だ、だから、——ッ——い」

「ん?」

何かを囁いているのは分かるのだが、肝心の所が聞こえずに何度も聞き返してしまう。

結衣さんが囁く度に顔を真っ赤にしていくので体調を崩したのだろうかとか心配し始めた頃に彼女は“キッ”と顔を上げてはつきりとその理由を口にした。

「だから、“恋”だって!!私、由比ヶ浜 結衣は片思いしてた人と同じ大学いきたいな〜ってという浮ついた理由で受験勉強をしていました!!」

店中に響きそうな大声で明言させられた彼女は“うわーん、年下のギャルにいじめられたよー!!さぶれー!!”と喋って足元で丸まっていた愛犬に泣きついたが、こっちはそれどころではなかった。

こい。来い?濃い?鯉。故意?——恋。

どれだけ穿った見方をして最後にはこの変換へと落ち着いてしまった。

まったく予想していなかったその発想に思考が止まってしまおうが、時間を掛ければ掛けるほどじんわりと納得が自分の中に染み込んで来た。

そうだった。自分は久しくその感情を忘れていたせいか、世の女子の大半はその感情を糧にどんな困難だって越えていけてしまう生き物だったという事までいつの間にか忘れてしまっていた。

二度も経験した苦さが、努めて思いだそうとさせていなかったあの甘い感情を、この人はしつかりと糧にしたのだ。

その事に、素直に感動を覚えてしまった。

自分のステレオタイプな理由のちっぽけさに、笑ってしまった。

「結衣さんって、カッコいいですね」

「うううう、絶対馬鹿にしてるし」

拗ねたようにサブレに顔を埋めながらこちらを睨んでくる彼女が可愛くて、思わずまた笑ってしまう。

こんな可愛らしく強い女性に好かれた男をちよつとだけ妬ましく思い、自分がかつて恋した男を思い出してちよつとだけ想像力を働かせてみる。

気だるげにレポートを書いている彼の隣で課題をこなす自分は厄介な教授や授業の事を愚痴りながら進路の事を話して、冗談めかして彼をからかって怒られている。

飲み会に呼ばれて不機嫌そうな彼を宥めながらちよつとだけ隙を見せてドキドキさせてみたり。

適当な理由をこじつけて二人つきりで出かけてのんびりと二人で歩く姿を。

大学を卒業したアイツとそんな未来を叶える事は出来ないけれど、そんな妄想みたいな想像は確かにやる気をみなぎらせてしまう。

コレは、数学の12点だって確かにひっくり返してしまうには十分な原動力だ。

「ねえ、結衣さん。せつかくだしどんな風に勉強してたのか教えてくれないませんか？最近、ちよつと伸び悩んで」

「えー、絶対に美嘉ちゃん成績いいーあー、サブレにじやれつかれてすつごい困ったなー。明日の予習が出来なかったせいで成績落ちちゃうかもなー」

「急に恩着せがしまくなつたし!!」

渋る彼女にごねまくって教えて貰った”化学記号 クラスメイト暗記法”や”世界大戦くA・B組仁義なき女子高生編”を聞かされた私は久々に腹を抱えて大笑いし、姦しくその夜を過ごし、私はちよつと年上の友達を手に入れたのだ。

きつと、みみつちく貧乏性な自分は彼女や仲間の様に生きていく事は出来ないだろう。

でも、今は、それでもいいと思える。

未練たらしい自分は、今すぐには恋なんて出来ないだろうが、こんな風になつてみたいと憧れる女性と知り合えたのだから。

まずはそれに近づける様に努力をしてみよう。  
そう思えたのだ。

——蛇足——

結衣「あ、もしもしヒツキー？いま大丈夫？」

八幡『…超絶眠くて大丈夫じゃないから切っつていいっすか？』

結衣「えへへ、そんな事いってられるのも今のうちだよー？今日、サブレの散歩中にねー」

八幡『ガン無視かよ…。ていうか、なにお前、いままだ外にいんの？』

結衣「え、うん。いま、帰り途中。それよりも聞いてよー今日なんとヒツキーが好きなアイドルの——」

八幡『どっか近くのコンビニで待ってろ、場所はメールで送れ』

結衣「え！いいよ!!サブレもいるし…」

八幡「んなアホ犬役に立たん。あと、こんな時間にあんまウロウロすんな。切るぞ」

無愛想な声を最後に、無機質な機械音を鳴らす携帯を片手にちよつと呆れてしまう。

結衣「変な所でちよいなあ、ヒツキーは」

携帯の液晶が指す時刻は深夜ちよつと前。彼が住んでる寮から私の住んでるこの町まで来て私をアパートに送れば丁度終電が出てしまう時間。

電話に出るのも渋るくせに、自分を迎えに来るのは迷わない彼の甘さと脇の緩さについつい笑ってしまう。

こんなんではいつ誰に食べられてしまうか分かったものではない。

現在地を送ってサブレをなでくりまわして、考える。

いい子、悪い子、普通の子。

掛け替えのない二人と私をかつてそう評した人がいた。

でも、昔から何度だつて自己申告して来たつもりなのにソレはどうしたつて真に受けて貰えない。

私はとつてもズルイ悪い子なのだ。

「わふ？」

首をかしげる呑気なサブレが最愛の親友二人に重なって見え、優しく撫でた後にゆっくりと背を伸ばす。

さて、彼が来たら何から話そうか？

―サブレの首輪がまた壊れて買いに行かなければならない事か。

―彼が御鼻屑の可愛いアイドルと友達になった事か。

―それとも、懐かしい高校時代の彼考案のへんてこな勉強法についてか。

まあ、焦らなくたって夜は長い。コンビニで彼と自分の分のお酒でも買ってゆっくりと考えるとしよう

「あーんまりノンビリしていると、とつちやうぞ。ゆきのん？」

ちつちやな囁きは鈴虫の歌声と柔らかな草の香りに包まれて月明かりの元へと紛れていった。

プロフという名のあらすじ

城ヶ崎 美嘉 性別：女 18歳

言わずと知れたカリスマJK。若年層が主体の人気であったが、常務のプロデュースにより大人路線も開拓したため高校卒業後は幅広い活躍を期待されていた。しかし、ラジオでもぼろっと洩らした進学希望と地に足が着きすぎた理由が話題を呼んだため暫くの間は周りが騒がしかったらしい。(武Pが常務に呼び出しを喰らう程度)しかし、周りの理解と本人の希望により全面サポートのもとに両立を目指して奮闘中。

今作では武内Pとヒッキーと二回もハートブレイク(バレンタインデー当日)を経験しているためそっち方面ではかなりスレている(TOKIMEKIなんてありやしねえ、)。

ファッションや普段の言動からは想像が付き難いが、ロリコンにも理解があり、庶民派の感覚を持ち合わせた傷心正銘の“いい子”なの

である。

趣味のカラオケの持ち歌は“天城越え”  
重い。

由比ヶ浜 結衣 性別：女 22歳

奉仕部の悪い子担当。

高校の猛勉強の末に大学入学を果たした努力の子でもある。ただ、惜しむらくはヒツキーや、ゆきのんの志望校には届かずに滑り止めに入学を果たした事か。それでも教師・ゆきのんは人目を憚らず号泣した事がその奇跡を物語る。ちなみに、ヒツキーと同じ大学に通つてもほぼバイト浸けだったため甘い生活が遅れたかは疑問。

高校、大学と親友の恋と自分の恋心を抱え続けたせいか、交際経験が無いのに溢れる色気が男を惑わせる。最近の犠牲者は勤め先の保育園に通う“城廻 回（まわる）くん（4歳）”が重度の年上好きコンプレックスを刻みこまれつつある。やだ、魔性のおんな。

長年 煮え切らない環境にいたせいか、ちよつと拗らせている。  
拗らせて無いガハマさんはこちらへどうぞ↓

「散歩日和」／「sasakin」の小説 「pixiv」  
http://www.pixiv.net/novel/show.php?id=5572588

## 最終話 前

「消灯、火の元、施錠確認…よし」

手早く現場内の戸締り確認をしていき、最後の申し送りに跳ねるようにサインをしてグツと身体を伸ばして息を吐き出す。

伸ばした先に映るちよつと傾いた満月がそこそこに遅い時間である事を知らしめ、吹き付ける木枯らしと共に小さくため息を漏らす。

改めて時計を覗きこんでみれば、もはや走った所で終電は絶望的であろうしたものかと考えを巡らす。コレが明日も出勤というならば現場近くの仮設事務所に泊まり込むのも止むなしだが、幸いにも自分は非番であったはず。朝起きたら同僚たちが忙しくなく図面を持って駆け回っている中で起床はご遠慮願いたい。

というか、どさくさに紛れてそのまま出勤扱いにされかねないので絶対に嫌だ。

そう考えると帰宅一択でさっさと動き出すべきなのだが、踏み出した一歩を情けなく声を上げた腹の虫が踏みとどめた。

忙しくて取り忘れていた晩飯の催促にもう一度頭を悩ませる。

どうせ帰宅手段はタクシーしかないならば、ちよつと小腹を満たしてからでもいいのでは？

そんな甘い囁きをしてくる腹の虫君の囁きにこの周辺の飯所を思い返してみる。

寒い秋の夜にあつたまり、丁度よく胃袋を満たしてくれて、なおかつこんな時間でも営業してくれている場所を検索していき、当然の様に一つの結論に行きついた。

「…ラーメンか」

いい。実にいい感じだ。

冷え切って、飢え切ったこの身体を癒してくれる最強の食事じゃないか。

そう考えれば思考はそれに特化していき、大学生時代に作りあげたラーメンMAPを脳内で引っ張り出してみればすぐ近くにおあつらえ向きな店があつた事を思い出す。



そこには学生時代にはしよっちゅうお世話になっていたのに就職してからまったく足を延ばしていない。

懐かしさもひと押しに胸の高鳴りは際限なくメキトキしていき、重かった足取りは上機嫌にスキップまで踏んで鼻歌までうたつてしまふ。

ラーメンを深夜に啜り、明日は昼まで惰眠をむさぼると言うダメ人間まっしぐらな予定に有頂天な俺を、真ん丸なお月さまが呆れたように照らし、木枯らしは溜息の様に紅葉を散らした。

「ハイラシヤシャーイ!!!」

世知辛い世の中にも、秋の底冷えにも負けず煌々と輝く店舗の扉を開ければ威勢の良い声が俺を迎えてくれた。そのうえ、掛けていた眼鏡が一瞬で結露してしまう程の熱気が今は何よりもありがたい。

人も暖房も低めの温度設定のこの世の中でその温もりのなんと有難い事か：っ!!

思わず感動にうち震えていると、店主が機嫌悪そうにこつちを睨んで来たので慌てて扉を閉めてガラガラの席に座る。

いかんいかん、久しぶりに感じる“楽園”の空気に酔いしれてしまったがこんな事では先が思いやられる。今日の俺はココから更に先を味わいに来たのだからうかうかなどしていられない。

そう気を引き締め直してメニューを開いて吟味する。とはいえ、古き良きこの店には迷うほどの品数は無い。あっさり豚骨とどっしり味噌。それと餃子やトッピング程度。新鋭のチェーン系の様々な種類のラーメンも好奇心をくすぐられるが、こういう古風でシンプルな佇まいは男としてカッコいいと思わざるを得ない。

味噌に豚骨、トッピング、量。様々な事を検討を重ねに重ねていると、新たな客が入店して来たのかひやりとした空気が流れ込んでくる。なるほど、いつまでも入り口で開けっぱなしでつつ立っていた自分を睨む店主の気持ちも良く分かる。しかし、自分とは違いさつさと店内に入店したらしく店主の掛け声も若干機嫌がいい。

だが、そんな事はどうでもいい。そう思つて再びメニューに没頭し

ようとする隣にさっきの客が座るのを感じる。こんなにガラガラなのに何で隣なのか……。まあ、いい。別に何処に座ろうが関係ない。再び意識をメニューに戻そうとして隣で上着を脱ぐ気配に合わせ、薫ってくるふんわりとした白檀の様な香りにまた意識を逸らされた。キツイ香水だったなら舌打ちの一つもかましてやろうと思っていたのだがどうにも隣の人自身の自然な匂いらしい。いい柔軟剤使ってますね……。

なんだか隣に座った客のせいで思考がぶれがちではあったが、熟考の末にどつしり味噌のフルトッピング大盛りへと無事に結論が出た。更に、明日は休日で帰りはタクシーである。少々、邪道ではあるが餃子にビールもつけてしまう。ふふふ、深夜に頼むこんな注文などマトモな神経では無い。その背徳感が俺を更に高揚させていく。

さあ、いざ——！！

「なあ、お兄さん。ちよつとウチにラーメン奢ってくれへん？」

「は？」

勢いよく注文をしようと呑みこんだ言葉は横からの無粋な一言によって間抜けな吐息へと変ってしまった。

呆氣にとられたのは数秒。そこから怒りの炎がメラメラと沸き立つまでもう数秒。

———そういうことか。こんなガラガラで横に座るなんて妙だと思っただのだ。

しかも、ちよつとハスキーだがしなやかで高い声は若く、匂いや雰囲気からちよつとした美人であるのは想像がつく。そんな女が態々横に座ってこちらに視線を送っていた時点で気がつき警戒するべきだったのだ。久々のラーメンにちよつと浮つき過ぎていた反省と、それに水を差したこの女への怒り。それが俺を支配する。

壺か、援助の申し込みか。深夜に一人寂しくラーメンを啜る男をターゲットにした悪どいやり口。そんな無粋なモノを神聖なラーメン屋で行うとは最低最悪の下劣である。許し難い。

何よりそんな手口はもうすでに経験済みだ。

家出した京都のバカ娘が全く同じ手口で近づき、それを保護した経

験が無ければ危うかったかもしれないが、あの時とその後の苦労を知った俺には死角はない。

深い溜息を吐きだし怒りを納め、クールダウンする。冷静にこの愚か者を宥める為の言葉をまとめつつ——何が、引つかかった。

白檀の香り。

ハスキーで掴み所のない関西弁。

そして、あの馬鹿が同じ様に声を掛けて来たのも——この店では、無かつただろうか？

脳内にフラッシュバックする様々な情報に従い、ゆつくりと隣に視線を向ける。

あの頃より短くなった透き通る様な銀糸から覗く、狐の様につり上がった細い眈。ちよつとだけ皮肉気に釣り上げた口元。

見間違える事など絶対に無い、その女。

「——久しぶりやんな。おにーさん？」

「——周子」

「味噌のフルトッピング大盛り。あと、餃子とビール」

「って、反応せんのかーい!!」

一瞬だけシリアスな空気になりかけたけれど、ここ一年のアイドル遭遇率を考えれば珍しい事でもないかと思いなおして普通に注文する事にした。むしろ、楽しみにしていたラーメンに一拍入れられて腹立たしいまである。

「もー、なんなん。凜ちゃんや夏樹はんとはもつと劇的な再会しottaやん。もつと周子ちゃんにも構えよー。あ、私にも同じもの一つ」  
「うっせ。俺とお前の間にそんなもん生まれるか。どのアイドル拾った事よりもお前をココで保護した事が一番の俺の失敗だ。ついでに言うとうアイドルが夜中にラーメン餃子なんか食ってんじゃねーよ」

「勝手にP辞めた人がえらそーに指図しないでくださいい、ほいコレ」  
俺のすげない一言に分かりやすく拗ねた周子が嫌味と共にビール瓶の蓋を開けてグラスに開けていき、差し出してくる。

「お前は未成年…じゃねえな、そういえばもう」

一方的に渡され、勝手に合わされたグラスの軽やかな音に思わず言い慣れた言葉が出かかるが、それをすんでで呑みこむ。

そんな俺を楽しげに見やった周子はグラスに口をつけて、アルコールを嚥下して小さく息を吐く。

「家を追い出されて拾われたのが18歳で、もうそれが3年も前の話。結局、おにーさんが346にいた時は一回も吞ませてくれなかったけどね」

「寮の管理人時代と駆け出しの頃にラーメンならたまに食わせてやっ  
たろうが。文句いうな」

タダでさえ酔っぱらうとめんどくさいメンバーの中にコイツやフレデリカが混ざると更に面倒な事になりそうなので出来る限り近づかせない様にしていた。当時は酒気よりも食い気が勝っていたコイツラを誘導するためにレッスン後にラーメンを食わせた事を思い出して微かに笑う。

「ふふーん。周子ちゃんは掃除婦からトップアイドルに駆け上がったリアルシンデレラだからね。今じゃ、哀れな新卒君の財布に気を使う事無くラーメンもビールも飲めちゃうのさ」

「お前が俺の財布に気を使った事がある方に驚きだよ…」

ちよつとだけ得意げに胸を張る彼女に思わず苦笑が漏れ出る。ホントに無一文で東京をふらついていたコイツは346女子寮に住み込みで働かせても極貧生活が続いていたのだからあながち表現的にはまちがっちゃいない。追い出された理由が自業自得過ぎるのはさておいても、懐に余裕が出来ているのはホントらしい。その事にちよつとだけ出来る悪い妹の成長を見た様で素直に嬉しく思う。

「そうだよなあ、歳はほつといっても取るもんな。…中身が伴わなくて  
も」

「…言いたい事は色々あるけど、礼子さんの前でソレ言ったら殺され

んで？」

まあ、それを伝えると調子に乗るだろうから適当な皮肉を口ずさむと半眼で睨まれた。

「ハイオマチ!!」

「おお!!」

そんな実の無い馬鹿話をしていると威勢の良い掛け声と共に、カウンターへ待望のラーメンと餃子が置かれた。

山の様な野菜の山に彩られたぷるぷるなチャーシューに、見ただけで濃厚な事が分かってしまうそのスープ。その大海の中から微かに顔を覗かせる金色の麺が悩ましい。

俺と周子が、辛抱たまらずすぐさま割り箸を手に、手を合掌させる。

「頂きます」

完全なシンクロを店主に見せつけた俺たちはひたすらに無言で麺を啜る。

野菜、麺、スープ。それぞれを味わっているうちにスープで温めなおしたチャーシューに齧りつき、その肉汁と共に今度は全部を同時にくらいつく。噛みしめる度に深みを出すハーモニーの間に餃子を挟み、口直しと共にニンニクの風味を足した麺にもう一度口を運ぶ。

もう一度。もう一度。そう何度も繰り返す間、俺と周子の間に一切の会話は無い。

当たり前だ。この繊細な芸術の寿命は驚くほど短い。よもや話に費やしているうちに店主が見極めた最高のタイミングを逃す事など到底許される事ではない犯罪だ。

アツと言う間に残り一口になったラーメンに、最後まで取っておいた燻製半熟卵を割り黄身を絡めて啜る。

今までのどっしりしたみその風味が和らぎ、一気に優しい味わいになった事を確認し、最後に残ったスープを一気に飲み干す!!

「御馳走さまでした!!」

器のそこまで飲みきった器をカウンターに叩きつけるように戻し、

二人揃って力強く完食と感謝を伝えた俺たちは自然と目があつた。

アイドルとしてどうなのかと思うほど額いっぱい汗を浮かべ、油のせいか妖しく光る口元を真っ赤な舌が淫靡に舐め取った所で目があつた彼女は、本当に楽しげに微笑んだ。

きつと似た様なあり様の俺を見て笑っているのだろうか、“アイドルの周子”よりもずっとこっちの自然な笑い方が自分の知っている“塩見 周子”に近く、久々に見たその表情に頬を綻ばせてしまった。

くすり、くすりと笑いあう俺らは店主の訝しげな視線を受けながらもしばらくの間をそうして笑いあつたのだ。

「で、結局は成長なんか欠片もしてねーじゃねーか」

「ぐへへ〜。今をときめくトップアイドルをおぶされるなんて光栄やんな〜」

最高のラーメンと懐かしい旧交を温められて、実にいい雰囲気を出したまでは良かった。結局最初の宣言通りに奢らされてしまったことも、良しとしよう。

問題は――。

「何でこんなに弱いくせに一瓶丸々飲むんだよ…」

「ねー、何で眼鏡掛け取るん？なんなん、噂の彼女？彼氏？の為にカツコつけに目覚めたん？気色悪いわー」

店を出た瞬間からご覧のあり様になったトップアイドル様のせいで気分は最悪へ直滑降である。ふらっふらの足元に真っ赤に染まつた顔。どんだけ話しかけても帰ってくる見当違いの解答。コレが顔見知りで無けりやすぐさまゴミ箱にシュートしてやっている所だ。

「単純に視力が落ちたんだよ。あと、何だその噂？…俺にそんなもん出来る訳無いだろうが」

「……へー。そーなんや。くふ、くふふふ、モテへんで苦労しまんなー。おにーさん。ほーら、今のうちに美女の匂いと柔らかさを堪能

しー」

「美女の匂いが餃子風味だとは知らなかった。なに？京都捨てて栃木に行くの？宇都宮の駅前飾られてみる？」

「おー、嫁入りやーん。だいたーん、くふふふへへへへ」

周子が奇怪な笑い声を上げながら背中中で身体をすりよせてくるが、最初に感じた白檀の香りも今や餃子と酒臭さに上書きされ、わりかし腹いっぱい現状で身体を締め付けられるのはかなりきつい。

彼女いわく、現在はココからそんなに遠くない所に住んでいるとは言うものの、酔っ払いの言を手放しに信用するのも憚られる。せめて家まで送るにしたらって自力で歩けるくらいには回復してもらいたい。

そんな事を考えながら周子を見渡せば、おあつらえ向きの公園が目についた。

「おい、餃子の女神。そろそろ腕がしんどいから公園で下ろすぞ」

「誰が餃子の女神や!!そんな重ないやろ、この軟弱モノー!もつときばりー!!」

「おらよつと」

「ぎゃん!!お尻が割れたらどないすんの!!もつと丁寧に扱いてや!!」

案の定、背中で暴れ始めて首っ玉にしがみつこうとするが酔いで力が入らないのか、ベンチの上で揺する様に支えていた手を離すと、デロリと落ちて行ってケツを抑えて騒ぎたててくる。うるせえ。

「ケツは元々割れてるもんだ。飲み物買ってきてやるから座ってろ」

「あつ……」

ぎゃんぎゃん騒ぐ周子の頭をちよつと乱暴に撫でまわすと急に静かになった。いつもなら軽口でもつとうるさくなる筈なのに今日は酒が入ってるせいかわつてもと反応が違う事に首を傾げるが……まあ、酔いが回って気持ちが悪くなって来たのかも知れん。ちよつと悪い事には変わりがないのでそのまま自販機へと向かおうとすると、離そうとした手を引き寄せられた。

「飲み物は、いらへん。ちよつと横になれば大丈夫やから、膝、貸して？」

「…そのまま寝たら容赦なく置いてぞ」

何を馬鹿な、と振り向いて言いかけた言葉を噤んでしまうほど周子の瞳は、静かに澄んでいた。下手に触れれば、儂く消えて行ってしまいそうなその雰囲気は、俺が領いた事でちよつとだけ元の朗らかさを取り戻した。

引き寄せられるように腰を下ろした俺の膝の上に彼女はそつとその小さな頭を載せ、小さく息を吐いた。

煌々と輝く月が周子の銀の髪を照らしいつそう冷たい輝きを帯びるが、彼女が触れている部分は焼けてしまうかと思うほど

熱を持っていた。そのちぐはぐな様子に耐えきれず、俺は、なんとかいつもの彼女に戻って貰いたくて言葉を紡ぐ。

「…こんなんに成るくらい酒弱いなら飲むなよ」

出来るかぎりいつも通りを装った、薄っぺらな言葉。最も嫌悪していたはずのその欺瞞に満ちた態度は、すぐに身を持って報いることとなった。

「しように無いやん。お酒飲んだのなんて今日が初めてやし」

「…は？」

俺の間の抜けた返答に彼女は小さく苦笑して、俺の右肩に小さく触れる。

「昔、小学校ではやったんやけどな。石ころスイッチで遊び。」石ころスイッチ” って言って右肩触られたら解除されるまで動いたらダメ。今のおにーさんは、石ころやで？」

「急に、なに言っ 「石は喋らへん」

唐突に始まった謎のゲームに戸惑って動こうとした俺を、静かだが、力強い意思の籠った声が諫める。

律儀に従ってやることなど無い。言われたとおりに黙ってればきつと取り返しのつかない何かが始まってしまう事が分かっているのに、動く事ができなかった。

俺が動かない事を確認した周子は小さく微笑んで言葉を紡ぐ。

「今から言うのは独り言や。酔っぱらってどーしようもないクダまい取る酔っ払いの独り言。」



おにーさんが辞めてからな、色んな人がデレプロに入って来たわ。どっかの目つき悪いアホ垂れと違つてしやしきしやしきしたサブプロデューサーやマネージャーとかメイクさん。それこそ、今までの極貧は何だったん？て言うくらい大切にされとんの。本物のお姫様みたい」

周子の口から語られるデレプロの状況は概ね自分が予想していたものと近くあるようだ。してやりたかった待遇に彼女達が恵まれている事にちよつとだけ救われる様な気分になつて――。

「でもな、もう、誰も」塩見 周子」を見てくれる人は近くにおらんくなつてもうた」

続いたその言葉に頭を殴られた様な錯覚に陥る。

「私が馬鹿やつても誰も何も叱らないんだ。冗談を言つても合わせてくれるだけやし、ご飯だつて洒落たもんしか連れつてつてくれない。いつだつて私が中心に、気分良く居させてくれようとしてくれる。贅沢な悩みや」

自重するように笑う彼女に掛けようとした言葉は、視線一つで遮られた。

「みんなも、そんなもんだつて言うから無理やり納得してみたりな。そんなんで騙し騙しやつてたらおにーさんの話が聞こえてくるんよ。昔とまったく変わらないうおにーさんの話が、さ。

みんなからソレを聞いたたびに、紗枝に煽られたときに素直に走りだしとけばよかつたつて何度も思つたよ？

でもね、それでも、心のどつかでおにーさんに怒つてたんだ。辞めた理由を凜ちゃんから聞いてますます憎くなつた。

“私がこんな孤独な思いをする事を分かつてたのになんでいなくなつたんだー”つて、泣きたいくらいに怒つてた。

すつごい身勝手な事は百も承知だけどね」

そう言つて笑う彼女はゆっくりと立ちあがつて満月を見上げて続ける。

「だから、羨ましく思つてる癖に怒つてる自分も納得させる事が出来ない周子ちゃんはあるのラーメン屋にあの時と同じ時間に、同じ曜日に

通うっていう謎の行動に出たのです。

東京で一人追い詰められていた自分を拾ってくれた王子様が、また鬱屈した自分を救いに来てはくれないかと望みを掛けて何回も通ったのです。他の子の様に迎えに行く勇氣のないドヘタレはアホみたいに通って、遂にその背中を見つけてました」

「その背中を見つけた時に、自分を覚えてくれていた時に、本当に昔のままの“塩見 周子”を見つめて笑ってくれた時に全部がどうでもよくなったんや。おにーさんを憎む気持ちも、トップアイドルの誇りも、他の子達への嫉妬も全部なくなつた。

名誉も、お金も、何にもいらへん。大切にだつてきれなくてええ。アンタが、近くにいて、見てくれるだけ。たつたそれだけ。私が欲しいもんはそれだけやつたつて気がついたから」

月明かりを背に、こちらを振り向いた彼女の表情は窺い知る事が出来ない。だが、彼女の頬から、小さく地面に吸い込まれる滴が彼女の激情を表している。

そして、願わくば、その先の言葉だけは、聞きたくない。

「何にもいらへん！アイドルだつて、アンタの傍にいたくて始めた！！アンタがいてくれへんならどんなに有名になつたつて意味がないんや！！」

流れる滴もそのままに、彼女はいままで堪えに堪えていた激情を吐きだすように叫び、最後に――

「――戻つて、来てよ。八幡」

絞り出すようなその懇願に、思わず彼女を抱きしめた。

ほつそりとしたその身体を、力の限り抱きしめる。ただ、その流れる涙だけはぬぐう資格を俺は持って居ないのだ、

「ありがとう、すまない。周子」

噛みしめる歯の隙間から何とか出した血ヘドのような言葉が、自身の胸を締め付ける。

「――っなんでや！！なんで！！なんでっ！！」

胸の中で叫びながら、爪を立てて激怒する彼女の痛みを甘んじて受け入れる。本当に、女の子にココまで言わせておいてデツカイ傷をつ

ける自分は、何遍だって死んだ方がいい。だけど、例えそうだとしても、彼女の願いだけには答える事が出来ない。

きつと、自分が彼女の元に戻れば束の間の安楽は手に入るかも知れない。でも、それはアイドルである彼女を殺す事に他ならない。彼女がいらないと嘯いたトップアイドルの道を、誰よりも近くで見ているのは他ならないこの自分だったのだから。

自分と変らぬ死んだ魚の様な眼をしていた彼女が、アイドルと接して、アイドルになってからの彼女の瞳の輝きと物語を俺は世界中の誰よりも、知っている。

彼女が寮の廊下をステージに唄を口ずさんでいた頃からの一人目のファンとして、それだけは出来ない。

「俺が、お前の一番のファンだから、かなあ」

「——っつ!!」

呟いたその一言に彼女は大きく肩を震わせ、それでも納得はいかない様に強く俺の服を強く握る。

駄々をこねる子供の様なその仕草に、何故かちよつと笑いそうになりながらも言葉を紡ぐ。

「お前がテレビで活躍するのが堪らなく嬉しい。街で流れるお前の曲を聞くと思わず足を止めちゃう。だから、歌うのを辞めるだなんて言わないでくれ」

「…アンタがそばにいるんやったら幾らでも歌って上げるって言うてんじゃん」

「それで、あんなにお前を応援してくれていたファンの事を蔑ろにできくらいいお前は器用なのか？」

「……」

黙りこくってしまう彼女の頭を出来るだけ優しく撫で苦笑する。掴み所がないようで、その実、結構な直情型の彼女はきつとそんな器用で不実な事は出来ない。昔はいざ知らず、今の彼女は心の芯までアイドルだ。ソレを捨ててしまう事は昔の死んだ目をした彼女になってしまう事だ。

だから、たつた一人の為に生きると言う彼女の願いを、俺はファン

としても、兄貴分としても聞いてやる事が出来ない。

「はあー、おにーさんてやっぱリズレイ男だよね…」

俯く彼女は小さく溜息をついてゆっくりと握っていた手を緩めて半眼で眩き睨んでくる。

今言った言葉に何の嘘偽りは無いが、問われた内容に一つだけ明言していないのはしつかりばれていたようで少々気まずく、目を逸らしてしまう。

「ま、今日のところは言及するのは辞めといて上げる。それと、コレ渡しとくね」

そういつて溜息をついた彼女はポケットからあるチケットを取り出して俺の胸ポケットに差し込む。

「このライブを聞いた後にもつかい楽屋で答えを聞かせてよ」

「?——ッこれ!?!」

渡されたチケットの内容は——今冬出展予定のシンデレラプロジェクトオールスターズの貴賓席のチケット。出す所に出せば数百年にも成る貴重な物。

俺の狼狽を楽しむ様に周子は頬笑み、踵を返して歩き出す。

「お望み通り、そっちから頭を下げて戻ってきたくなるようなライブ、魅せたいげる」

さつきまでの激昂が嘘のように、自信満々の笑みを浮かべて去って行く彼女の背中に呆気にとられて動く事が出来なかった。それでも、彼女の確とした足取りを見るに送る必要もないかと思ひ直してベンチに腰を下ろして大きく溜息をつく。

秋の夜長とはいえども、今宵ばかりはちよつと疲れた。

綺麗に辞めれたもんだと思って安心していた物が蓋を開けてみたらどうした事かしつちやかめつちやかで、結局自分は嫌なもん蓋をして投げ出していただけなのだと思ひ知らされる。

年下の女の子達を傷つけ、泣かせ、慰められ、世話になっている情けないこの姿を笑っているであろう月に貰ったチケットを透かし、小さく眩く。

「——これが、最後だろうか」

プロフという名のあらすじ

塩見 周子 性別：女 年齢 21歳

一応、本作過去編の八幡メインヒロイン枠系女子である。

三年前に京都の実家を追い出されて勢いで東京まで飛び出してしまったロッキンガール。所持金がゼロになった所で禁断のたかりを行ったのが八幡でそのまま346の女子寮の管理・清掃員として住み込み条件で雇われた(保護とも言う)。デレプロ初期・中期メンバーにとっては“明るい京都弁の管理人さん”のイメージがいまだに強い。そんな彼女がアイドルになったきっかけは常務発案企画の“プロジェクトクローネ”である。武内Pと常務のグループで勝った方が傘下に収まると言う危機的状况で、常務側の最後の一人として紹介された(ラスボス感)。

有名どころをかき集めていた常務のおふぎけ枠かと思いきやその圧倒的な才能にデレプロを全滅寸前まで追い込み、常務に“高垣 楓”以来の逸材だといわしめた。

紛争終了後は、アイドル部門のエース枠として様々なイベントやライブをこなす万能選手として活躍を見せる。

以下、s a s s a k i n脳内放送済みアニメの『アイドルマスター @シンデレラガールズ〜八幡Pと!!〜』各話からの抜粋である。

なお、一般放送予定は無い。

第16話「出身は京都!?家出少女にご注意を!!」

周子「え、なにになに?芸能事務所に連れてきちゃうってことはもし

かしてスカウト!? えっへっへー、いやー見る目があるねーおにーさん!!  
でも、私のギャラはちよつと高めで——」

八幡「はいこれ」ポイっ

周子「…モツプとブラシ?」

八幡「ココが今日からお前の職場の”346アイドル女子寮”だ。  
三食部屋付きで雇って貰うのに苦労したんだぜ? 早速だけど、ベテラ  
ンのチヨ婆に挨拶してきたらそのまま掃除だな」

周子「……まじかよ」

第36話「二人は同郷!? ハートキャッチ・京娘ズ!!」

周子「さ、紗枝ちゃん!!」

紗枝「塩見屋の周子ちゃん!! どないしてこんな所に!! 御両親心配し  
とつたんどすえ!!」

周子「ウチの両親なんてどうでもええけど、紗枝ちゃん早く逃げて  
!! ココにいたらブラシと雑巾持たされて清掃員にさせられちゃった  
上に、ご飯まで作らされるよ!!」

八幡「…それがお前の仕事だし、三日に一度サボってまだ置いても  
らえてる事にまず感謝しろ。馬鹿」

第123話「衝撃! クローネ最強のラストピース!!」

常務「紹介しよう、コレがクローネ最後の一人で、最強の、アイド  
ルだ!!」

凜「…うそ、でしょ」

美嘉「あんまり、笑える冗談じゃないわね…」

八幡「おい、今なら、罰当番三日で勘弁してやる。だから、さっさと  
戻ってこい!! —— 周子おおお!!」

——周子「やっと、私のこと見てくれたね。おにーさん」

## 最終話 中

12月25日。世間一般で言えば聖夜と呼ばれ、神への祈りを捧げるべ清き尊き日。

本来は家族で教会に赴き祈りをささげ、ディナーを饗する厳かな日である。遠き東洋に伝わるまでにどんな経緯があったのか随分と本来とはかけ離れてしまった行事になった事を嘆かれる昨今。しかし、今日ばかりは、少なくともココに集った夥しい程の人々に関して言えば本国の巡礼者達以上に真摯な気持ちでココに集っているのかもしれない。

誰も彼もが凍える様な寒さに白い息を洩らしながらも沈痛な顔で、列をなして一点を見つめる。明るくライトアップされた巨大なドーム。そこそは彼らのゴルゴタの丘だ。

大々的に打ち出されているそのポスターや垂れ幕に映る姿は彼らにとつては遠き過去の聖人よりも自分を救って来た信仰の対象すらあつた。

だが、それは、今日終わるのだ。

現代において信仰にすら取って代わった“シンデレラプロジェクト”。

七万にも及ぶ人間が悔恨と惜寂の感情を籠めつつも、その最後のライブを心待ちにその開催を待ちわびていた。

「比企谷様ですね？専務よりお聞きしております。どうぞこちらへ」  
「…専務？」

一種の狂信すら感じるほど無言の列の脇を素通りする気まづさと、周囲の視線を一身に受けながらも列整理の兄ちゃんに周子に渡されたチケットを見せれば真つ青な顔して奥へ飛んでいき、タキシードを着た壮年の紳士が最初に発した言葉に色んな疑問をすつ飛ばしてそんな事を呟いてしまった。

自分の知り合い、というか、ギリギリ面識がある346の最上級権



力者は“常務”だったはず。顔も見たこと無い“専務”にお聞きされる理由は無いはずだ。

「?…ああ、失礼しました。貴方が在籍していた頃は“常務”でしたね。今夏に美城お嬢さまは大旦那様から昇進を言い渡され“専務”と成られましたので。さあ、お嬢様がお待ちですので」

自分が何を疑問に思っているのかに思い当たった紳士が朗らかに笑いながら誤解を解いて道を進めてくれるが、足取りは重い。

え、何。まだ出世すんのあの人。

バイト時代ですら圧倒的な威圧感に人を寄せ付けなかったのに、更にレベルアップしたらいよいよ結婚相手見つからないんじゃない? というか、アレより怖くなった人に申し訳程度に持って来た貢ぎ物の安物ワイン(俺基準での最高品質)を渡すのとか実質罰ゲームじゃない。えー、てかもうやっぱりの人いんのー。

脳内でうんざりして悪態をついていると簡素な廊下は進むたびに上等な作りになって行き、いつの間にか板張りで高級な絨毯が敷き詰められた廊下まで進んだ所で気がつく。

「……、貴賓席じゃないんですけど、道間違ってますか?」

「いえ、あつてますよ。専務からは貴方はココにお通しするように申し使っておりますので」

引きつった表情を俺に紳士は朗らかな笑顔で目の前の扉を指し示す。業界の噂でしか聞いた事のない“VIP席”を超える超高待遇席“VVIP席”。

重厚な彫刻で囲まれた高級そうな木製の扉についている取っ手すら触るのを躊躇われる輝きを灯しているのだからそこがいかに一般人に不可侵な領域であるかを知らしめる。縫るように紳士を見やれば笑顔で頷かれるが、俺が求めているのはそういうんじゃない。

そう目で訴えかけるがどうにも笑顔しかかえってこないのので大きく溜息を吐いて、厳ついライオンさんが啞える金のわっかを打ち鳴らし、待つ事数秒。

「構わん、入れ」

聞こえてくる変らぬ威圧感たつぷりな声に胃が痛くなって紳士改

め執事さんを睨んでみると笑顔で返された。死ね。

痛む胃を抑えて、小さくため息を吐いて取っ手に手を掛ける。ココまで来て帰る事もいままさら出来ない。別れ際に浮かべられたアイツらの顔を糧に何とかその取っ手を押し開く。

「おう、久しいな裏切り者の比企谷」

「…初っ端からひでえ言われようだ」

奮い立たせた意気地を初っ端からぶちかまされた俺が膝から崩れおちるのを彼女は楽しげに口の端を上げて笑う。そのドサドっプリは御健勝な様で何よりだチクシヨウ。その筋の人ならきつと結婚相手だって見つかるだろうよ。

ハードパンチに震える膝を何とか支えて立ち上がり彼女に改めて向き直ると予想と違った彼女の姿に少し驚いてしまう。

暗色系でありながら煌びやかでシックなドレスにシルクのケープをはおった彼女は一目で分かるほど最高級である事が分かるロングソファアーに気だるげに寄りかかり、足元を見ればヒールは脱ぎ散らかされている。近くに据えられたローテーブルには並々とグラスに注がれた赤いワインに、華やかなツマミが置かれておりソレを無造作につまんで口に運ぶ…まあ、ありていにいって、だらけ切った常務がいた。

「なんだ、人の顔を珍獣みたいに」

「…プロジェクトの集大成に随分とお寛ぎつすね」

「バカもん。最高責任者がいまさらあたふたしている様な状況の方が問題だろう」

言われた言葉にそりやそうかと変に納得してしまう。だが、何より気になるのはバイトをしていた頃とは随分と違うその態度だ。

「…なんかキャラ変わってませんか？専務に昇進して方向転換したんですか？あ、昇進おめでとうございます」

「社員でも無い奴の前で肩ひじ張るのも馬鹿らしくろう。それに、自宅では大体こんなもんだしな。お世辞などいらんから、その手に持っている酒をさつさと出せ。お前も飲むだろう？」

「いや、俺は「飲め」…ここまでいくといっそ清々しいアルハラだな」

どうやらコツチの方が素らしい彼女の号令に忠実な執事さんが恭しく俺の安酒を受け取り、一人掛け用のソファ―に用意をしてくれるので没々導かれるままに腰をおろす。

「社員なら問題だろうが、完全なプライベート空間に他社の人間だからな。端的に言っても」年上のお姉さんにお酒を御馳走になる若者“””と言ったところだろう。――うむ。悪くない酒だ」

「ははあ、さては既に大分酔ってますね？もう”お姉さん”なんて名乗れる年齢じゃないのに」

「ぶっ殺すぞ」

目がマジで、空いた酒瓶を片手に装備した彼女を見て両手を上げて降参しておく。まあ、言われてみれば彼女の軽口はともかく確かにその理屈は一理ある。相手がココまで腹の内を見せている様な空間でこっただけが肩ひじを張った所でしようがない。折角の幻の観客席に座れたのだから精々楽しませて貰うとしよう。と、思いなおしていたら結構重めの音と衝撃が自分の肩に走った。

「フン、相変わらず生意気な小僧だ。腹立たしい」

「いや、ここまでやってまだすつきりしてねえのかよ…」

酒瓶の代わりにガチめの肩パンを二発ぶちこんできた彼女が深く息をつきどっかりとソファ―に腰を落とす。マジでどっかの独身を思い出すくらい男らしいなこの人。いまさら隠し属性を出されても持て余しちゃうぜ。

そんな事を思いつつかっぱと杯を空けていく彼女に溜息をついていると扉から鳴る硬質な音が新たな来訪者を告げる。

「構わん。入れ」

さつきより若干不機嫌そうな声を出す彼女の声に次の来訪者にそっと心の中で詫びる。きつと今頃扉の向こうで胃を痛めている事だろう。すまん。

「失礼します」

そんなことを考えていると耳を叩いたのは聞きなれた眩くような低い声。しかし、聞き間違えようのないほどその声に秘められた熱さは健在で、思わず苦笑してしまう。

入って来た人物がこちらに気がついた事を見て俺も席を立って頭を下げる。

「ああ、お久しぶりです。比企谷さん。お元気そうで安心しました。今日という日にお越し頂けると聞いて嬉しく思っていました」

「御無沙汰してます、武内さん。：抜けた分際でこんな良い席を貰って本当にすみません」

「貴方が尽力してくれていなければ、今日という日はありませんでした。胸を張ってください」

「……ありがとうございます」

厳ついその顔に朗らかな頬笑みを浮かべて話しかけてくる彼に申し訳なさを感じて言葉を紡げば、彼は真摯にそう答えてくれるのだから、まったくもつての人たらしだ。そんな悪態でも浮かべなければ、つい泣いてしまいそうになるくらいには。

「まあ、用意してやったのは私だがな」

：コイツ、酔うとめんどくせえな。

「で、武内。用件は何だ」

仲間外れにされたのが不服なのかお年を召したお嬢様は不機嫌そうに武内さんに問い、その声に改めて背筋を伸ばした彼が力強く答える。

「観客の収容が済みました。間もなく、開演出来るかと思えます」

「そうか。：折角だ、お前もココで見に行け。お前にはその資格がある」

「いえ、しかし……」

「今日の為に用意したスタッフも、機材も、段取りも全てはこれ以上無いものを揃えている。もし何かあるようならば、お前や私が騒いだところかどうかにもならん。——それに、教え子の卒業だ。今日くらいは信頼して、看取ってやれ」

「……ありがとうございます」

そういつて遠くを見つめる常務の表情は何処までも優しげで、武内さんは深く頭を下げて残り一つのソファへと腰を掛けて無線に小さく何かを呟き息を吐く。

「さあ、目を見開き一片も見逃すな。お前らが魔法を掛けた原石達の輝きを。そして、これからの芸能界を346色へと塗り替えていく暁の眩さを。全てを見届け、誇れ。コレがお前達の集大成だ」  
常務の小さく、歌うようなその一言と共に、会場内の明かりが一気に落とされる。

魔法の夜が、やってくる。

卯月「レディース!!」

未央「アーンド!! ジェントルメン!!」

凜「今日という清き日にココに集まってくれた、ファンの皆様に限らない感謝を!!」

暗転した世界に浮かび上がる三つの影。逆光に照らされたその姿は判別は出来なくてもその声を聞き間違える物はこの場にも、中継されているテレビの先にも、きつと誰もいない。

未央「今夜、ここで起こる事がきつと全てが奇跡で成り立ってる!!」

卯月「いまだって瞬きをしたらいつもの日常に戻ってしまうじゃないかって、信じられないくらい!!」

凜「それでも、夢で終われないから必死にココまで全力で駆け昇つて来た!!」

未央「でも、それでも、きつと」

卯月「ココがようやくスタートラインだから!!」

凜「だからこそ! 最初に聞いてもらいたい曲は!!」

卯月・凜・未央「お願い! シンデレラ!!」

時々不安げな弱さを滲ませる少女達の声はそれでも迷いは無く、力強く示したのは自分達をココまで押し上げてきてくれたこのプロジェクト最初期の、どこまでだって駆けていく意思を歌ったその歌だった。

宣言と共に全ての闇が払われ、眩い光がステージを包む。

焚かれたスモークが晴れ、強烈な光に奪われた視界が戻ってくる頃に並び立つのは、全てのアイドルの頂点に立った15人であった。

沸き立つ大歓声に最初に答えたのは、全ての闇を払う輝きを持つ太陽を背負った少女達。

きらり「みんな！はぴはぴだにー!!」

拓海「最高の聖夜にしてやつから!!アンタらも気合い入れてブっ込んできな!!」

未央「みんな！ありがとー!!」

美嘉「最高のトキメキを経験させてあげる!!」

夕美「みんな!!忘れられない夜にしようよ!!みんなの力で!!」

彼女らがたった一言ずつ叫ぶだけで会場は嘘の様な熱気に包まれる。歌声が、ダンスが、笑顔が。全てが沈んでいたファン達の心につけていく。熱狂的に高まった会場の雰囲気は留まる事を知らず温度を上げていくかと思われる程だ。しかし、そんな彼らは一瞬だけ桜の花びらが舞ったかのような幻想に戸惑う。

燃え上がる心を優しく諫める様な慈愛に満ちたその声は、季節外れの桜さえ幻視させて魅せる。花びらを背負った少女達がゆったりと躍り出る。

菜々「みんなー!!大好きだミーン!!」

杏「待ったく、クリスマスまでこんなに杏が働いてるんだからみんなも怠けちゃだめだよー」

島村「島村卯月!!一生懸命頑張ります!!」

みく「う、う。既に泣きそうだけど、全力でがんばるにゃー!!」

志希「うーん、今夜は最高に面白い夜になりそう!!みんなたのしんでねー!!」

その柔らかな華やかさに誰もが癒されそして喜ぶ。飛び出た魅力が無くとも、いや、無いからこそ誰よりも自分達のそばに寄り添い元

気をくれる彼女達のその声は何度だって自分達を救って来た事を思い出させてくれる。

そんな、春の木漏れ日の様な優しい声に奪われていた心は、すっと囁くような、それでいて絶対的な存在感を感じさせる声に縫いとめられた。

聞いたものを心から虜にし、石の様に動けなくしてしまふほどの美しさを感じさせる魔性の声が観衆を一瞬で引きつける。

加連「まだまだ、全然たりないでしょ？」

文香「物語にだって無かった新しい世界と一緒に見に行きましよう」

凜「ふふ、悪くないね。…いや、すつごく良い」

楓「クリスマスはゆつくり済みますか？ふふ、今日だけはダメですよ？」

周子「最高の祭囃子、聞きたいやろ？」

そして、全ての声が、踊りが溶け合って完璧なハーモニーへと変わった時に会場から音が消えた。

いや、正確には七万人もの歓声が最高潮に成って時にソレは最早音として人は感知しない。全身を叩く衝撃としか感じる事が出来ない。それでも、少女達の声はかき消されること無く会場の隅まで響き渡る。掠れそうになる声を必死に繋ぎとめ、滴る汗もぬぐう事もせず、全てを伝える事に集中する。

きつと、一人ではすぐにダメになっていた。それでも、歌い続けられるのは、仲間の声が繋ぎとめてくれるから。

永遠にも思える五分も、遂には終わりを迎える。

最後のワンフレーズまで魂を込めて歌った。たった一曲を歌いきっただけで倒れこみそうになる。でも、姿勢は終わっても崩さずに気合いを入れて保つ。

満身相違なのは観客も同じなのか、さつきまでの激動が嘘のように客席は静まり返っている。

誰もが、息を潜めて、静かに待つ。

そんな沈黙がどれだけ続いたのか、ようやく一つの影が動く。

その人こそは本当の意味での、最初のシンデレラ。

全ての始まりが、全ての終わりの始まりを告げる。

楓「始まりは、小さな商店街でした」

何処か遠くを見つめる様に彼女は小さく目を眇めながら小さく語りだす。

楓「ステージなんてとても言えない簡素なお立ち台で、音源はカセットCD、衣装は手作り。お客さん所がこつちをみる人もいないくらいなちっぽけなライブ。そこが初めての一步でした」

「プロデューサーは何度も申し訳なさそうに頭を下げて来てくれましたけど、私はモデルだった時には感じなかった楽しさを感じていました」

「回数を重ねる度に、近所の子供と友達になって公園で遊んだり、商店街のみんなが差し入れをしてくれるようになったり、スタッフの皆と帰りに飲みに行った店でお客さんも巻き込んで歌ったり。本当に、笑っちゃうくらいに騒がしくて暖かい毎日がこのプロジェクトの根っこなんだと思います」

「そうして、ちよつとずつお客さんが増えて、テレビ局に取り立てて貰ったりなんかしてちよつとずつ歩んでいると後輩が出来ました。明るくて、強くて、ひたむきな可愛い後輩と踊るステージやイベントは目が回るくらい騒がしくて、楽しくて日々はもつと輝きを増していききました」

「そうして、いっぱい輝きは日々を増すたびに強くなっていき、今日、こんなにたくさんの方が駆けつけてくれる程にまで至りました」  
そこまで語った彼女は、遠くに向けていた視線を目の前のファン達にゆつくりと向けて静かに言葉を紡ぐ。

「そんな“シンデレラプロジェクト”は今日のライブで一旦、終わりを迎えます」

その言葉に先ほどまでの熱狂が嘘のように静まり返った観客が息を呑み悔しそうに、悲しそうに声を洩らす。

なんでなのだ、これからじゃないか、終わらないで欲しい、と訴え



かけるファン達に彼女は優しく微笑んで言葉を紡ぐ。

「ありがとう、でも、彼女達という宝石を詰め込んでおくには、このプロジェクトではちよつと小さすぎますから」

その一言に、ファン達は息を呑んだ。

「最初は、小さな輝きだったのかもかもしれません。でも、彼女達は私と同じように仲間と、応援してくれているファンと共にちよつとずつ歩み、真つ暗な夜空でもその存在を示せるくらいに輝ける様になりました。だから、こんな小さなくくりでは無く夜空を照らす星として、彼女達は今日、このプロジェクトを卒業します」

「広大な夜空へ旅立つ私たちと、これからも一緒に歩んでくれますか？」

彼女の言葉に、全ての観客が涙をながしつつ大歓声で答える。

そうだ、自分達はプロジェクトに魅かれていた訳ではない。輝く彼女達の笑顔に、姿勢に、心に魅せられていたのではなかったか。

枠組みが無くなって羽ばたこうとする彼女達を自分たちが支えられないでどうすると言うのか。それが出来なくて、何がファンだと言うのか。

その思いを載せて必死に声を上げる彼らに、彼女は微笑んで言葉を紡ぐ。

「さあ、魔法の夜は始まったばかり。シンデレラの魔性が解けるまで思い切り、踊りましょう？ふふ、良い出来です!!」

こんな時でも変わらぬ彼女にメンバーは肩を落として苦笑し、ファンは大笑いを上げる。

ソレを皮切りにしたのか大音量の音楽が流され、ソレに負けないくらいの大音声がステージに響きわたる。

茜「こんなときでも変わらない楓さん!!流石です!!負けられません!!燃えてきました!!ボンバー!!!」

幸子「デレプロも、人気投票の数字なども世界一可愛いボクの前では無意味だと言う事を教えて上げます!!」

奏「ふふ、出鼻にあんなに見せつけられたんじゃこつちまで燃えてきちゃった。私らしくないわね」

入れ替わりに入って来たアイドルに再び歓声が響き渡り、ファン達の興奮が再び高まって行くその姿にはコンサートが始まる前の悲壮感など欠片も感じさせず、ただ純粹に楽しんでいる事が窺える。全てを呑みこみ、また決意した彼らの笑顔こそがシンデレラを振るい立たせ——再びドームは熱狂に包まれた。

知っていたつもりだった。分かっていたつもりだった。彼女達が眩過ぎる星々だと言う事など。だが、ソレは勘違いだった。この会場の腹の底にまで響くその熱狂が否応なくソレを証明してくれる。

彼女達はまだ夜空にすら昇ってなどいかなかったのだ。

その事実にも全身の力が抜けてしまうように深くため息をつく俺に、専務がちよつと得意げにちよつかいを掛けてくる。

「ふん、逃がした魚の大きさを今さら理解したか。愚か者め」

「…ホントに酔うとガキっぽくなりますね、専務」

「お前ら男は酔っても無いのにクソガキのような意地を張るのだからもつと手に負えん。…まあ、もつとも片方は最近は少しはマシになったようだがな？」

拗ねた様に悪態をつく俺に楽しげに喉を鳴らしてやり込めた彼女は意味ありげにもう片方のソファに目を向ける。端的に言つて武内さんだ。

「…？武内さんは十分立派な大人でしょう。アンタよりかは」

「ククツ。大人、なあ。だそうだ、よかつたな武内。少なくとも同性からみればメンツは保たれているらしいぞ？」

「専務、どうかその辺で…」

「嫌だね。日頃の私の頭痛の鬱憤はこんなもんじゃない」

いやらしげなその視線と含みたっぷりなその声に武内さんは気まぐげに視線をそらす、流星は専務。パワハラに躊躇いが無さ過ぎる。

「おい、比企谷。高垣をみて何か気が付かなかったか？」

「は？気がつくたって、いつもどうりにギリギリなギャグセンスだと、

し、か——」

言われてさっきの感動的なスピーチを成し遂げた彼女の姿を思い出してみても、一点だけ見慣れないものが輝いていた事に気がつく。

「え、あれ？あれって装飾とかじゃねえ…の？」

その左の薬指に輝く、その眩いリングの意味する所とは——。

「馬鹿者。間違ってもアイドルに装飾でそんなものつけさせるか。ならば、結論は一つだろう」

挟んだ疑問は最高責任者の力強い言葉に否定され壊れたブリキの様に軋んだ動きで首を向ければ、みた事もないほど顔を真っ赤にして顔を覆う偉丈夫が一匹。

つまる所、そういう事なのだろう。

「えーつと、…おめでどう、ございます？」

「…報告が遅れてすみません。ありがとうございます」

いや、あの二人を巡る大騒動には俺も立ち合わせていたから二人が恋人である事は知っているのだが、まさかこのタイミングでそんな思いついた行動に出るだなんて思わなかった。二人とも情熱に浮かされて突発的に動く人間では無い事を知っているために驚きもひと押しだ。

「…ていうか、実質的な会社の最高責任者にその話題を振られる事が一番こえーんすけど。良いんすか専務的には？」

「いいも何も、焚きつけたのは私だ。憚ることも無かろう」

「……おかしい。謎が深まった」

まさか、質問が疑問を深める事になるとは思わなかった。そんな風に額に手を当てる俺を出来の悪い生徒をみる様な溜息について専務がみてるのが非常に理不尽だ。

「そう難しい話ではない。美城の家は古くから実力主義だ。最も社内でお見合いまでは強制的にさせられたという事が始まりでな。そこから省くが、私か高垣を選ばせてやったらすぐさまアッチに飛んで行ったという訳だ。——その憂さ晴らしでこうしている訳ではない。その目を辞めろ」

事情を聴いているウチに募った言いたい事はどうやら目に現れてしまったようだ。ハチマンソンナコトオモツテナイヨ。

「まあ、良い機会でもある。年齢もそうだが彼女ほどのタレントならこの後も暇になる事など無いだろうからな。プロジェクトの終わつた今くらいなら諸々どさくさに紛れて都合も良い。そんなわけですけさせている。むしろ、キューピッドで奴だよ」

そういつて笑う彼女は本当に含みなく彼らを祝っているようで、不覚にも少しだけカッコいいと思ってしまった。コレが美城式人心掌握術なのか、彼女のカリスマなのか少々判断に迷うが、武内夫妻はどうやら上司に恵まれたのは確かだ。

「ま、コレの処置はコイツラに限った事でも無い。私は基本的にプライベートとビジネスは分けて考えるタイプだ。誰にたいしても、な、、、、」

「…なんすか?」

「…いや、あの娘も厄介なのに引つかかったものだと思っただけだ」

あんまりにさっぱりした解答に苦笑を洩らしていると、意味あり気にこつちも視線をよこして来たので首を傾げてみると彼女は深くため息をつく。

「まあ、いい。どうせ私はしばらく武内夫妻と、荒れるちひろの相手の手いっぱいだ。そつちがどうなるかまで構ってられん。お前は、これから始まる演目を見てこれからの事を考えるがいいさ。変な意地を張らぬように、後悔の無い選択をするためにな。——コレは世界にたった一人、お前の為だけに謳われる歌なのだから、、、、、、、、、、」

そういつて彼女が指差す先には、たった一人のアイドルが降り立った所だった。

会場の熱気を一身に受け、ほんの少しだけ頬に朱が差しているが、その表情に気負いはない。

柳の様にしなやかで、雪のように彼女は静かにステージの中央に立つ。だが、彼女のさつきまでと違い過ぎる衣装にちよつとだけ会場に

どよめきが起こる。

銀糸の様な髪を短く後ろに纏め、狐の様なつり上がった眺。そんな彼女が身にまとっているのはさつきまで来ていた煌びやかなドレスではなく、肩を出した特徴的なパーカーにジーンズ生地のリョートパンツにしなやかな流線を描くストッキングに包まれたその足。

綺麗でもある。センスだつて感じる。だが、ソレは明らかに私服に分類されるもののはず。何故ソレを彼女がいま着て来たのかが分からない。だが、この会場で、たった一人、俺だけには分かつてしまった。それが、自分と初めて出会った時の服装である事を。

髪長さ以外は何一つ変わらないそのいで立ち。だが、だからこそその瞳の奥の輝きとしゃんと伸びた背中があ頃と違う事を俺に知らしめる。

しかし、その意図を読もうとするこつちを余所に、彼女は俯いたまままでまったく動かない。

ざわついていた会場もそんな彼女の様子に気がつき、ちよつとずつ音が止んでいく。

どれくらい経つただろうか。今や会場内では喋る所か、音を出すことすら憚られるような雰囲気包み込む。

そんな中で、ようやく彼女が。“塩見 周子”が口を開いた。

『三年前、本当にバカだったあたしは家を追い出されて東京にやつて来た』

『コレはその時の一張羅。コレと財布、携帯くらいしか持たんまま家出とかいま思い出せばほんまに頭おかしいよね？』

ポツリ、ポツリと語られ、ちよつとだけおどけた言葉に、ちよつとだけ会場に笑いが広がる。

『そんなんで、飢え死に寸前だった私に手を差し伸べてくれた人がいた。全然優しくもないし、口うるさいし、ケチだし、捻くれていたけど、バカみたいなお人好しな人だった』

『その人の周りには変人ばつかったけど不思議と人がよつてきて、いつだって賑やかだった。そんな楽しそうな雰囲気当てられていつの間にか私まであなつてみたいと思つて、うっかりアイドルに

なっちやたくらい』

続く彼女の独白は本当に楽しそうに語られるのに、何故か今度は誰も笑う事は無かった。きつと、その先に待っている残酷な結末を彼女から溢れる雰囲気で察しているのかも知れなかった。

『でも、もうその人はいない』

『本当に馬鹿な私は、お別れも碌に言えないまま、“ありがとう”だつて伝えられないでアイツを見送った』

『当たり前のように明日も隣に立ってる事を疑いもせず…っ！…去つて行ったあの人を黙ってみてたっ!!』

その震える言葉を皮切りに彼女は視線を上げる。

目に宿るは真っ赤に轟々と燃え盛る決意。全てを呑みこまんとする強過ぎる意志の宿った目に会場全てが引きこまれた。

『きつともうアイツは私なんか待ってなんか居やしないかもしれない!!それでも!!もう一度、あの人の前に立ちたい!!——あの人が無視し直すくらい!!”スーパースター”になって!!迎えに行くんだ!!!』

その宣言に合わせて曲が流れる。

ソレは、失った恋人の前に生まれ変わってでも、どこにいても見える自分に成って迎えに行く事を誓う強い——決意の歌だった。

く今日の蛇足く

貴賓席 in 開会前

陽乃「ふふふ、比企谷君が貴賓席チケットを持つてるのも、ココに向かって家を出たのは確認済み。大枚はたいてスポンサーになった甲斐があったってもんよ。さーて、久々の比企谷君でどうやってあそぼーかなー♪」

貴賓席 i n オープニング終了

陽乃「んー、おかしいなー。オープニング終わっちゃったよ。道に迷ってんのかなー？」

貴賓席 i n 中盤終了

陽乃「……………」

貴賓席 i n ライブ終了

ぷるるるる、ぷるるるる、ぴ

都筑『はい、何でございましょうか？比企谷様とお会いできてさぞお喜びですk「オイコラ、ドウナツテンノヨ？オン？（ドすの利いた声」

その後の都筑を見た者はいないそうなの。

ちゃんちゃん

比企谷、P辞めるってよ 最終話 後

「いつまでそうやって呆けているつもりだ」  
「っっ!!?」

そんな無然とした声を専務に掛けられてようやく自分が呆然自失に陥っていた事に気がつく。

戻って来た意識をステージに向ければ既に周子の姿はそこに無く、ライブはいつの間にか佳境に差し掛かっているのか凄まじいまでの盛り上がりを見せている。

アイツらの最後の晴れ舞台をこんなにも長く見過ごしていた事に焦りつつ、ライブに集中しようと試みるがその大歓声も、彼女達の歌声もどこか遠くに聞こえて、別世界の事のように感じてしまう。

どんなに目を逸らそうとしても瞼と耳の奥に焼きついた圧倒的な熱量が、ソレを許してくれない。

—— 全てを呑みこんでしまうような決意を秘めた瞳が。

—— 心の底から絞り出された後悔を振り払う力強い声が。

今なお、自分の心を掴んで離さない。

何度も振り払おうとしても離れぬその熱量に小さくため息をついて天井を力なく仰ぎ、情けなくも八当たりの様に悪態をもらしてみる。

「…看板アイドルが二人揃ってこんなスキヤンダル起こしてんのは経営者としてはどうなんすか？」

「ふん、ようやく口を聞いたと思えばそんな事か。それに関しては私の答えはさつきと変らん。ビジネスさえしつかりこなすならばプライベートは勝手にすればいい。彼女達はソレを叶えるだけの実力を持っているからな。」

それに、魔法が解けたシンデレラは王子様に迎えられて幸せになるのが鉄板だ。…まあ、迎えに来る前に乗り込んでいったじゃや馬なシンデレラも一興。そうだろう、王子様？」

悪態を投げかけられた専務はソレを一笑に伏して、楽しげにそう語る。普段は鉄面皮を通しているくせに変な所でロマンチストなのだ



からどうにも敵わないが、今日だけはそれが恨めしい。

「…比企谷さんが辞めてから、多くの人間がこのプロジェクトに入ってきて本当に多くの問題が起きました」

にまにまと〃やり込めてやった〃と言わんばかりの嫌らしい目線を向けてくる専務に辟易としていると呟くような低い声が俺の耳に届く。その声に釣られて声の主であろう武内さんへ視線を向ければ、彼はステージから目を離さないまま訥々と思いつくように語って行く。

「急激な変化でしたので当然の事でもあったのですが、戸惑いや遠慮、逆に踏み込み過ぎるが故の軋轢。どうしても起きてしまう摩擦を率先して調整してくれたのは、楓さんと…塩見さんでした」

その一言に驚いた、と言えば少々失礼だろうか。楓さんは最初期メンバーの頃から雰囲気を柔らかくしてくれていたのだからわかるのだが、周子のこの前の話では彼女も変化に戸惑っていた側のはずだった。その彼女が他のメンバーの調整にも尽力していたというのは意外だった。

そんな俺の内心を読み取ったのか武内さんは口元を緩ませて、おもしろげに語る。

「まあ、少々強引なやり方ではありましたがね。絶妙な加減で我儘に振る舞って嫌われ役を買ってでるやり口は何処の誰から学んだのかはさておくとしても、それが新しく入ったスタッフとアイドル達の距離感の尺度になったのは確かです」

武内さんにしては珍しい直接的なからかいと、周子の取った手法に顔をしかめてしまったのは仕方のない事だ。

この胸に走る苦味は、いつぞや掛け替えのない友人達を感じた後味の悪さなのだろう。思わず〃氣にくわない〃そう口走ってしまったその気持ちが聞く側になつて実感できるとは少々、皮肉が効き過ぎている。

「…その結果に甘え切ってしまう自分が何とも情けないのですが、そのおかげで私も彼女達も欠けることなくココに居られます。その事に、報いるべきだと、自分は思うのです」

声の雰囲気は昔からは考えられない柔らかさを含みながらも、揺るがぬ芯が通るのを感じさせるものへと変化した。

人の意識を引きつけるその声は多くのシンデレラを輝く星へと押し上げた“魔法使い”と呼ばれた伝説の男のものである事を否応が無く俺に理解させる。

「アナタ達がどんな結論を出そうと、私が有像無像の事情の全てを請け負いましょう。だから、貴方はただ心の赴くままに答えを出してください。それで、あなたの貴重な四年間を使い潰してしまつた償いになるとも、彼女の抱え込んだ悲しみの代償にもなるとなど思つてもいいませんが、それだけは——確約します」

万雷の拍手と地鳴りのような歓声。そんな中で最高のフィナーレを飾り、笑顔でファン達に手を振るアイドル達が舞台裏に下がって行くのを最後まで見送つてようやく彼はこちらに視線を向けてそう言い切つた。

その瞳と言葉は真つすぐに俺を貫き、息を詰まらせる。

「…専務もですけど、武内さんも随分変わりましたね。凄い自信だ」「たつた今、彼女達に恥じぬプロデューサーであろうと心を新たにしたところですし、人生における恥は先日かき切つた所ですからね。そのせいかも知れません」

苦笑しつつ笑う彼は恥ずかしそうに首元を抑える。そんな何気ない仕草をみて、この人も随分と自然に笑う様になつた事に小さく感嘆を吐いた。

人は、そう簡単に変わる事などありはしない。

変つたと感じるのならば、ソレは痛みを重ねた先にある条件反射なのだ頑なに信じて来た。

それでも、最近はそれだけではないのかと思う。

痛みは怖い。誰だつて避けたくなくなつてしまう。でも、その先にある甘やかな感情を求めて何度だつて人はその痛みに手を伸ばす。

痛いとは知りつつも、その痛みを胸に搔き抱いて離したくないと願う。

その異常な情動の動きが俺には今だけはちよつとだけ分かる。分

かりたいと願ってしまおう。

その痛みの受け止め方もまた、人を変えるのだろう。

いまだ冷めやらぬ会場の誰もいないステージ。そこで輝いていた彼女達を、かつての騒がしくも輝ける日々を、そして――  
――あの銀糸の少女を想う。

無性に、彼女達に、もう一度会いたくなかった。

さてはて、勢い促されるまま席を立ち、のこのこと“関係者以外立ち入り禁止”の看板をくぐってやって来た控え室。中からは耳に馴染んだ彼女達の声がライブの成功を喜ぶ歓声を上げているのが聞こえる。

扉に伸ばした手は所在なさげに空を彷徨い、長い戸惑いの末に取っ手へと手を伸ばす。が、開こうとする踏ん切りがどうにもついてくれない。今さら、どんな顔をして彼女達の前に現ればいいのかなんて見当もつかなかった。大体、いまさー——「長い。さっさと入れ」

「ぐえっ!!!」

様々な葛藤と言い訳を重ねようとしている自分の背中に鋭いピンヒールが叩きこまれ、カエルを潰したような変な声を上げながら転がるように控え室へと送りだされた。

「!!!?」  
「!!!」

突然の闖入者に大いに盛り上がっていた歓声が一瞬で静まり、背中を押えて悶える男が誰なのかに気付いた彼女達が小さく息を呑んだのが分かった。

最初に思ったのは“ああ、申し訳ない”という感想だった。昔からこういう場に水を差してしまう事が多かった。学習したことを活かさないからこうした事を繰り返す。ベテランぼちたるモノこういうときには静かに姿を晦ますべきなのだ。次に思ったのは、突然の闖入者に対して咄嗟にアイドルの前に立って守ろうとした新顔のス

タツフへの感動だ。素直に、掛け値なく彼女達を大切にしてくれているのだと、心底ほっとした。

——— 本当に、何様だと自嘲してしまうくらいに心の何処かに残っていたしこりが解けていくことを感じる。

痛みがようやく引いて来た背中を抑えつつ、蹲っていた身体を起こしてゆっくりと控え室を見回し、テレビ越しでは無い彼女達の顔に小さく息を吐く。さっきまでのライブでの笑顔は錯覚だったのかと思ってしまうほどその表情は辛そうにしかめられ、誰もが苦しそうにこちらを見つめてくる。

今日という日に、自分がこんな顔をさせている事の気まずさに思わず顔を鬱向けてしまいそうになるが、やるべきことを。あの日、本来はやっておかねばならなかった事を済まさずに逃げ出すことは許されない。これから、夜空に輝くであろう彼女達の陰りを指してしまう原因だけは取り除いておかねばならない。

そんな決意を胸に顔を上げると、目の前に小さく、華奢な影が差す。「今さら、部外者が何の用ですか？ここは関係者以外立ち入り禁止の筈ですよ」

小さな身体のどこから発せられているのかと思うほど冷たい声と視線。見上げたその先にいたのは人形かと思まごうほど美しい少女“橘 ありす”だった。

「…勝手にいなくなつて……」待つ“”って約束だつて破つて見捨てたくせに!!どんな神経をしたら私たちの前にもう一度顔なんて出せるんですか!!答えてください、比企谷さん!!!」

だが、そんな冷ややかな声は言葉を重ねる度に熱を帯びて果てしない怒りを込めた業火へと成り、その細い腕が俺の胸倉を掴み上げて問い詰める。燃える瞳は真つすぐ俺を貫き、下手な虚偽は許さないと伝えてくる。向けられたこちらが思わず見惚れてしまう程の純粹過ぎる怒り。子供らしさを酷く嫌って、頑なな知性で壁を作ることと安定を保っていた彼女が、今この時ばかりは本能の赴くままに俺に感情をぶつけてくる。

そんな彼女の怒りに俺が答えられる事なんて多くは、無い。

「ごめんな、ありす」

「——ツツ!!」

俺のその短い一言に、ありすは息を呑む。

「…求めているのは、謝罪なんかじゃありません。理由を聞いているんです」

うつ向けた彼女の表情は窺う事は出来ないが、掴んだ胸倉を震わせながら彼女は言葉を紡ぐ。

「いつもみたくにくだらな理論で、口八丁で騙そうとして、ください。そしたら、——そしたら、いつもみたいに私が、完璧な理論で論破して、どれだけ苦しんだかを足が痺れるくらい説教してあげて——アナタをずっと恨んでいられるんです!!」

絞り出すようなその声が、酷く俺の中に響く。きつと、本当はそうしてやるべきなのかもしれない。

恨みは時として人を進める原動力となる事がある。それが、もういない人間である場合はきつとどこまでだってその人を推し進めてくれる。思考を停止して、ただその恨みを糧に進んでいくことはきつととても楽だ。だけど、身勝手なのは百も承知で、俺はありすにそんな“呪い”のような原動力を抱えて歩いて欲しくないのだ。

そんなのは、彼女の夢に混じってはいけな不純物ではない。だから、俺は何度だって赦しを乞おう。

たったそれしかできないのだから、それだけはやり切ってみせよう。

「ごめんな、苦しませて、ごめん」

「——ツツ!!」

馬鹿の一つ覚えの様に繰り返される言葉にありすは更に大きく息をのみ、締め上げる様に握られていた手は最早継るかのように弱々しくなつて震える声を絞り出す。

「…ズルイです。最低です。何で、そんな酷い事するんですか」

悪態をつきながらも、握っていた手を引き寄せてその小さな頭を俺の胸板に当ててくる彼女の頭をそつと抱き寄せる。

「…ようやく立ち直れた支えを奪って、また歩き出せなんて言われて

るのに。そんなに真っ直ぐに謝られたら、許さないと私が悪者に、なってしまうす」

グシグシ、ヒクヒクとしゃっくりや嗚咽を漏らしながらの彼女のそんな一言に俺は苦笑いを返すしかない。まったくもってその通りで、最低最悪なやり口。本当にどうしようもない自分に辟易もするが、この少女のお許しを勝ち取れたのなら自己嫌悪くらい安い買い物だろう。

抱き寄せて泣き続ける彼女の頭を撫でていると、袖を微かな力で引かれ、そちらに目を向けると小梅がいつの間にかすぐそばにしゃがみ込んでいた。

「…あつたかい。やつぱり触れる本物が、私はいいな」

「久々にあつた判別方法が触れるかどうかって言うのも斬新だな、小梅」

「えへへ、久しぶりだね」

そういつて彼女もより精密な判別を行うためなのか抱きついてくる。いや、逆に触れない偽物って何だよ。相変わらずコエーよ。

そんな二人を見ていたせいaka張り詰めていた空気も緩み、他の少女達も緩やかに苦笑を洩らす。これで、全ての贖罪が終わったとも思わないが、まあ、後は個別に頭を下げさせてもらうしかないだろう。ご勘弁願いたい。

小さくため息を吐いて目に涙を溜めた彼女達の頭を撫でていると、こつり、こつりと足音が聞こえてくる。顔を上げなくなつてそれが誰かなんて分かっている。自分の中に止むことなく熱をくべていた何か、更にざわめくのを感ずるのであるから。

「ウチの娘達を泣かせるなんてええ度胸やね、おにーさん？」

「いてっ」

聞きなれたその呼び名。鼻を擽る白檀の香り。

小突くように頭を叩かれた俺は、目の前にしゃがみこんだその少女の存在に苦笑いしか返せない。

「どうやった？宣言通り、サイコーのライブだったでしょ？」

「ああ、本当に最高のライブだった」

「ココまで来るのにめっちゃ頑張ったんやから感謝しーや」

「武内さんから色々聞いたよ、お疲れさん。あんま無茶はすんなよう。」

「これが最後なんて自分だって信じられへんけど、まあだからこそええんかもしれんね」

「ファンとしては、なんともいえねえなあ。続いて欲しくもあるし、これから楽しみでもある」

重ねられる言葉はお互いにどこまでも穏やかで、澄んでいた。決して空虚なんかでは無い万感の思いを込めた言葉たちの筈なのにこれから迎える結末をきつとどこかで俺も彼女も分かっている。

だから、彼女は最後に“あの歌”を選んだのだろう。

だから、自分は目の前の彼女の顔を真っ直ぐ見る事が出来ないのだろう。

ポツリ、ポツリと交わされる言葉も遂には途切れ、小さくお互い息を吸い、終わりの問いが投げられた。

「ねえ、一緒に行こう？」

「——ごめんな、周子」

その短い返答に、私は小さく息を吐く。

分かつては、いた。この男の頑固さと、不器用さは。でも、ここまです筋金入りだと一周回って笑えてきてしまうのだから大概だ。なにより、振られた自分よりも——泣きそうな顔をしている男をどうして責められるだろう。

「理由、聞いても良い？」

「俺は、ただお前らに手を引かれるだけになんて絶対に御免だ」

「…行き先の分からない夜空では握ってくれただけでも救われる、って言ってもっ。」

「そんなのは、欺瞞で、いつかは終わっちゃう。俺は、痛くても苦しくてもいつまでも続く本物でなくちゃ、我慢できない」

「……ほんに、面倒な人やなあ」

青臭い、馬鹿な理想だと人は笑うのだろう。並び立たねば共に歩く

資格を持ってないなど、きつと幻想でしかない。支え合って生きて行けばいいと世間では言われる筈だ。でも、この男は“比企谷 八幡”という男はこういう男なのだ。臆病で、卑屈で、やる気だっけいつも出さない癖に、根っこの部分では誰よりもおとぎ話の様な理想を抱えて、ソレを頑なに守り続ける大馬鹿者だ。

——そして、私が惚れたのもそんな大馬鹿者の頑固者なのだ。だから、付き合っけてやろう。惚れた弱みという奴なのかは分からないが、頑固さも意地っ張りも負けないくらいには自信がある。

「また、何度だっけて迎えに行くよ。アンタが仰天するくらいのスーパースターになったるさかい、首洗っけてまっとき？」

「ああ、俺がちよつとはマシになったら、今度こそ、その手をとるよ」彼のくしやりと泣いてるのか笑っているのか分からないようなその表情に笑いそうになるが、きつと自分だっけて似た様な顔をしているのだろう。その証拠にちよつとだけ頬が湿気っている。だけど、不細工でも今は笑っけていよう。その約束を聞けただけで自分の心は、こんなにも熱く燃え上がり、浮かれ切っけてしまっけているのだから。今だけは、その感情に嘘なんかつきたくなかった。

だから、その心の赴くままに驚いた顔をした彼の頬にそつと手を添え、唇を彼へと寄せていく。

お互いの香りが、息が分かるほど近づき、頬から伝わる熱がこれから触れる部分の熱さを予想させて身体の奥底が震えるが身体は止まっけてくれない。これが自分にとつても、彼にとつても初めてだったらしいな、なんて似合わない事を考えてソレを重ね——「はい、そこまで!!」られなかつた。

くつつく寸前に挟まれた白魚の様に滑らかなその御手。先を辿っけて行けば般若の様な形相を浮かべた凜ちゃん。

「ペろ」

「うひゃあ!!なんで舐めんの!!」

しばしの黙考の末に舐めてみると驚いて彼女は大幅に飛び跳ねて怒鳴っけてくる。しかし、文句を言いたいののはこつちである。舐めた御手と同じくらいにあまりにしよつぱなオチ。これではオーデイエン



スだつて納得すまい。

そんな意見を目に載せて訴えかけてみると彼女は若干顔を赤くしつつも声を上げる。

「こ、子供を挟んでなにやってんのさ!!教育に良くない!!」  
「む」

言われてみればその通りである。コレはこちらの配慮が足りなかったと言わざる得ない。なので早速、ありすちゃんや小梅ちゃんをどかそうと思つてもう一度そっちに向き直れば、小梅ちゃんがおにーさんの口を両袖で塞ぎ、ありすちゃんが手を広げて立ちふさがる。まさに徹底抗戦の構えである。

「んー。一応、聞いとくけど。どいてくれへん?」

「は、破廉恥なのはダメです!!」

「やだー」

笑顔で問いかければ清々しい程の拒否。さてはてどうしたもんかと頭を悩ませて居れば、影はまた増えて。

まゆ「うふふ、ずっと会えなくて寂しかったですよー、あ・な・た、」

涼「あ!いつの間にもすり抜けてやがった!茜、確保だ!!」

茜「お任せください!!ファイアー!!」

八「ちよつ、ま!!」

茜ちゃんのタツクルで軒並みなぎ倒された所に更に続々と人は寄つて行き。

楓「あらあら、情熱的なハグではぐらかすなんて、ふふ、悪くありません」

川島「…楓ちゃん?」

夏樹「相変わらずロックな人生送ってんなら」

美嘉「いや、目が無いのは分かつてんだけどさー。目の前でそんな露骨にされるとさー。私の乙女心がさー」

莉嘉「あ、おねーちゃんが拗ねてる!!あはははははイデ!!」

際限なくその輪は大きくなっていき。彼を囲んでいく。

新人A「こ、この人があの分刻みスケジュールと極限予算案を残してた諸悪の根源か…」

ベテランA「ていうか、トップアイドル二人がスキャンダルってどうすんのよ…。今日絶対に事務所に帰りたくないわ…」

古い知り合いも、初対面も、関係無くその輪は大きくなって。彼の周りはいっただって騒がしく、賑やかだ。

「こんな結末では不服かね？」

賑やかな喧騒に思わず苦笑いをしていると後ろから問いかけられる。目線だけで振り向けば、腕を組んだ専務と武内Pが同じような表情で立っていた。

「いや、ちよつと残念やけど、きつとこれで良いんやと思います」

「ふん、随分余裕だな。取られた後に泣いたって私は知らんぞ？」

口調の割に楽しげな彼女の顔に笑ってしまう。前々から思っていたがこの人も随分と茶目っ気が溢れているし、なかなか憎めない。そんな彼女に軽く微笑んで小さく息を吐く。

「ええんです。きつとこの胸の火はもつとずっと持っていないといけへんもんやと思うし。——あんな風に皆が笑えてるんなら、ちよつとくらい我慢しますわ」

もう戻る事は無いと思っていたこの風景はきつとかけがえのない宝で、灯だ。個人的な事の本番は、彼を迎えに行けるくらいになってからのお楽しみにとっておこう。そう呟く私に彼女は小さく微笑んで視線を切り、がやがやワイワイと騒がしい輪に向かって声を張り上げた。

「さあ、いつまで駄弁っているつもりだ馬鹿共！会場代の延長代金もタダでは無い。つもる話も、喜び合うのも、泣くのも全部打ち上げ会場に回ってからにしろ!!今日は年少組以外に誰ひとり帰れると思うなよ!!」

その激に控え室は大きく湧き、年少組からは大きく不満の声が上がり、でも、誰も俯いているモノは誰もいなかった。

これからきつと色んな事が起こる。それでも、今日という日が自分達を支えてくれる。

——そう自然に思える聖夜に、そうであるようにと心の中で

祈りを捧げた。

くエピローグく

八「俺と雪ノ下に密着取材、ですか？」

D(「ディレクター」)「はい。3年前ににご協力頂いた」20代トウエ  
ンテイ「全力疾走」の御二人の回が大変好評でした。今回は特  
別版としてあの頃から成長して主任になった御二人に密着させて頂  
き、その成長を視聴者に届けたいと思っています」

笑顔でなされた端的なその説明に、俺と雪ノ下は思わず渋面を浮か  
べてしまう。好評とはいわれても、こつちには苦い思い出しかないの  
が実情だ。会社で一番厳しいとされる所長(現上司)に着き朝から晩  
まで揃って怒鳴られ続け、過密スケジュールで疲労困憊の修羅場状態  
でやらかしてしまったミスを職人や関係各所に頭を下げ回つたのを  
全国放送で流されたのだ。こんな顔だつて浮かべてしまう。他人の  
不幸は蜜の味なのはいつの時代だつて変わらない。チクショウ。

八「いや、好評だったつてもうあそこまで怒鳴られる事もないから面  
白い絵図らなんか取れませんよ?」

雪「そうね、それに見られて困る仕事もしていませんが守秘義務  
も多く取り扱っていますので放送出来ない所が多くありますよ?」

雪ノ下と目線を一瞬交錯させ、速攻で断る理由をたたみかける。数  
多の修羅場をくぐりぬけて来たこのコンビネーションはちよつとし  
たもんだと自負している。だが、そんな俺らの反論など見通していた  
様にディレクターはにんまりと笑顔を浮かべる。

D「いやー、そうだと思いますね?今二人がやってる建築の持ち  
主のタレントに許可を取りに言ったら宣伝に使って良いなら、つて  
オツケー貰えたんですよ!!しかも、前のドキュメンタリーで話題を呼  
んだ」雪ノ下 陽乃「の設計でそつちにも確認とつたら全面協力ま  
で貰っちゃいます!!もう、」(ここまできたらやるしかない)てくら

いの状況です!!…あ、ちなみにお二人に拒否されても会社から辞令が届くと思うっス」

雪・八「…断らせる気ないな（じゃない）」

深々と溜息を吐いた俺達に満面の笑みを浮かべるディレクターが思ひだした様に言葉を紡ぐ。

D「あ、それとですね。前回からウチの司会者が変わりましたね？前とは違う人がリポートするんで、本人の希望もあって今回、ご挨拶させて貰って良いですかね？」

へえ、前来た子は緊迫した現場でもきやつきや騒いで職人達の気を逆なでしていたからそれはあり難い。まあ、それが前より酷くならない保証はまだないわけだが、先に顔合わせして覚悟ができるだけ大分マシだ。手の回しようといいいこのDなかなか出来る。

雪「あら、それは朗報ね。今度はどんな方が来られるのかしら？」  
雪ノ下の隠す気もない言動は言外に“下手な人材連れてくんよ”  
“アピールなのだろうがDはソレを分かっているのかいないのか自信ありげにほくそ笑む。

D「ふふふ、あの時は予算ももぎ取れずあんなのでした但し今回は一味違いますよ？実を言えば今回の企画もその司会者の発案でしてな。やっぱりトップに立つ人間は金を取るだけあります」

八「へえ、そこまで自信あるってのは相当ですね。芸能に疎い自分達でも知っている方だと嬉しいのですが…」

D「その心配はありませんよ。日本でその人を知らない人などいないでしょうから。…まあ、実際合つて頂いた方が早いでしょうな。入って貰いましょう。どうぞ、入室してください」

??「はい、失礼します」

ディレクターがあげた声にゆっくり扉が開かれ、その姿に、その声に、俺は言葉を失ってしまった。

きらめく銀糸は最後にあつた時よりずっと伸び腰のあたりまで伸ばされ、狐の様につり上がった眦はあの頃よりもやさし気な柔らかさを称えてはいるが、意地悪げに釣りあげられた口元だけは変わらな

い。

そして、俺は力なく笑って天井を仰いでしまう。  
なるほど、彼女を知らない日本人なんて、いや、海外にいたって知らない人なんてホントに未境の地に住んでいる人くらいなもんだらう。

それほどまでに彼女は、強く輝く星なのだから。

八「あのクリスマス以来か、周子？」

周子「せやな。ふふ、——約束、果たしてや？」

ずっと聞いてなかったその声は妙に耳に馴染み、離れていた刻を忘れて小さく俺を笑わせる。彼女も同じなのかくすり、くすりと笑う。

どれだけ離れていたって結局、あのラーメン屋と変わらぬやり取りをしている俺たちは変わらなかった。

ならば、そろそろ星に手を伸ばしたって罰は当たらないだろうか？  
そんなバカな事を考えて俺は、彼女を、この狂おしいほどの痛みを抱きしめた。

周子    T r u e    E n d    おわりん♪

## 後日譚

ふわり、ふわりと花びらが舞うように散って行き、ソレを眺める自分の心も同じようにフワフワと現実感がない。さつきから目を通している台本だって文字を撫でるだけでちっとも頭に入ってきやしないのだからこのままではトップアイドル”塩見 周子”の涸権にだって関わるような浮つきっぷりだ。これではいかんと何度も気を引き締めようと頬を軽く張ってみたりはするものの、浮つく心と耳に纏わりついたこそばゆい言葉がすぐさまソレを解いてしまうのだから如何ともしがたい。

「ほんま、”デート”一つでココまで浮つく歳でもないやろ…」

深い溜息と共に、台本を脇に放りだして小さく悪態を吐いてみる。ただそれすらも若干口角が上がってしまったているのが分かるのでいよいよ苦笑するしなくなってしまう。だが、まあ、数年ぶりに再会を果たした想い人。ようやく叶った長年の恋心。そんな相手から誘われたソレに心躍らせぬ女などいるものだろうか？

誰が聞いている訳でもないだろうが、ちよつとだけ情状酌量の余地を呟くのは微かな抵抗だ。

考えてみれば長い付き合いで二人だけで出かけた事は結構な回数があるのだ。それこそ、買い出しや休暇の暇つぶしに遊びに行った事だってある。世間一般の基準で言えばソレだつてデートにカウントしても良さそうな物であるのだが、どう振り返っても親戚の従妹の面倒を見ていたような扱いだった。だが、今回ばかりはちよつと毛色が違う。

あの自分が知る限り最も偏屈な男が、あの”比企谷 八幡”が自分を照れながらも誘ってくれたのだ。

手のかかる妹分としてでなく、”惚れた女”として何処かに行こう、と。

——にやけるなどというのは、ちよつと無理な相談だ。

男つ気のない人生に悔いは無かったが、もうちょっと勉強くらいはしておくべきだったと今さらな後悔が沸いてくる。“男女のデート”というからには遊んで終わりでは、きつと無く。聞きかじった程度の知識しかないが、その先だって当然あるのだろう。

数年前に重ねる事の叶わなかったあの熱が生々しく脳裏によみがえり、頬が焼ける様に熱くなった。

「今度は、——」

その熱に浮かされる様にそつと唇に指を添え、小さく呟いた言葉。緩く吹いた風にかき消されなんと呟いたかは自分でも定かではない。だが、きつと——。

凜・まゆ（ハイライトなし）「随分と、ご機嫌ですなー？」

周子「うっひゃあ!!」

後ろから掛けられた幽鬼の様な声（二重奏）に全ての熱を奪われ、思わず飛びのいてしまった。慌てて振り向けば目の光を失ったヤバ気な雰囲気醸し出す二人組に息を呑む。

周子「ど、どど、どないしたん、二人とも？もう、二人の撮影は終わったん？」

まゆ「うふふ、無事に終わりましたよー。所できつき、面白い話を小耳に挟みましてー」

周子「おもしろい、噂？（ゴクリ）」

凜「なんでも、どっかのトップアイドルが、どっかの出演者にいきなり熱烈に抱き合っつてー、お付き合いでする事になったらいいんだー。しかも……」

まゆ「その事を、仲間に伏せたままにしていたなんて……。周子さん、信じられます？」

二人は満面の笑みで問いかけてくるが、目は笑っていないし、問いかける声は確信に満ちている。そのうえ、背に隠し持っているナカ、……。まあ、端的に言えば、殺る気マンマンなヤベー女がそこに二人もいた。

あつれー、おかしいなー。結構嚴重にばれない様に頑張ったんだけ

ど、よりもよつて一番ヤバイ所に真つ先にばれてんじやーん。などと、現実逃避していると、二人がじつくりと距離を詰めてくる。

まゆ「信じられませんよね。苦楽を共にした仲間にそんな仕打ちをするなんて。私は、周子ちゃんを信じてますよ?」

凜「そうそう。私たちは信じてるからね。でも、信頼つて確かめる事でもより強度を強める事が出来るからさ。チョーつとだけ、確かめさせて欲しいんだ? 具体的に言えば、明日のデートとやらが終わる頃までウチでゆつくりしていて欲しいだけなんだよ? 後はアイツとの待ち合わせ場所を教えてくれたらいいんだ。そうしたら……ね?」

周子「いや、もう完璧に信頼してないし、ぶち壊す気満々じゃん…。ていうか、どっからその情報を手に入れたん?」

凜・まゆ「ちひろさんにリアルマネー（スリーピース!!）」

周子「あんのクソアマツ!! て、言うか馬鹿じゃないの!! 二人とも馬鹿じゃないの!!」

凜「何とでも呼べばいい!! 需要と供給が成り立った先にある〃神の見えざる手〃!! それが、いまこうして役に立ったそれだけでいい!!」  
まゆ「つまり、ソレに従った私たちは〃天使〃とすら言えます!! ちなみに、待ち合わせ場所・時間にはファイブフィンガーまで出す用意があります!!」

周子「さつきから生々しい数字ださんといってくれる!? あと、やつぱり馬鹿やろ、アンタら!!」

力の限りに罵倒を飛ばした後に、深くため息を吐いてしまう。一体、どこでこの二人の心はこんなに歪んでしまったのか。恋の罪深さに煩悶していると二人が嘘のように静まりかえっている事に気がつき、視線を向けてみる。

まゆ「ふう、仕方ないですね。〃天使〃の方で手を打って頂けないなら〃悪魔〃の方を实践させて頂きましょう」

凜「大丈夫、あんま痛くない様にする———」  
「確保———!!」

二人が後ろ手に隠していた何かを出そうとした瞬間に複数の影が彼女達に殺到して一瞬で取り押さえる。あまりに一瞬の事にこちらは馬鹿みたいに口を空ける事しか出来ない。



茜「隊長！確保完了です！ボンバー!!」

涼「ハンカチ、結束バンド、ガムテープ：目薬。ちっ、ついにココまでガチな装備と技術を身につけてきやがったか!!」

早苗「みんな、良い動きよ。訓練がよく生きてるわ。…この二人が安静になるまで保護します。いくわよ!!」

凜・まゆ「「んんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんん!!!」

あつという間に現れ、颯爽と去って行く彼女達に引きずられるまゆちゃん達。あまりに華麗な手際に賞賛と安堵しか出てこないが、彼女達は一体どこを目指しているのだろうか？多分、アイドルが持っている必要はない技能の行く末を不安に思いつつも首を傾げる。

周子「…あの道具で何するつもりやったんやろ、あの二人？」

どうにも分からないそのラインナップに首をかしげつつ、小さく溜息が零れる。

あまりに熱に浮かされて忘れかけていたが、そういえば自分と彼が出かけるとなってトラブルが無かった事など一度だつて無かつたではないか。時には迷子を拾い、時には警察に追われ、時には見知らぬ他人の為に駆け回った。その一つ一つを思い出してつい笑つてしまう。

確かに緊張も、胸の高鳴りも、初めてに対する不安も期待もあるが、それらを小さく吐きだして今度は大きく息を吸つて空を見上げてみる。きつと、自分が想像したあまやかな展開なんて無いのかも知れない。また、騒々しく奔走して終わるのかも知れない。だが、ソレでもいいと思えた。

彼と一緒になら、色気のないそんな日々でもきつと笑つていられるから。

いまは、明日もこんな良い天気である事を祈るくらいがちょうどいい。

朗らかな春の陽気に小さな子供達のはしゃぐ声。公園に植えられたコブシの花がそよ風にその大きな花弁をふるりと揺らす。あまり

に穏やかな空気に小さく笑いを洩らしてしまう。在り難い事に仕事は途切れることなくやつてきて、ソレを忙しなくこなして行く日々が続いている。こうして昼下がりからのんびりとベンチに腰掛ける様な日常は随分と久しぶりに味わう。そのせいか、夜通し服装を考えていた寝不足な頭がうつらうつらと眠気を誘う。

時計を見てみれば約束の時間まではまだ結構ある。我慢できずに早く家を出てしまうなんて我ながら子供っぽくて笑ってしまうが今は都合がいい。彼が迎えに来るまでちよつと時間がある。ほんのちよつとくらい、10分だけ目をつぶろう。そう、ちよつとだけ、目を、瞑るだ——け。

そんな思考からどれだけ立っただろうか、気がつけば日差しとは違う温もりに身を寄せていた事に気がつく。身体もいつの間にか横になつていたが寝ぼけた頭はその温もりと柔らかさを離したくないとぐずつて身を寄せる様に要求してくる。抗う必要性などまったく感じず、求められるままにその温もりを更に求めようとしたところで、ハタと気がつく。

自分は、待ち合わせをしていたのではなかったのでは無かったか？おそろおそろと目を開ければ、自分の頭はちよつとだけ硬くも柔らかい膝に乗せられ、身体には男性用と思われるコートがかけられている。頭に添えられた優しいげな手からはほんのちよつとだけ薫る落ちて着いた香水の薫り。その手の奥から覗くその顔は、遠くの子供にやさしげな目線を送る。比企谷 八幡”その人だった。

本来なら、飛びあがって謝るべきだったろう。今からだって、そうするべきだったと頭では分かっている。でも、その優しいげな表情にどうしようもないくらい目を奪われた。その、見た事もない表情に、心奪われていた。

「もうちよつと寝ててもいいぞ、疲れてんだろ？」  
「っ！っ！、ごめん!!ウチ!!」

どれくらい見つめていたのか、彼が目線だけをこちらに向けて静かにそういった事でようやく意識が戻り、慌てて起き上がろうとするがそつと肩を抑えられる。決して、強い力でもないのに何故か反発する

気も起こせず、また彼の膝の上に頭を下ろしてしまう。だが、申し訳なさだけはどうしたって拭えない。

「ごめん、結構時間が押しちゃったやろ。気にせんで、起こしてくれたらよかったのに…」

「別にそんな忙しくないスケジュールなんか組んでねえよ。こんな陽気じゃ眠くなるのも分かつちまうしな」

謝ろうと思いつつもイケずな事をされた恨み事を零す自分に彼は朗らかに苦笑しつつ頭を撫でてくるので、こっちとしては唇を尖らせるしかない。なんだか、こんな大人の対応をされると自分だけが子供の様でどうにも癪に障る。居心地の良い暖かさにどっぷりとはまり込みそうになるのを何とか踏み留まって、何とか彼の手を緩く払って身体を起こす。

「ホントにそんな急がなくても問題ないから大丈夫だぞ？ なんなら、近場に変更してもいいしな」

「んー、気遣いはめっちゃくちや嬉しいんだけど今日を逃すといつになるか分かんなくなりそうだし、せつかくおにーさんが考えて来たデート、しっかり味あわせてや？」

「あんまり期待してて肩すかし喰らっても責任はとれねえぞ？」

起き上がって改めて彼を見れば、落ち着いた色合いのテーラードジャケットにすつきりしたブラックパンツ。昔より短く刈りあげた髪の毛に、印象的な淀んだ目が眼鏡によって中和されている。まあ、端的に言って、イケメンがいた。

「…なんで、俺は今ほっぺをつねられてんすかね？」

「対応と格好が女慣れしてそうでキショイから」

「いや、ちゃんとした格好して来いって言ったの君なんですけど…」

心に吐き上がった謎の感情を素直に表現（暴力）していると彼は溜息を吐きつつも抓っていた手を取って、歩き出す。なんとなくソレも女慣れしている匂いを感じてなんとなくムカつく。そうやって手を引っ張られて公園の前に止まっているカッコいい車の前で入るように促され、思わず彼と車を二度見してしまう。

「え、これ、おにーさんの車なん？ え、こんなキャラと違うやろ!! 私の

知ってるおにーさんは軽バンとかでデートに行くはずや!!」

「何かしら言われるかと思ってたけど、どんなイメージ抱いてんだ!!  
：昔、言ってた先生が“廃棄するのは忍びないから”てんで譲ってくれたんだよ。ほとんど乗る暇もないから車庫の肥やしになってたけどな」

「ほへー、なんや、おにーさんの乗る車ってハイエースとか仕事用のイメージしかなかったからびっくりや」

「あー、俺も乗り慣れてるから買うならそっちかなーとかおもってたんだけどなあ…」

「どうして買わなかったん？」

「今の仕事は車で出社は原則禁止。ついでに言えば、ボツチが個人で持っても意味ねーわハイエース」

「もう、後半の理由が全てやん…」

切なげなよもや話をしている内に乗り込み終わった車が見た目に似合わない優しげなエンジンを震わせ、ゆるりと景色を後ろへと運んでいく。流れていく景色に、横でハンドルを握る彼について昔を思い出してしまう。管理人をやっているときは買い出しで、アイドルだった時は現場までの道のりを、こうして彼の隣で多くの時間を過ごした。いまじゃもう覚えていないようなどうでもいい内容ばつかったが楽しかった事だけは覚えている。

「なあ、この前の取材なかなかええ感じに編集してくれてるみたいやで?」

「もう、次に依頼が来ても絶対断るからな。サンプル見たけど事あるごとに昔の映像との比較出しやがって、ぜつ許」

「なはは、二人の超長文クレーム見たで!!もうみんなで大爆笑!!」

「いや、クレームの意味まったくねえじゃねえか…」

また、どうでもいいような話を二人で次々と交わして行く。笑って、怒って、呆れて、愚痴って、尽きることなく会話は続いていく。けど、その内容は二人揃ってお互いの仕事の比重が大きくて、昔とは違った感触がちよつと新しい。

結局、彼はプロデューサーとして業界に戻る事は無かった。

彼の仕事を取材して、彼の周りの人を見て、何よりも頭を抱えながらも全力で仕事を取り組む彼を見て、そんな我儘な感情はすっかり萎んでしまった。きつと、彼が自分たちと並び立ちたいと言った誇れるモノは彼の今の職場で得た物で、自分たちの元に戻っては意味のないものなのだろう。本心を言えばちよつとだけ残念な気持ちが無いわけではないが、この時間をこれからは一人占めできると喜んでしまう自分の現金さに苦笑してしまう。

“ ころ、あの二人に恨まれるんも止むなしやな ”

心の中で二人に謝りつつも意識を車窓に向ければ、どれだけの時間が立ったのか柔らかく注いでいた陽はゆつくりと傾き夕暮れが密やかに近づいていた。いつの間にか首都高もあり、都内には無い広い空が広がる道路には星々もきらめき始めている。

「ん、すつかり遅くなってもうた。ごめんな、おにーさん？」

「いや、いまの時期だったら夜でも楽しめるから気にすんな。それよ、そろそろ着くからちよつと目を瞑っててくれ」

「んー、まあええけど、何で？」

「サプライズって奴だよ」

「なんやそれ似合わへんなあ」

意地悪げに笑う彼に苦笑しつつも言われた通りに目を瞑って、座席に身を預ける。ちよつとだけ開けた窓から流れ込んでくる虫の音と、草露の匂いが一層近くなったように感じて深く息を吸い込む。たつたそれだけで肩の力が抜けていく気がするのだから不思議なものだ。そうして、しばらく揺られていると車が緩やかに止まるのを感じる。

「もう、目開けてもいいいん？」

「もうちよつと待っててくれ」

そういった彼が車を降りて、自分の方のドアを開けてゆつくりと手を引く。真つ暗な空間にでも気遣う様に引かれるその手と声が不安を打ち消して、引かれるままにゆつくり歩く。そうしていると、目を

瞑っていても分かるほど明るい何かが見れた事に気がついた。

「開いても、大丈夫？」

「ああ、いいぞ」

その声に導かれ、目に映ったのは――

夜空に咲き誇った満開の桜と、月光の優しい光に照らされた一面の菜の花だった。

どこまでも続いていくかのような桜の並木を仄かに照らして連なる提灯。その脇には地平の果てまで染め抜くような艶やかな黄色が今は月光によって柔らかな光をともしている。そんな幻想的とすら言えるこの光景を目の前にして、俺はたった一人の女から目が離す事が出来なかった。

月も、花も、風も、音も、全てが彼女を引きたてるための脇役だ。腰まで伸びた輝く銀糸は風に踊り、白いブラウスは月光を受けて輝き、散って行く桜と提灯の頼りない光は彼女の儂げな雰囲気を実際立たせた。

今にも消えて行ってしまいそうな彼女にこちらも息をつめていると、彼女は小さく息を吐きこちらに問いかけてくる。

「何でココに連れて来てくれたのかって、聞いても良い？」

「吉野の桜には叶わないだろうけど、俺が知っている限りで一番きれいな桜はココだったからな」

「そっか…」

そういつて彼女は再び桜へ視線を向ける。

――ずっと、昔の話だ。

彼女が誰もいない寮の談話室で流されていた京都の桜を、ずっと眺

めていた事があった。

その時に彼女が何かを言った訳でもないし、何かを求めた訳でもない。でも、きつとその時の彼女の心境は身勝手にもなんとなく分かる様な気がしたのだ。すぐ近くに実家がある俺ですら、千葉のあの家がどうしようもなく恋しくなってしまう時がある。ならば、18という若さで故郷を離れて、今まで碌に帰る事の出来なかった彼女の郷愁は如何ばかりだったろうか。

彼女は、決してそんなそぶりは見せない。だから、ここから先は俺の自己満足だ。押しつけがましい、理想だ。

だから、笑ってくれても、怒ってくれてもいい。泣いたって誰も責めやしない。全部、俺のせいなのだから、

その押し付けられた痛みを、どうか、一人で抱えないで、分けて欲しい。

——それを受け止められるだけの強さが欲しくてお前の元を離れたのだから。

「桜が咲いてるうちに、お前の両親に挨拶に行っていいいか？」

「——ッ!!……うちの親父、めっちゃおつかないよ？」

「ああ、まあ愛娘を貰いに行くわけだからな。気持ちには分かる」

「…オカンだって五月蠅いし」

「気に入られるように努力するよ」

「一人っ子だから婿に入れとか言われるかも」

「まあ、その辺は要相談だな。別に俺はどっちでもいいけど」

「私、言っておくけど、相当にめんどくさい女やで？」

「知ってるよ。世界中の誰より厄介な女だよ、お前は」

「ははっ、酷い、いわれよう、やん」

「周子、結婚してくれ」

「——!!」

一世一代の告白。

返答は大粒の涙と、かみ殺すように上げられたしやくり。

だが、まあ、自分に似てどこまでも捻くれたこの女が泣きつくのに二回も選んでくれた事を素直に喜ぼう。

さて、コイツを連れて吉野の桜を見に行く計画と、おっかない親父さんの対策。俺はどっちを先に考えるべきだろうか？

幼子の様に泣き続ける彼女の頭を撫でながら、俺は呑気にそんな事を考えた。

東京を発ってから三時間と少し。流れる景色はあつという間に見慣れたものに変わって行ってそのあつけなさに少々、鼻白んでしまふ。あれだけ遠く思っていた故郷は実際に足を向けてみればこんなにも簡単にこれてしまうような距離だったのだ。まあ、それだって今回の様な事が無ければ踏み出す踏ん切りはつかなかつたのだろうかから大きな一步には違いない。

そんな事をぼんやりと考えて、その勇気をくれた隣の誰かさんに視線をやって小さくため息を着く。

「ふふ、今からそんなんで大丈夫なん？これからが本番やで」

「…いま考えて来た挨拶全部飛びそうだから、声かけないでくれ」



外の朗らかな陽気など目もくれずに蹲って頭を抱えているおにーさん。あの初めてのデートの時の凛々しきは一体どこに行つたのかと思う滅入りっぷりに思わず苦笑してしまう。

「大体、この前うちに挨拶行く前のお前だって似た様なもんだつたらうが」

「あはは、そーいやそやつたねえ。何万人が揃うおつきなライブでもあそこまで緊張はしなかつたかも？」

男親に挨拶にいく自分だってあの様だつたならば、況や、女親に挨拶に行く彼の緊張はいかばかりか。そう考えてまた笑つてしまう。

あの後からは本当にあつという間に物事が決まつて行き、あれよあれよという間に彼の両親へご挨拶と相成つた。噛み噛みでぎこちない動きをしていたのは最初のうちだけで、お祭り騒ぎの小町ちゃんとお義父さんのはしやぎっぷりがお義母さんに一喝される頃にはいつものように笑つて、ちよつとだけ泣いた。なんとか受け入れて貰えたのだと言う安堵と、思つていたよりも気さくだった彼のご家族と、隣の恥ずかしそうに頭を抱える彼の家族に成る事を許してもらえた嬉しき。色んな感情がないまぜになつて自然とそんな形へと落ち着いたのだ。

「あれだけ盛大にお祝いしてもらつたら緊張してるのが馬鹿らしくなつちやつた。だから、きつとこつちだつて大丈夫やつて」

「あの馬鹿騒ぎっぷりは比企谷家末代の恥だよ」

「きつと、ウチの家だつて似た様なもんだよ。家出していた看板娘が男を引きつれて帰つてくるんだから、お店の人たちも一緒になつて蜂の巣をつついたような騒ぎになつていと思うし、人数が多いぶんおにーさん家よりも大変な事になつとるかも？」

「勘弁してくれ…」

茶化すように言つた一言に、深いため息をついて更にげんなりとした顔をする彼の手を苦笑しつつもゆっくり引つ張る。きつと、頑固な親父に、年甲斐もなく騒ぐ母親。噂好きな騒がしいお店の人たちが今か今かと待ち構える今回の挨拶もハチャメチャになる。彼と、自分が揃つてそうならなかつた事なんて一回もないのだ。でも、そうやつて

いつもの騒がしい日常を彼とずっと繰り返して行く。その一歩だと考えれば足は知らずに弾んでいく。

こんな日々を重ねて、彼と一緒に歩んでいこう。

ソレはきつと、優しい陽光が差し込む今日みたいに暖かい道のりだろうから。

「きつと大丈夫やって。なにせ、ウチが惚れた旦那様やもん。みんな気にいってくれるよ」

「ああ、——そうなるといいな」

弾む心にしたがって彼に微笑めば、彼は小さく笑って答えてくれる。

これ以上に求めるモノなんて、私にはちよつと見当たらない。

f i n

## 雪ノ下建設 宮前平 源治の独白

俺の名前は「宮前平 源治」。そこそこ名の通った建設会社『雪ノ下建設』で所長を任されているもんだ。かれこれ新卒の頃から30年近く叩き上げとして現場を回して来たし俺のやってきた現場は振り返ってみてもちよつとしたもんだ。

俺らや職人が血と汗を滲ませて作った建築物がこの街の景色を作っていると思えばどんな苦労だって背負っていける。———そういつた心意気が必要だとは思っているのだが、最近はや時代が変わっちゃまったらしい。

部下が出来るようになって久しいが大概の奴らは半年持たずに消えちまうか、噛みついてきた時に「優しく」指導してやるとすぐにベそ掻いて引きこもっちゃう有様だ。曰く、「時代じゃない」って事らしいが出来てねえ事をほっときやソレが大損害になることもあるし、下手すりや職人の命にだって関わってくる。ソレを出来るように育ててやっているつもりだが、気がつきや俺の現場に回されるのは潰れてもいい人材か短期の現場ですぐに逃げられるような段取りがされた状態ばかりで、小僧どもの間には俺の現場は「宮前平監獄所」なんて呼ばれてるらしいってんだからお笑い草だ。

だがまあ、ないもんねだりしてる暇はないし、俺は俺の仕事をするだけだと開き直っていた春の事だ。新入社員の歓迎会なんて名目で開かれる観桜会で明らかに周りに人が寄り付かない俺の元に意外な人物がやってきた。

スラリとした体つきに、温和そうな顔つき。ソレでも関東指折りの建築会社を運営し、県議まで務めているという我が社の社長様が苦笑を零しながら俺の隣へと腰を下ろした。周りの上役からは「余計な事を言うな」なんて視線を感じるが、知った事ではない。結果は現場で出しているし、お宅らの政治ごっこに付き合う程に酔狂でもないの  
で単刀直入に用件を問うた。

「……社長直々に解雇通達にでも来ましたか？」

「——くくつ！ ああ、いや、すまない。噂通りの人物だと思ったら  
おかしくてついね。君の実績から鑑みてソレをするときは私の首を  
切るより難しいだろうから安心してくれ。……だがまあ、この調子だ  
とこつちの要件に適した人物だと分かったのは僥倖だった」

「……………意味がよく分かりかねますな」

「君に指導して欲しい新人が二人いてね」

訝しむ俺に、そんな事を飄々と嘯いてその男はわちゃわちゃしてい  
る新人共の塊に指を指す。どいつもこいつも浮ついて、今どきの甘っ  
たれた面をしてやがるガキ共だ。大量の新人の中で半分は3か月く  
らいで逃げ出す。3年持てば立派。5年から先は一握りのこりや豊  
作と言われる業界でわざわざ「監獄長」と呼ばれてる俺に任せたい  
とはよっぽどその新人は社長の不興を買ったらしいと思つて微かに  
同情を込めてそいつらを探す。

「ああ、そつちじゃなくて——あつちの離れた席に座つてる二人だ  
ね」

「あれつて……………いいんですか?」

「勿論だ。当然の事だが他の新人とは違つて少なくとも5年は君の専  
属でローテーションは無し。教育方法についても誰にも口出しをさ  
せない事を誓うよ」

涼しい顔をしてそんな事を嘯くこの男に内心舌を巻きながら、改め  
てその指先を確認する。

その先にいるのは、入社前に話題となつていた社長令嬢だという紗  
の様な黒髪を流した「雪ノ下 雪乃」と、飛び入りで社長がねじ込ん  
だというコネ入社で悪目立ちしていたアホ毛の目立つ根暗そうな：  
「比企谷」とかいってたか? そんな二人が気心知れたように隅っこ  
で杯を交わしている。

それで、この話の内容も十全に理解できた。

社長令嬢と問題児。どっちもどの現場に行つてもお邪魔虫だろう  
し、娘に関して言えばもっと面倒だ。普通の新人のように尻を蹴飛ば  
すことも、怒鳴ることも、下手に仕事を振る訳にもいかない。——  
だから、俺なのだ。

社長令嬢だろうが、上役のコネだろうが仕事の前には平等。出来ないきやできる様になるまでやらせる。そんな当然の事が随分としづらい世の中で悪名轟く俺以上の適任はいなかっただろうさ。それに、二人にとつても悪い話ではない。後々、ほんとにこの会社を背負って立つならば「肩書のお陰」だなんてレッテルだけでなく誰にも文句の言えない実績と、地獄を味わったという周囲の評価が無ければならないのだから。

この優男の顔に似合わぬ過激さに今度はこちらが悪い笑いが零れるのを感じて、念のために最終確認を行う。

「一応の確認ですが、娘さんが引きこもりになっても責任は負いかねますが?」

「構わんよ。ソレを選んだのはあの子だし、その時は適当な男を見繕って気兼ねなく家に囲い込んでやれば私と妻の気苦労も減るだろうからね」

「…………お偉いさんの考えは分かりかねますが、まあ、お引き受けしましょう」

「頼むよ」

桜舞い散る花見の席で、若者二人の所属先がひっそりと決まった瞬間はひらりと人知れず風に乗って溶けていった。

「比企谷っ!! この現場写真の工程が2個も抜けてんぞ!! 今すぐ作り直せ!! 雪ノ下!! テメエまた設計図と工程の更新の確認怠りやがったな! この下地は新素材から既存の物に変更してんだから工程も全部書き直して連絡しとけて昨日の夜中に言ったらろっ!!」

「すみませんっ!! 今すぐやり直します!!」

あの花見会から早くも一年ほどの季節が流れ、また桜の芽が膨らんできた時分。最初の頃は毎週間持つかなんて側近の事務員や馴染の職人たちと軽口を交わしていたものだが、意外や意外にもこの二人は

いまだに食い下がっていて今日も現場に鳴り響く怒声にキレ気味の反骨心旺盛な返答が返ってきた。

キーボードを叩きつける様にタイピングし、設計図面の山を蹴り倒さんばかりの勢いでひっかまして、鳴りやまない電話を肩に挟んで——顔を蒼くして書類とタブレットを抱えて事務所を飛び出していく日常も既に見慣れたものになりつつある。

「すぐに辞めちゃうと思ったけど、あそこまで続くとはやるじゃないかね」

「ふん、仕事も未熟な癖に生意気な所だけはいつちよ前だ」

「ようやく一年目って人間に現場管理のほとんどをやらせて熟してるんだ。未熟どころがとんでもない金の卵だよ」

側近ともいえる事務員の軽口に鼻を鳴らして答えると彼は苦笑を浮かべつつ返してきた言葉を聞こえないふりをして書類にペンを走らせる。実質、あの二人は少し異常なくらいの出来栄であったのは俺だって認めているのだから言われるまでもない。

雪ノ下は実家や専攻していたという事もあるのだろうが、処理能力が尋常でなくくらいに高く、分厚い辞書一冊分はある基本設計図面を網羅して正確に全てをこなしていく。その上、見た目で舐められそうな問題も生来の気の強さとたまに見せる甘さで見事に職人たちからの信頼を勝ち得て対等にやり取りを行っている。

比企谷は雪ノ下ほどの処理能力はないが、それでも新人としては破格だ。その上に融通の利かない部分のある雪ノ下の弱点を埋める様に工程を纏めたり、組み直す柔軟さと器用さはそれだけでも貴重な人材だ。何より、本人に自覚はないのだろうが立派過ぎないがゆえに職人たちに笑われつつも好かれるという不思議な性質であらゆる技術を教え込まれているため引き出しの多さはずば抜けている。

どっちも「新人」という枠には少々収まりきらないし、そこまでの仕事を回しても二人で大方はこなしていくので俺が指摘するミスもこの程度で済んでいるし、何より——詰め込めば詰め込むほどにどこまでも詰まっていっていくその可能性に俺自身も少しだけ胸が弾んでいる。

長年、出会う事の出来なかつた「愛弟子」という存在に俺は年甲斐もなく張り切つてしまつていてのを感じ、小さく笑いを噛み殺した。

あれから、早いもんで4年が経つた。

テレビ出演であの二人の大ポカが放送されたり、ソレを二回目で挽回したりと様々な出来事や現場をこいつ等と回して、経験して、作つてきて、気がつきや「監獄」なんて呼ばれていた俺の部署はいつしか「登竜門」なんて御大層な名前を囁かれるようになって随分と若手が増えた。

もちろん、俺が変わつた訳じゃない。出来ねえ事は徹底的に出来るようにさせるし、尻込みしてる奴らは容赦なく櫂を入れてけつを蹴飛ばしている。それでも、前のように一人ではなくなつた。

深夜もとつくに過ぎた時間に、現場の詰め所を覗いてみれば小汚いソファアに薄っぺらい毛布一枚を分け合つて寄りかかりながら寝ている愛弟子二人組。机の上にもこれでもかと書き込まれた図面に工程表。入社当時よりも随分とマシンな面構えになつたとは思つが、この二人が寄り添つている時だけは昔の様な柔らかく、気の許した表情を浮かべる。実績に関しては他の新人共なんか目でもなく、指導力も俺の元で新人を潰されないレベルまで引き上げることで有名だ。

もはや、誰もこいつらを色眼鏡で笑う様な奴なんていないだろう。そんな事を柄にもなく感傷に浸りつつ手に持つていたぬるい缶コーヒーを啜つて、溜息を吐く。

約束の五年は、もうすぐだ。そして、もうこいつ等もいい加減に卒業の時期が近付いている。このまま手元に置いておきたい気持ちも湧き上がるが、そんな懦弱な心を笑い飛ばして俺はポケットから二本分の缶コーヒーを置いて詰め所を後にする。

冷気に冷やされ煌々と輝く月を仰ぎながら、先日、比企谷が気まずそうに報告してきた事を思い出す。

『……俺、結婚するかもしれません』

その自信なさげな声と表情に思わず笑って何も言わず肩を叩いてやった時に悟ったのだ。

あいつらは、もう支え合う相手を見つけた。

これからは、俺抜きでのその形を探っていくべきだろう。

どうか、そんな若人達に幸あれと俺は静かに口の中で呟いた。

あの時から五年目を迎えた観桜会。

今年も誰も彼もが特設された会場で桜と酒、そして、新人の熱気に煽られて頬を緩ませる独特の空気。あの時以来、現場の都合で参加は見送っていたが今回は都合がついたためウチの部署全員で参加して大いに羽を伸ばしている。

久々に会った同期や後輩からは“顔が柔らかくなった”だのと揶揄われつつも、あの時とは違って俺の周りにも少しだけ杯を鳴らす人間が増えたのはいい変化なのか、どうなのか、背中がむず痒い。

そんな時に、会場のステージに比企谷が同期達に押し出されるように上がらせられ全員の注目を集めた。らしくもなく顔を耳まで真っ赤に染めたアホ毛はしばらく口をもこもことしていたが、意を決したように言葉を紡いだ。

「あー、その、こーういふ会社の行事で言う事でもないと思うんですけど……結婚の報告を……」

その一言に会場中が一気に湧き立つ。なんだかんだと皮肉屋ながらも面倒みのいい男だ世話になった連中も多いだろうし、後輩連中からは変に慕われている。上役連中だってアイツ個人の事は知りはないだろうが、オッサン連中というのは存外にこーういふ恋バナが大好きなのでニヤニヤとその恋の行き先を見守っている。

一部の女性社員はやさぐれたように酒を流し込んでいるがソレもしようがない事だろう——— なんだって、相手はもう決まってるようなものだろうから。



その中で、目に涙を溜めて口元を押さえている雪ノ下の元へと比企谷は真っ直ぐと足を進める。モーゼのごとく割れる人垣は神聖さなんて欠片もないお節介な温かさに包まれていて——その肩を優しく掴んだ。

「雪ノ下。ここまで黙ってたのは、あー、すまん」

「ばか、どれだけ待たされたと思ってるのかしら？ このスケコマシケ谷君」

真っ赤に染まる二人の初々しい会話に、周りも涙をこらえてその明るい未来を見守る中—— ついに、その言葉を発した。

「俺、結婚したんだ」

「「「「「「「「」」」」」」」」」

え？

「「「「「「「「」」」」」」」」

誰もが、自分の耳か、頭がおかしくなった事を疑った。雪ノ下も、見た事もないくらい間抜けな啞然とした顔を浮かべている。

そんな密かな大混乱の中で『馬鹿』は照れ臭そうに言葉を紡いでいく。

「いや、社長令嬢なのに、いままで俺とセットみたいな扱いをされてずっとスマナイと思ってたんだよ。そのせいで厳しい現場回されたり、周りの連中からからかわれたりして本当に迷惑かけてたなって思ってたさ……。でも、ようやく俺も身を固める覚悟が出来たっていうか——相手からもOKが貰えて、誰よりも最初にお前に伝えなきゃなって思ってたんだ。

こういう場で公にすれば今までの誤解も全部解けると思ってた？ ちよっと目立っちゃったけど——え、あれ、みんなどうした？ なんてちよっとずつ近付いて……。さて、その手に持つてる酒瓶はとりあえず持ち方が違う、って、え？ つちよ——!!!」

真っ白に燃え尽きて魂が抜けている雪ノ下に朗らかな笑顔で話しかける比企谷は——人の波に悲鳴を残して見えなくなった。

社長は笑顔のままフリーズし、夫人は頭を抱えている。

巻き起こされる大乱闘に、救いようもなく、ままならない世界と俺たちを笑うように桜は風に乗って散っていく。そんな脱力感を感じつつ俺もその中心に腕まくりして乗り込んでいく。

---

とりあえず、100発くらい殴っておこう。

終わりん♡

---

ピンポーン

周子「おかえりーん——つて、なんでそんなボコボコなんっ!!?」

ハチ「……俺がききてえよ(ぼろぼろ)」

ぬくもりは、そこに

カーテンの隙間から差し込む柔らかな光にぼんやりと意識が引き起こされるのを感じて、目を開いた。

朝独特の冷え込んだ空気に気だるい体の輪郭を感じつつも体を包む布団の柔らかなぬくもりと清涼な澄んだ空気が心地よくて深く息を吸い、隣から感じるもう一つの温かさに身を寄せることです。少しだけあつた心の中の不安と共にゆっくりと息を吐き出してゆく。それを何度か繰り返すうちにすつかりと覚めてしまった瞳を隣に移せば、今ではすつかりと見慣れた男の顔がすぐそばで無防備な顔で静かに寝息を立てている。

昔より短く揃えられた鴉の様な真っ黒な髪の毛に呑気に揺れるアホ毛。出会った頃に比べれば少しだけ鋭くなった顔つきと特徴的な澀んだ目は起きていれば初対面の人が息を呑んでしまう様な雰囲気も出すようになったが、今は瞼の奥で呑気にお休み中だ。

その見あきる位に見た顔もこんな身近で見ることとも最近は少なかったせいかな新鮮に感じられて、少しだけ体を乗り出して見つめ、輪郭を確かめる様にゆっくりと撫でその感触を味わうように感じる。

毎日の現場に少しだけ焼けた肌はろくな手入れもしていないせいかざらつく感触で、少しだけ伸びた無精ひげはチリチリとした反発を返してくるのが面白くて何度も楽しんでしまう。そして、大きな枕をクッションに身を預けつつもう少しだけ体を乗り出すと素肌を冷えた空気を撫でてゆくが気にせずとその特徴的な髪の毛を撫でる様に触れば、行水程度の手入れしかしてないそれは思いもしないくらい柔らかく、しっとりとした手触りを伝えてくる。

何度体験してもイジリ飽きないこの感触と数本だけ跳ね上がったアホ毛の独特の弾力が面白くて夢中になっていると小さく呻く声が聞こえてきた。

その男の瞳が胡乱気にかかれて、寄りかかるようにして髪の毛を梳いて遊んでいる自分を捉えて緩く腰に手を回しつつ引き寄せてくずるように私の胸元に顔を埋めた。

「……まだ、早いだろう」

「早朝から嫁より先におっぱいに挨拶とはお大臣様やなあ」

もごもごと人の胸元でくぐもった声を漏らす旦那に苦笑を漏らしつつもそのまま抱き寄せつつ抱え込む体勢に切り替え、こちらももうしばし彼の髪の毛と体温を楽しむことにする。

時計を見れば時刻は早朝と言ってもいい時間。だが、ありがたい事にアイドルを引退しても色んな仕事に追われる有名タレント。比企谷 周子”と、日本指折りの建築会社で結構な役職についている旦那。比企谷 八幡”の平日といえればこんな時間に目が覚めたら真つ青になって家を飛び出さなければならぬ生活なのだが———たまに揃った朝からオフの日くらいはこれくらいのおんびりと夫婦の時間を楽しんでも罰は当たらない。

そんな独白を一人心中の中で呟きつつも鼻歌交じりに自分の毛繕いに腐心して、ゆったりと時間の流れを楽しんだ。

あれだけバイト時代は”楽に生きたい”とか嘯っていたくせに、結局346を辞めたあとも

就職先が限られていたとはいえ激務が予想される建設業で奔走しているのだから本人の言はともかく社畜根性が沁みついている。その反動か、こうしたたまの休日の朝はこんな感じで蕩けているのはご愛嬌という奴だろう。

そんな不器用な男の生き方にクスリ、と笑いを零していると小さな電子音と白い湯気が上がってポットが朝の一仕事を終えた事を伝えてきた。

無精な性分が二人揃ってるもので休日の朝は台所まで寝起きのコーヒーを淹れに行くのも嫌がった結果、ベットの脇の台に湯沸かしポットを置くことに満場一致で可決した。結果、それ以来から彼は職務を忠実に果たして私たちの朝の始まりを伝えてくれる必需品となっている。

「おにーさん、お湯わいたで。コーヒーと紅茶どっちがええ？」

「……………コーヒー。あまいやつ」

「ブレへんなあ」

「ごだわりは貫く主義でして」

必死に朝の訪れを拒んで微睡を味わっていた彼も習慣化された日課には敵わないのか渋々といった感じでソレを手放して、私の胸元から離れつついつものオーダー。ちよつと離れた温もりに寂しさを覚えつつ口ずさんだ言葉に帰ってきたいつもの軽口に苦笑を漏らして、常備してある彼用のあまーいコーヒーのインスタントの封を開けてお湯にとく。

瞬間、部屋に広がる柔らかな香りと湯気が広がってソレを二人揃ってベットからちよつとだけ身を起してソレを舐めるように啜つていく。

会話もないけど、気まずさもない空気に身を任せる様に肩を寄り添って味わうコーヒーに負けないくらい甘いこの空気が休日で一番最初に味わう幸せだったりもする。そんな折に、彼がまじまじと私の顔を見つめてくるので首を傾げて聞き返す。

「んー、美人な嫁の顔に朝からむちゅーかーい？」

「顔面偏差値だけは相変わらず高いのは認めるがな——いや、懐かしい夢を見てな」

ひねくれてるのか素直なのか分からない返しに肩を軽く叩いて返している、そんな私に苦笑を浮かべつつも歯切れ悪くそう答えた。

「昔つて——アシスタントしてた頃？」

「いや、正確には俺はまだ木っ端のアルバイトで——お前に初めて会った時の事だな」

「……………うへ、嫌なこと思い出すなあ」

「まあ、今となつちや感慨深い思い出だな」

彼が続けた言葉が出来れば思い出さたくない類の黒歴史だった事にげんなりとしてコーヒーを脇に置いて枕に倒れ込んで睨んでみれば意地悪気に答える彼が憎らしい。膝で軽くこずくとおかしそうに笑って彼も枕に倒れ込んでくる。

ちよつとだけ舞う風圧に目を眇めるふりをしつつ隣でケラケラと笑う男を見つめ、当時を思い出した。

歴史ある和菓子屋の情緒と言えれば聞こえのいい古臭い日本家屋に朝早くから漂う和菓子の甘い匂い。その住み込みで働く男衆を支える女衆の朝だって早かった。ドタバタと大人数の飯を炊き、手早く店を綺麗にし、家事をこなして一息ついたと思ったら学校に飛び出していく——そんな毎日。

別に小さな頃からソレが普通だったし、店のみんなも可愛がってくれた大切な家族だったから役に立てるのは普通に嬉しかった。それに、溜まったガスは学校で気楽に遊んでれば十分に抜くことが出来たから別に不満もない。だからこうやって、暮らして普通に過ごしてくんだらうなと漠然と考えて生きていた。

そんな日々の転機は、ある日突然やってきた。

高校を卒業するときに問われた進路相談だ。

両親を交えて交わされた担任との相談は私が一つも言葉を挟むこともなく双方が最初から「家業を継ぐ」という方向で話に花を咲かせていた。私が出発した言葉は『しっかり家業を継いで頑張るんだぞ、塩見！』と力強く肩を叩いた担任に『あ、はい』なんて反射的に答えたそれだけだった。

それに、誰も、私も——疑問を抱かなかった。

そうあるべきなんだと、疑いもせずそのまま時を過ごして当たり前のように卒業し——一人古ぼけた和菓子屋に立つ日々が始まった。

甘い匂いに、忙しく家事と店を切り盛りする日常。

学生の頃には任せられなかった計理や、得意先への挨拶。

苦も、楽もなく、ただこなしていく日々の中で——魔が差した。長期休暇で帰ってきた県外の大学に進学した友人達からの誘いのメール。

誰もが楽し気に言葉と予定を話し合うグループを店番の合間に覗いて苦笑を漏らしていた時にふと思ってしまった。「たまにはいいじゃないか」と。出勤票を見れば今日の売り子さんは挨拶回りの母

以外は全員出てきている。大きな仕事も終わって、後は大した事は無い事を確認して——人生で初めて仕事をさぼった。

友人たちのトークに『今から合流する』なんて送るやいなや、さっそく部屋に引っ込み作業着を着替えて家をひっそりと抜け出して遊びに出かけた。

きっと、普通に言えば誰も怒らずに笑って送り出してくれただろう。

でも、初めてやったその悪事に湧き上がる不思議な背徳感と興奮は不思議と気分が良く、〃してやったり〃という不思議な達成感があった。そんな子供じみた反抗をする自分も無性に可笑しくてその妙なテンションのままかつての学友たちとの再会を祝って大いにはしゃいで回った。

何度もなる携帯も煩わしくて電源を切った。

家に帰ればこっぴどく叱られるんやろうなあ、とか しばらく休みは返上で連勤させられるかな？ なんて呑気に考えつつも友人と分かれたのは夜も更けてからの事だった。友人たちはこれから更にどこかに行くのだというが、流石にこれ以上はまずかろうと思いついて別れを告げた。

夜の京都は町並みを抜ければ、一気に静かに暗くなる。

さつきまでの陽気な気分は街の影に飲み込まれ、着信履歴が凄い事になっている携帯を見ると更にげんなりとしつつも言い訳を考えているウチにあつという間に家についてしまい、玄関先に仁王立ちしているシルエツトに息を呑んだ。

普段から気性の荒い父がどんな罵声を浴びせてくるか予想と覚悟を決めて引戸を開ければ——予想に反した静かな声が耳を叩いた。

『お前なんで、いらん』 そんな端的な一言。

ぞっとするほどの冷たい温度のその声に何よりも心を抉られた。

こんな事ならばいっそのこと、怒鳴って欲しかった。だが、こんな事態になったからは少しでも下手に出て事態の収束を測らねばと一

歩を踏み出した瞬間に頬を張られた。

意識がぶっ飛ぶと思うくらいの速さで振りぬかれたそれにふらつく足を何とか堪えて踏みとどまった私に冷たい声が更にのしかかった。

『あんたの様な卑怯な子を育ててしまったんは人生最大の失敗やわ』  
それから、どうしたかっていうのはあんまり覚えていない。

でも、今まで堪えていた何かが一気に弾けて滅茶苦茶に怒鳴った事は覚えてる。

燃える様に怒ってもいた。押しつけがましい人生に苛立つてもいた。頑固な性分にも呆れていた。でも、あのと時私の胸に一番溢れていたのは間違いなく悲しさだった。

短い人生でもこの家は好きだった。家の手伝いでみんなの助けになれているのが嬉しかった。他の子達が遊び呆けているのだって羨ましくても我慢した。自分の人生がこの店の為に使われる事にだって、文句はなかった。

でも、私のその覚悟は————たった一度の過ちで全否定されて、捨てられるようなものだったと正面切って言われてしまった事で私の心はバラバラになった。

そつから店の人に止められ、部屋に押し込められてから数週間部屋に引き込もった後————私は家を出た。

しばらくは友達の家でも渡り歩いて過ごそうかとも思ったが、〃歴史〃だの〃伝統〃だのが嫌でも目に入るこの街の全てが憎たらしくて、嫌気がさして目の前の夜行バスに飛び乗った。行き先なんて見もせずに、ただただこの街を離れていく無機質な街灯の羅列に胸の中に溜まるヘドロと奇妙な爽快感が溢れていくおかしな感覚。それら全てから目を逸らすように瞼を閉じて暗闇を進むバスの重低音をただただ聞き続けた。

行きついた先は、下品なネオンがあちこちで輝いて煩わしい雑踏がどこまでも続くこの国の首都だった。人生で一度はなんて思ってい



たにも関わらず、感慨もわかず何処からか漂うドブの様な匂いに眉を潜めた程度でその事実を受け入れて、近くの溝を渡り歩く日々を過ごした。

目減りしていく残高がついには切れかけるまでに稼ぎ口を探しては見たが、身分証明も住所を持たない厄介者を受け入れてくれる場所はない見つからず——その頃には、全てがどうでもよくなった。

だが、いきなり風俗で体を売るというのも抵抗がありネットで見つけたのは「神待ち」という奴だった。家出した少女が住み込みをする代わりにそういう対価を渡すというものらしい。ただ、それなりにリスクはあるらしく色々調べて考えてみた結果……やっぱりどうでもよかった。

どうせ、価値なんてない身の上。

そんな自嘲をしてショーウィンドウを鏡代わりにして眺めれば——見た目は悪くない。

適当に、好みの人間に声を掛ければそのうち捕まりもするだろうし。それに、少なくとも脂ぎったオッサンが待ち合わせ場所に現れるという事もなく顔ぐらいいは外れ無しで楽ができるというのもいい。そう考えた瞬間に気分も楽になって腹が減っていた事と、微かにかぐわしいラーメンの匂いが漂っていた事にも気が付いて——結論はあつさりとした。

匂いを辿って街からちよつと離れた場所に煌々と輝く赤ちようちん。中を覗いてみれば明らかに旨そうなこつてり味噌の全トツピンが目の前を運ばれて行くところだった。それに釣られて店内にも視線を回してみてもみるが、どうにも客は一人だけらしい。

後ろ姿から見るにちよつと猫背で根暗そうな真っ暗な髪の色。

見るからに陰キャっぽいのが、逆にそういう方が手玉に取りやすいとも書いてあったし、何より——ラーメンが届いた瞬間に見えたアホ毛をピンと立たせて嬉しそうに笑った顔が、随分と可愛らしかったのが決め手だった。

そこから、意気揚々と乗り込んだ先にある私の風変りな運命と騒が

しい日々——まだ私は気が付いていなかったのだけれども。

「いつそころせ……」

「嫁が急に物騒な事を言い始めて暴れ出した件について」

当時の事を思い返した私とその特大の黒歴史の重圧にくじけてシートと枕をもみくちやにしつつ悶えると、ドン引きしつつも脇にあるカップを寄せつつ私をシートごと取り押さえて緩く笑っている。

「まさかラーメン屋で人生初のナンパをされるとは思わなかった」

「それ以上その話を続けるなら、しばらく解凍されてない冷食だけが食卓に並ぶことになるで」

「くくつ、分かったよ。でも、まあ、あの時のお前の夢見たあと、目が覚めた時に今のお前を見てほっとしたんだ。——ちゃんと、あの時に捕まえておいてよかった」

「……………“人生最大の失敗”とか言ってたの忘れてると思ったたら大間違いやで?」

「下手すりやお縄の大博打だったんだからそれくらい見逃せよ」

しれっと体に巻き付けたシートを剥いて臭いセリフを吐くようになった男を恨めし気に睨みつつ嫌味を返せば、苦笑と共に額にキスが落ちる。その甘やかすような優しさが込められたそれに絆されそうになるが——こんなもので済ましてやるものか。

離れていく彼の首に腕を絡めて、唇を重ねる。驚くように固まった彼にねだるように何度もついばむように重ねてゆけば力強く骨ばった手が私の背中に回されて、唇を、首筋を鎖骨を——体中に自分の物だと証明するように証を残していく。

その痛痒いようなこそばゆさと、彼の物だと証明されていくその被征服欲が心の深い所を満たされるのを感じて思わず熱い吐息が漏れ出た。

明日の撮影の事がちよつとだけよぎるが——夫婦円満の証拠だ。むしろ、見せつけてやってもいいかと開き直って負けじと彼の体にも

所有権証明を付けていく。警戒すべき悪い虫は自分の事務所の外にだつてたくさんいるのだから。

そんな馬鹿な事を考えながらもお互い、真っ赤なあざだらけになつた事を見てひとしきり笑つた後に、もう一度身を寄せ合つて布団に潜り込む。

起きてから予定していた外出の予定にはもうちよつと時間がある。今しばし、この時間が続いたつて罰は当たらないだろう。

「で、お前は何してたんだ？」

ひとしきりいちやついてラブ注入にも区切りがついた頃、私に腕枕をしている彼が思い出したように問いかけてきた事に一瞬首を傾げるが寝起きに彼の頭を弄っていた事を言っているのだろう。ソレに思い至つて私は伝え忘れていた事を口に出した。

「んー、おにーさんも白髪が生えてきたなーつて」

「……………マジか」

彼の背に回していた手を髪に伸ばしてそのあつた部分を緩く撫でまわしていると、信じられないといった風に驚いた後に慙然とした顔でため息を吐く彼が面白くてつい笑つてしまう。

「くくつ、気にせんでもまだ2,3本やで？ そんな気にせんでもええのに」

「生えてきたつてだけでも自分が歳食つたていう自覚が芽生えて嫌になるんだよ。——お前は元から地毛が銀だから気にならないよなあ」

そういつて彼は私の髪を梳くように撫でて、その感触を楽しむ様に流したり握つたり匂いを嗅いだりして楽しみ始める。なるほど、やっている時には気が付かないがやられると結構に気になるものだな、なんて一人笑つて髪を弄ぶその手を取る。

「どうせならおにーさんも『白』やのうて綺麗に『グレー』になつてくれたらええんやけどなあ…………」

「夫婦お揃いってか？ 髪の毛の色までは自分で選べたら世話ねえだろ」

「ふふ、なんかそこまで行けたらちよつと嬉しいやん。というか、抜けるほうが早かったりして？」

「おまえ、それはマジでナイーブな問題だからやめろ」

げんなりとした顔で本気で嫌そうに答える彼に思わず吹き出してしまった。ひとしきり笑った後に取った手を意味もなく触って、握って、頬に添えてその骨ばった感触を楽しんでいく。出会った頃よりずっと固く、苦労を重ねた事が分かるその手に重ねた時間を感じる。できれば、この手もつとよぼよぼでゴツゴツになって、髪の毛が抜けるか染まってしまいきるまでずっと寄り添っていけたらと思う。

そして、どうかその最後の瞬間までこうしてこの温もりを感じていたい。

「急にニヤニヤしてなんだよ」

「んふふふ、もうちよつと年季が入ってきたら伝えることにするわ」

訝しむ彼を笑って誤魔化し、彼の腕を引き寄せてもつと強く抱きしめる様に要求すると彼も困った様に笑いながらもそれに答えて力を強めてくれる。それが嬉しくて笑いを零しつつも彼の顔を見上げて、おねだりをしてみる。

「な、なんか歌ってえや」

「ああ？ やだよ。プロの前で歌うとかなんの罰ゲームだよ」

「ええやん。おに——さんの歌が聞きたいやつて」

渋る彼に懇願するようにお願いする事数分。ようやく彼がガツクリと肩を落として「期待すんなよ」なんて言いながら少し思案した後——歌を口ずさんだ。

「春よ、来い」と、物悲しくも歩みを止めずに進み続ける思いを重ねる唄。

何度も冷たい雨に曝されても、想い人を胸に待ち続ける——懐かしい歌だった。

考えた末にソレを選ぶ彼と、その道の先に彼の隣に居続けられるその幸運を味わいつつも、私はその声を噛みしめる様に聞く。聴く。

きく。

そして—— ゆっくりと唇を重ねてその歌を終わらせた。

「……………歌えないだろ」

「うん。でも、私の春は もうあるから。 何度だって巡るから。

八幡は、もうその歌は歌わなくていいんだって伝えたかった」

「身勝手なやつ」

「旦那さまに甘えるのは、奥さんの特権やろ?」

困った様に笑う最愛の人に、私はもう一度優しくキスを落として彼と布団の中へ潜り込んでいく。

今日のお出かけは—— 午後からでもいいだろう。

お互いがそこにあることを確かめる様に激しく求めあう中で私はそんな事を考えて、小さく笑った。

甘く、蕩けるようなジレンマを

「おーしつ、そんなじゃあ我らが舎弟“ハチ公”の残り少ない独身期間を惜しんで——乾杯だオラアツ!!」

夜の繁華街の片隅にある小汚い居酒屋。その喧騒の中でもよく響く軽薄な声が乾杯の音頭を高らかに取った時はその場にいる誰もがチラリと目を向けたが、酒の席。ソレも音頭の通りならそのハイテンションも領けるものとして、その視線を自らの卓へと戻していった。

何よりも、その声に合わせて杯を酌み交わした面子が傍目から見れば明らかに堅気ではないのであれば猶更のこと。

音頭を取ってガハガハ笑う男は派手に染められた銀髪に厳ついサングラス。それに悪趣味な柄シャツに身を包んだお手本のようなチンピラで、ソレに向かい合うように座り呆れた視線を向けている二人だっただけの差はない。

2 mに届きそうな巨躯をスーツに包み込み品よく杯を乾す偉丈夫は明らかにどっかの組の若頭にいなような風貌で、その隣で苦笑いを漏らす男も細身ながらその暗く澱んだ瞳は何人か埋めた事があると、言っても疑うモノはまづいないだろう。

そうね、俺なら速攻でその店を出ていくレベルで関わりたくない集団なので気持ちは良く分かる。

そんな独白を俺“比企谷 八幡”は心の中で呟いて更に苦笑を深めるのであった。

「おーい、ハチ公。テメーの為にわざわざアメリカから駆けつけてやった俺様に対して随分とノリがわりーじゃねーか！ おらつ、もつと景気よく飲み干してエンジンかけろや!!」

「お前の喧しさに呆れてモノも言えないだけだろう、内匠」

「ああつ？ 祝いの席で騒がないでいつ騒ぐんだよ、相変わらずアホか武内」

「このやり取りも346日米対抗ライブ以来と思うと感慨深いもんがありますね……」

和やかな酔い絡みから一転してガンを付け合う二人の緊迫感にい

よいよサラリーマンたちが慌てて店を逃げ出していく様子を横目にしつつ、せめてもの店への罪滅ぼしでビールを追加注文した。

すみません、ウチの元上司達の柄が悪くて……。

こうしてお互いに悪態を掛け合っている姿は正に「道を究めた方面の方々」にしか見えない二人だが、本来はこんな湿気た居酒屋にいていいような二人ではないのだ。

かつて俺がバイトしていた芸能界最大手である「346プロダクション」。

そんな大企業の中から一切の下地も助力も無いまま未だに伝説として語られる「シンデレラプロジェクト」を立ち上げ、アイドル群雄割拠の時代にその名を知らしめた稀代のプロデューサーであり、いまだに『魔法使い』と恐れられる「武内さん」。

その大学時代からの同期であり悪友であった「内匠」さんは素行の悪さと強引きで左遷に左遷を繰り返された先——神奈川の茅ヶ崎支店では日本最後のロックアイドルグループと呼ばれた「炎陣」を。更にデレプロとの激戦の結果で飛ばされたアメリカでは『IDOL』という概念を作り上げ、未だかつてない莫大な市場を気づきあげた「怪物」。

あの激動の時代から俺がデレプロを辞めて既に7年が経とうとしている。

その間にも二人の情熱は絶えることも無く燃え盛り、今では二人揃って346の方針を決めてしまえる程の重役にまで上り詰めた。

そんな芸能界の大御所の二人がまるであの頃と変らないやり取りをしているのを見ていると思わず懐かしさと、愉快さが先だつて笑えて来る。

この光景が見ただけでも今日の飲み会を、無理を言っただけで開いた価値はあるのかもしれない。

「…………やめだ、舎弟の門出祝いでお前に構ってる時間が勿体ねえ」

「元はといえば、お前のバカ騒ぎのせいだろう。んんっ——改めて、比企谷さん。来週にせまった結婚式、おめでとうございます」

「——いえ、逆に二人に来て貰えて本当にありがたいです」

俺から漏れ出た笑い声にピタリといい合いを止めた二人がバツ悪  
そうに、それでも心から祝福してくれているのが分かって——俺は  
深々と頭を下げた。

そう、コレは俺が

「比企谷 八幡」という男が独身でいられる残り僅かな期間での、  
最後の機会だろうから。

無駄にしないように、かつての恩人たちに心から頭を下げもう一度  
盃を掲げた。

「「独身最後の夜に」」

寂れた居酒屋でもガラスの鳴り響く音は変わらず澄んで、綺麗な音  
を鳴らした。

「しかし、『よーやっ』って感じだよな。てつきり俺はデレステ  
解散ライブをしたら速攻で結婚するもんかと思ってたぜ」

「まだあの時は自信をもって横に並べる自信が無かったすから……」

「相変わらず師弟揃って小難しく考える奴らだ。『楓ちゃん』も『周  
子ちゃん』も随分と泣かされたと思えば思わず涙が出てくらあ……」

「いや、お前に言われる筋合いはない。向井さんがアメリカで浮気を  
したお前を殺しに行くのを止めるのに何度骨を折ったと思っている」  
「ケジメつけてからはスグに責任取っただろーが。グチグチ言うなっ  
！」

あーだこーだとはぼ貸し切りになった飲み屋の卓で好き勝手に会  
話の花を咲かせていると急に内匠さんに痛い話題を刺され思わず眉  
を顰めてしまう。

思い出すのは俺がデレプロを辞めてからの間の事。

ただの少女だったあいつ等がみるみる内に眩い星になっていくの  
を見送っていく中で、誰よりも隣にいた少女が——自分の最愛とな



る。塩見 周子が手も届かない高みに上っていく光景で俺は彼女達に依存し始めている自分に気が付いて多くの静止も振り切り346を後にした。

武内さんのように導く事も出来ず、内匠さんのように強引に引つ張り上げる事も出来ず、経理の鬼であつたちひろさんのように千里先まで見渡すことも出来ない凡人の俺をお人好しのあいつ等はきつと見捨てる事が出来ないから。

もつと高くに登れるはずの道を、自ら降りてしまふだろうから。

そんないつか訪れる憐憫と同情に塗れた悲劇を享受する事が怖くて俺は全てを放り出して逃げ出したのだ。

そこから、雪ノ下のコネで何とか今の会社に滑り込み。何者かになるために死に物狂いで働いてきた。

それでも足りなくて。

偶然に再会したアイドル達の言葉を聞く度に、一人芝居の自己満足を打ちのめされて。

最後に—— 一番、傷つけたくない少女を泣かせてしまった。

だが、それでも星に灯った燈は消えることなく俺を照らして、また手を取ってくれた。

まあ、語れば長い。聞けば、なんでそんな遠回りを」と誰もが目を剥くそんな物語の末に俺はようやく彼女を抱き留める事が出来た。

かつて偶然から拾った妹分の少女に、『愛してる』なんて言葉を気兼ねなく伝え、抱き留めるのに掛かった時間はなんと驚きの「8年」。文句を言われてもぐうの音もない。

ちなみに、武内さんは楓さんと解散ライブ終了———というか、楓さんが解散ライブに普通に結婚指輪を付けて出演したので速攻でバレたし、内匠さんはライブが終わった直後に拓海を迎えに来てそのまま市役所に向かつて、そのままアメリカに連れて行ってしまった。

二人の行動力から考えると返す言葉も無いのである。

そんな事をつらつらと振り返っていると、武内さんと言い合いをしていた内匠さんがふと思いついた様にこちらを向き、嫌らしい顔をして俺の肩を組んでくる。

「んで、もう周子ちゃんとの同棲も半年くらい経つんだろ?——毎晩やりすぎて腰がソロソロきつくなってきたんじゃねえ?のお?」

普通に呑んでた酒を吹き出した。話題の転換がジエツトコースターかな?

「というか——その話題は不味い。」

「貴様、相変わらずゲスでクズだな」

「はあ? 大切なことだらーが! というか、お前だつて結婚してからポンポコとガキを仕込んでんだから人の事いえねーじゃん」

「そういう問題ではないっ! というか、今はそのことは関係ないし———なにより、お前が言うなっ!!」

ぎゃんぎゃんと再び仲良く喧嘩し始めた二人。

年甲斐なく張り合えるライバルがいるというのはとても素晴らしい事だと思うのだが、二人揃って子供の数まで競わなくていいと俺は思うのだけでも。

実際、二人がパートナーを娶ってからは頻繁に妊娠報告が世間を騒がせていて今はもう武内さんは2人と妊娠中の1人、内匠さんは双子も含めて4人。夫婦仲が宜しいようで何よりです、はい。

そんな二人を眺めつつ、脳内で揺らめく悩みをいうべきかどうかを迷って——ビールを流し込んでその振り子に最後の1押しを加える。

どうせ、この流れを流せばもう機会は訪れず、一人で悩む羽目になるのだから。

「その——お二人は、初夜ってどうやって迎えました?」

「——は?」

俺の苦し気な問いに、騒がしかった声はピタリとやんで

信じられないモノを見るかのような視線が二つ注がれたのであった、とき。

「裏切り者の門出を祝して〜?」

「「かんぱーい☆!!」」

「殺意が全然隠せてないやないかい」

社会人になって、お酒を嗜むようになってから鼻屑にしているこじやれたパブに集ったかつてのユニットメンバー達の音頭についてい苦笑とツツコミを漏らしてしまった。

家出中に今の旦那に拾われ、紹介されたデレプロでは管理人時代からアイドルになった時まで数多くの友人を作る事が出来たが、未だにこんな際どいネタで笑い合えるのはこの「LIPPS」のメンバー達が一番だ。

「あら、一人の男を取り合った仲なのに満面の笑みで祝われる方が気持ち悪いでしょう?」

「おやおやく、しばらく凹んだ「奏」リーダーが言うと言説力がありませんな〜」

「こらっ、「志希」ちゃん、めっ! 部屋で普段見もしない失恋映画を見まくって浸ってたのは秘密だって約束したでしょ!!」

「いや、現在進行形で全部ばらしてるからフレちゃん……。まあ、何はともあれ、いよいよ来週が結婚式だし久々の面子で今日はパーと盛り上がる☆———ようやく私達も諦めきれぬ訳だし(ボソツ)」

「いやいや、そんな複雑なアレなのにホンマよく私刺されへんかったなあ……。いやマジで」

最後の美嘉ちゃんの奴が一番重くて怖い。大切なことなのでもう一度言うけど 怖いわーん。

まあ、そんなちよつとした引つ掛かりはあるものの、それでもこうして独身最後の飲み会を企画してくれるだけの友情があり、絆がある。ソレを今は素直に喜び、最近ようやく慣れてきた酒精で緩く口元を湿らせた。

「ふう……。まあ、何はともあれ、おめでどう周子。今日くらいは広い心

で惚気話にも愚痴にも付き合つてあげるわ」

「そうそう、今日くらいはぶつちやけちやいなよ。同棲も半年となれば色々な不満も溜まつてるでしょ？」

口の軽い志希フレコンビにアイアンクローで口の中に熱々のアヒージョを放り込んで折檻を終えた奏ちやんが苦笑と共にそんな事を呟けば、美嘉ちゃんもソレに便乗してくる。

うーむ。大人な二人である。

「おにーさん」こと私の恋人である「彼」と長い時間の末に結ばれ、ようやく同棲にまで漕ぎつけたのがようやく半年前の事。

電撃記者会見で婚約した事を発表してから随分と世間様を騒がせましたのだけれども、まあ、アイドルも卒業してタレント業を地道にやってきた成果か今も乾されることも無く芸能界でお仕事を貰えている。

向こうは向こうで建設業の監督さんなんてやっているものだから帰りは遅く、休みは少ない。

そんな二人での共同生活だから愚痴も惚気も溜まる程に一緒に居られていないというのが現状なので何を話した物かと頭を少しだけ捻る事になった。

「えー、なんだか味気ないなあ。フレちゃんもつとラブラブな話聞きたーい！」

「同棲生活というよりはルームシェアみたいな感じだにやー」

「なははっ、まあ意外とそういうもんやって。そもそもが家出を拾われた頃からおにーさんがデレプロ辞めるまで毎日のように顔を突き合わせてたわけやし、今更住む家が一緒になつたくらいで気恥ずかしさも感じる訳あらへんやん」

ケラケラと笑う私になんだか肩透かしを食らったかのような表情を浮かべる仲間達。

だけでも、私達はそうなのだから仕方ない。

イチヤイチャもベタバタするのも憧れが無いわけでは無いけれども、

そんな事よりも二人して寝ぼけ眼で歯を磨いて、食後のコーヒーを

噀りながら交わす短い朝の会話や、泥だらけだったり汗まみれだったりする彼の作業着を洗ったり、お互いのその日に合った事を寝る前にゆるゆると語るそんな時間があるだけでもはち切れてしまいそうな幸せに包まれているのだから。

“ああ、この人の一番星になれたんだな” と思えるこの生活がずっと欲しくて、ソレを手に入れた。

これ以上はちよつと贅沢だろう。

「と、いいつつ勝ち組の余裕を微笑みで表現する周子ちゃんなのであった。……あー、やってらんねーすわー。志希ちゃんもうお腹いっぱいすわー」

「勝手にナレーションいれんといてーや」

しまった。顔に出ていたか。

他の面子もなんだか呆れたような顔でこちらを見ているのでどうもそうらしい。いやはや、実に照れ臭い。

「お幸せそーでなによりです。……んでー、そんな幸せ絶頂の周子ちゃんの“夜の生活”の方はどうなのかおねーさんに聞かせてごらーん？☆」

にひひつ、と意地悪気な顔に切り替えたカリスマさんが卑猥な指をして詰め寄ってくるのに他の面子も眼の色を変えて詰め寄ってくる。

「確かに、気になるわね…」

「もう毎晩ぬっちよぬっちよのべっっちゃやなんでしょー！ フレちゃんそういうのには詳しいのだった！ 処女だけど!!」

「んふふ、今まで溜まつた分を取り返すくらい乱れた生活を送つてた気配がするじゃにゃくい？」

どいつもコイツも初恋を拗らせた処女共なだけあって耳年増な自分をこれでもかと発揮してニマニマと、興味深々と言った具合であれこれ好きな事を聞きだそうとしてくるのだけれども――

「……………」

無言で静かに目を背ける私の異変にやがてその場の空気は冷えていき、誰かが口ずさむ。

「……………まやか、」

相談すべきか、しないべきか。

悩む間の沈黙は何よりも雄弁な「肯定」となつて。

「私、ちよつと用事が出来て」

「おいコラ待たんかい、ぼけえっ！」

一斉に剣呑な気配を醸し出して席を立つ雌豹たちに飛び掛かり、全員を無事に着席させるまでしばしの時間格闘をする羽目になつたのであつた。

そう。

恥ずかしながらこの「塩見 周子」。

最愛の男と同棲を半年もしながら——いまだ「純潔」なのである。

ほんま、頭の痛い問題が私達夫婦の間には未解決のまま転がつていた。

「ハチ公、お前まさか……」

「……比企谷さん、コレは真剣な質問なのですが——機能は正常ですか？」

「正常ですよ。健全するくらいに正常ですから二人揃つてその労わるような眼を辞めてください」

俺は勇気を振り絞つた事を早々に後悔して二人の疑念を強く否定した。

この二人がこんな息を揃えて何かをするという貴重なシーンは出来ればこれ以外の場面で見たかつたぜ…。

だが、そう聞きたくなる気持ちは分らないでもない。

俺の嫁となる周子。彼女の容姿はメンバーの顔面偏差値がバグつていると話題になつたLIPPSの一角を担う程であつたし、タレントになつてから髪を伸ばした彼女は神秘的な魅力すら身に着けて未

だにファンを増やしている。そして、そのスレンダーな身体にアクセントを加える凹凸も豊かで、肌は本当に透き通る程に白く滑らかだ。ドラマに彼女の水着シーンが出ると話題になっただけでその回の視聴率が跳ね上がったってトレンド入りを果たすような漫画から出てきたような女、ソレが周子である。

そんな日本どころが世界中の男子が羨む「恋人」という地位に収まった男が同棲をしているにも関わらず未だに清い身である理由なんて心か体に重大な問題を抱えている意外にあり得ない。俺だっと思う。

だが、それでも——その数少ない例外になってしまった俺にだって言い分がある。

「……………いや、同棲してからの初デートでそういう空気になった時に、その、泣かれました」

「——っ！」

その一言に、二人が息を呑み揃って額に手を当てた。

なんとなく、事情を察してくれたらしい。これだから出来る男達とというのは無駄がなくて助かる。

念のために言っておくが、無理やり迫って——とかではない。

あの日のデートは最初こそは気恥ずかしさがあつたモノの二人で街を歩き、くだらない事を駄弁りながら話している内にいつもの様に軽口を叩き合って昼飯を食う頃には自然体でデートを楽しんでいた。

映画を見て、道端の猫を構い、二人の生活に欲しそうな小物を見て回って、家に帰って夕食を二人で作った。どこにでもいそうな「カッブル」の平和な休日——食休みのコーヒーを飲んでいる時にどちらからともなく自然と身を寄せ合って、最後のイベントを迎える。

緩やかなキスの応酬と、長年にわたりお互い言いそびれていた愛の言葉を何度も何度も繰り返し返し囁きあつた二人。

ただ、事件はそこから始まった。

お互いの服を緩やかに解いて生まれたままの姿になった時に周子の身体がびくりと大きく震えた事に気が付き、慌てて彼女を気遣えば「何でもない」と繰り返し返すばかり。

ただ、その身体は明らかに強張っていて——遂には空元気で笑顔を  
作っていた彼女の瞳から雫が零れ落ちた。

そして、そこで俺は女性にとつての「初めて」「がどれほどに恐ろし  
い事なのか」という事に思い至り、必死に彼女を抱きしめて謝り倒す。  
それに、周子が何度も泣きながら謝り返してくる事のなんと心苦し  
い事か。

「ちゃんと出来なくて」、  
「ビビりでゴメン」と何度も泣きながら  
震える彼女に俺の狂ったように煮えたぎっていた獣欲はすっかりと  
なりを潜めて、ただただその後は周子の柔らかで細い身体を壊さない  
ように抱き留めて一晩中愛していると伝え続けようやく彼女の涙は止  
まってくれたのであった。

そこから、二回目になる機会はお互いの多忙さもあつて中々めぐり  
込んでこずに、なりそうな雰囲気の時もお互いにあの時の記憶が蘇つ  
てお互いに軽いキス程度で済ませて穏やかな時間を過ごす事を選ん  
できてしまった。

いや、うん。まあ……お互いにビビりまくった結果として結婚式を  
目前に控えてもまだ清い体のままという今は珍しいカップルはこ  
うして生まれたのである。

ただまあ、流石にもうしんどい。

一緒に暮らしているアイツの飯は美味しいし、時間のある時は俺の小  
汚い作業着も嫌な顔せず洗ってくれるし、一緒にいるだけで気楽で  
楽しい。だが、あんな美人の嫁さんを前にして半年間の禁欲はもうホ  
ントにキツイ。

何回自分で抜いてもアイツの風呂上がりを見るだけですぐに勃つ  
もん。美人の嫁さんを貰ってこんな苦行に挑むことになるなんて当  
時の俺は思ってもいなかったし——やりてえんすわ。実直に  
いっちゃえば。

でも、また泣かれたらと思えばそっちはもつとキツイ。

そんな性欲と嫁への愛の板挟みの末に俺は頼みの綱となる元上司  
に無理を言つてこうした場で泣きついてる訳である。

笑いたくば笑え。だが、泣いてる嫁を無理やり襲えるクズだけが俺



に石を投げられるのだと心するがよい。こっちは真剣に悩んでいるのだ。

「ふーむ、まあ、初めて”””ってのにはありがちなパターンだが……故にムズカシイ問題だぜ、こりゃあ」

「こうなると男の我々ではなんとアドバイスしたモノか……”待つ””という選択肢も半年、いや、周子さんとの出会いから数えれば7年以上。その葛藤を想えば余りに酷です」

「……ちなみに、どっちの嫁さんも知り合いだからスゲー聞きにくいんですけど、二人は嫁さんとどんな感じだったんですか？」

俺の哀愁漂うSOSに一切笑いもせず真剣に腕を組んで悩んでくれる二人にちよつとだけ安堵の息を漏らしつつ酔いの勢いを借りて聞いてみる。

不躰なのもマナー違反なのも百も承知だが今だけは真剣に少しでも手がかりが欲しいのである。

「ウチの拓海も初めてでちよつとはビビってたが……まあ、あの性格だからな。普通に俺がリードして慣れるまでゆっくり馴染ましたら普通に行けた」

「本来は公言する事でもないのですが、事態の深刻さから緊急事態と判断します。……楓さんも初めてでしたがこっちは向こうがノリノリでしたね。むしろ、襲われた感があります」

「……ダメだ、参考になんねえ」

聞きだしといてあんまりな感想だが、当たり前といえば当たり前前の話。

各家庭の事情が自分の家庭に通じる訳が無いのだ。

他所は他所、ウチはウチという母ちゃんの名言が今は酷く俺を責めたてるぜ……。

「まあ、飲め飲め。今回ばかりは力になれそうにないが愚痴くらいは付き合ってやつからよ。——大将、焼鳥と焼酎追加で頼むわっ!!」

「……ふむ、責任は取りかねますが所見を述べても？」

「——へ？」

ぐたりと卓に崩れ落ちる俺を気づかわし気に背を叩く内匠さんに

勧められるまま焼酎を飲み下していると、腕を組み黙考を繰り返していた武内さんがそんな言葉を呟く。

武内さん—— あんた、最高の上司だぜ。

「で、なに？ 結局は最初の失敗からビビッてやってない訳?? マジ??☆」

「いや、美嘉ちゃんは体験したことないから分からんのやって！ 普通にビビるわあんもん!!」

人の旦那を公然と寝取りに旅立とうとする狼たちを必死に抑え込んで再開したLIPS会議は立場が一転してみんなの冷ややかな視線に晒されて私が身体を縮こませるといふ構図で始まり、ピンク髪の処女カリスモデルが生意気な事を言い始めたので必死に反論する。

「いや、しゅーこちゃんがこんなに純情だったとは予想外だにやー。ゆうて日本人の平均なんて10〜15cmで幅も3cm前後。そこまです長引かせるものでもないでしょ?」

「へ?」

「「え?」」

志希ちゃんがケラケラ笑いながら指でスケールを作ったのを誰もが興味深く眺め、何かを納得したのか釣られて笑っている光景を目にした私だけが首を傾げ、また空気が凍った。

え、あれ? いや、調べたことないけどそんなもんなん?

だって、あの日見たおにーさんの「アレ」って……。

「周子、落ち着いて。きつと気が動転してたのよ。よく思い出してみれば案外大した事が無かったりして貴方の悩みなんて簡単に解決するかもしれないわ」

奏ちゃんの言葉に一理あると思ひ直して少しだけ頬に熱が溜まるのを感じつつあの日の事を思い出してみる。

えーと、向かい合わせで抱き合いながら固いのを感じて下を覗いた時がこんな角度で：確かおにーさんのが臍超えてこのへんまで来ててえ、太さは恐くて触れなかったから自信ないけど……なんやろ、私の手では余りそうやったから……あ、小さめのズッキーニくらいかも知らん？

いや、ウチかて処女やけど多少の知識はあるし覚悟もあつたはずなんやけど——え、改めて聞くとサイズ感おかしくない?? 棍棒やん、もうソレ。ふつーに凶器やん??

私の意見に同調を求めて周りを見渡せば誰も私の言葉なんて聞いておらず手で作ったスケールを自分の下腹部にあてて顔も真っ赤に夢想に耽っている真っ最中。人の旦那でやめーや。

おいこらっ、おもむろに席を立つな志希ちゃん。トイレに行くならバック必要ないでしょっ!?

「こほんっ、ふむ、私達はあの男を少し甘く見ていたようね……」

「「異議なし」」

「なんなんこの会議……」

日本中が憧れる大スターたちが成人してからこんな思春期真っ只中だだもれな話題に熱上げてると知ったらファン泣き崩れるで、ほんま。というか、ママさんがもう既にドン引きしてるやん……次回から来づらくて敵わんわ。

「というか、相談する相手完全に間違ってるよなあ……アタシ」  
がつくりと項垂れて切り替えたウーロン茶を啜る。

いや、こんな回りくどい事せずに旦那に素直に話せばいいだけの話なのは分かっているのだが、どうにもあれ以来から気を使ってそういう空気を見事に排除してくれているからこちらから言い出すのはどうしたって恥ずかしいし——あまり大きな声では言えないが、大切にされている感”が凄く心地よくてヌクヌクとソレに甘えてしまってきた。

だが、我慢させているというのも痛い程に良く分かるし、〃そういう事〃をしてあげたい気持ちは確かにあるのだ。

問題はやり方だ。

無策に行ってもまた二の舞になるだろうし、あんまり甘えすぎてソレが原因で浮気なんかされたら私は多分ふつうに自殺するし、彼を殺してしまう。そんなバイオレンスな展開はこの前出たドラマだけでお腹一杯。しゅーこちゃんは幸せ家族ホームバラエティー路線の家庭を指摘している。

それを満たせる方法がどうしても浮かんでこないから皆に相談したのだが結果はご覧の有様。うーむ、こまったなあ。

「はいー」

「はい、フレデリカさん」

「フレちゃん達が周子ちゃんの代わりに相手をしてあげる！」

「殺すぞマジで」

「——ひえっ」

「はーい！」

「はい、志希ちゃん」

「もうめんどくさいから薬で襲わせる、とか」

「……悪くないけど、その後のおにーさんが罪悪感で死にそう」

「めんどっ」

「はい」

「はい、奏ちゃん」

「〃傘〃に〃貴方の貞操〃と説きます」

「……その心は？」

「——開くも閉じるもあなた次第」

「うまいっ——フレちゃん、スピリタス注いであげてー」

「はいはーい♡」

「ちよっ、まっ!!」

「ちよつとは真剣に考えーやつ！ 大喜利大会しとるわけやないねんっ!!」

奏ちゃんのせいで最低な下ネタ大喜利や川柳を読み始めたアホ共に活を入れるものの、みんなスピリタスやウォッカの飲み過ぎで完全に酔っ払いと化し始めていてもうケラケラ笑うばかりであるこんちくしょう。

そんな中で、一人だけ混じらずに腕を組んでいた美嘉ちゃんが顔を真っ赤に染めつつも、何かを覚悟したようにゆっくりと手をあげた。

「……はい、美嘉ちゃん」

「いや、私も多分そんな見たらビビるからえらそーな事言えないんだけど、さ。でも、ずーっとそんな状態でもいられない訳だし——

—ちよつとずつ慣れていくしかないんだと思うんだ」

「——美嘉ちゃん」

「いや、これマジのあれだから本気で恥ずかしいんだけど、昔そういう記事のコラムを書くとき調べただけど勢いで『がーっ』とやっちゃうのが全部じゃないみたいで……その、『ポリネシアン式』ていうのがあるの。」

直接的なのは期間中に絶対しないんだけど、その期限まではお互いの身体を抱き合って眠ったりキスしたり、撫で合うだけ。その、なんていうのかな、来週の結婚式を終えれば本当の意味での『初夜』な訳じゃん？

その時まで、恥ずかしくてもアイツと話し合ってさ——『ソレ』もアイツの一部なんだって思えるようにゆっくりと受け入れていくのが良いと思うんだ」

その顔はなれない話題で照れている部分もあるのだろうけれど、瞳は真摯に真っ直ぐと私を見つめて必死に言葉を紡いでくれる。

そして、優しく見守るような微笑みの中に——ちよつとだけ心の中で押し殺した悔しさと後悔を隠しきってくれる本当に優しすぎる彼女。

それが、苦しくて、嬉しい。

私がデレプロを裏切り、クローネのメンバーとして立ちはだかった

時のダンスバトル、ダンスと歌声に込めた全力で彼への想いを語り尽くした親友で、恋敵。

その彼女がこうして押し出してくれるのだから、自分は本当に人に恵まれすぎている。

彼女だけでなく、凹んでいる自分をバカ騒ぎで元気づけてくれる友人達も、競い合って自分を新たな高みに連れて行ってくれるライバル達も、馬鹿だった自分を導いてくれた恩人たちも——何より、暗い闇に捕らわれて自暴自棄になっていた自分を掬い上げてくれた大好きな彼。

その全てに、私は嬉しくなって

少しだけまた泣いた。

私は、強くなつてから——ちよつとだけ、泣き虫になつたみたいだ。

武内さん達との呑み会は俺の相談に一段落がついた所で、呑み直しとなり今度は懐かしい話題や最近のメンバー達の事となつて会話に随分と花が咲いた。

年長組で新たな恋を見つけたモノも要れば、新しい企画に燃える若手組に対抗心を抱いて張り切るモノ。幼かった年少組も、高校生組もそれぞれが進むべき道を決めて力強く活動を続けている話はなかなか無性に嬉しくなる。

それが、かつてのような眩さに目を眇めるようなモノではなく、駆け上がっていくその姿を見守れる気分に近いのは成長か、老いかはまだ少し判断がつきがたい。

そんなこんなで久々の元上司という名の友人達との楽しい会合は、二人を家で待つ奥様方からの帰宅を尋ねるメールでお開きと相成る。

別に朝まで飲み明かしても怒るような二人でもないだろうけれど、帰りを待つ人を置いてまで遊び明かそうとするほどに彼らは無思

慮でもない、いい旦那なのである。

そんな二人のように成れるかどうか考えて、苦笑を漏らした。

他所は他所、ウチはウチ。

だけれども、泣かせる事だけはすまいと彼女にプロポーズした時の誓いだけは新たに締め直して新居に帰り付けば——向こうも懐かしの面子との女子会は早々に解散したのか家に灯りが灯っていた。

一瞬だけさつき武内さん達にした相談が頭によぎるが、根本的に示された解決策は遅効性のもので焦ったところでどうにもならん。日を改めてのんびりと周子と話し合えばいいと思いついて玄関のカギを開けたのであった。

「あ、おにーさんお帰りーん。随分早い解散やったんやね？」

「楓さん達と子供の寝顔みる時間を奪う訳にはいかんからな。気づかいの出来る元部下なんだよ」

「なんやの、みんな尻に敷かれとるだけやん。コーヒーのむ？」

「ん、たのむ」

リビングのソファで一足先にシャワーを浴びたのかパジャマに身を包んだ彼女は俺の軽口にカラカラと笑いながらコーヒーを入れるために腰を上げ、俺は素直にソレに頷いてソファにゆったりと座り込んだ。

ちよつとだけ「子供」という単語にしまったと思いはしたが彼女は気にした風もなく鼻歌交じりでコーヒを入れてくれているので考え過ぎだと安堵の息を吐いた。

「そつちこそ早かったな。他の連中はどうだった？」

「なはは、みんな久々に羽目を外して早々に酔いつぶれちゃった」

「年長組から何も学んでないのか、アイツ等は……」

何度かかつてのデレプロメンバー達と飲む機会があったのだが、年長が飲酒を控え始めたかと思えば今度は酒を嗜むようになった高校生組が着実に呑み助になり始めていたのを思い出してついつい苦笑

が漏れ出した。

「ん？ お前はあんま飲んでないんだな」

「元々あんまり強くもないし、3杯目からはずっとウーロン茶。結婚式も目前に花嫁のげぼ塗れの姿も見たくないやろ〜？」

「餃子とビールの匂いを漂わせて人の背中がなつてた姿は今でも覚えてるけどな」

「ええい、何時までも昔の話をほじくるいけずめっ！」

「ばかつ、零れるこぼれるっ」

入れて貰ったコーヒを啜りながら揶揄えば、ムツとした彼女がべしべしと肩を叩いてくるのに軽く応戦している内に——ふとした瞬間に目が合つて、そのまま軽くキスを交わした。

柔らかくて、温かい。それで、その後二人して『新婚みたいだ』なんて笑い合う心地いい時間を共にして今度こそ身を寄せ合つてのんびりとソファアに凭れた。

「なあ」

「なんだ？」

「その、言い辛いんやけど——『夜の事』をみんなに相談して、さ」

「——な」

「ごめんっ！ 勝手にそういうの話してホンマごめんっ!! でも、このままおにーさんに我慢させ続けたくなくて……さ」

咄嗟に口から出掛けた驚きを漏らす前にそんなしおらしく謝られてはもう何も言える訳がない。というか、俺が何を言えた口だということか。

「いや、その、……びつくりしただけだ。てつきりもうそういうのは触らない方が良いのかと思ってたし——もっと言えば、俺も勝手に武内さん達に相談してたし……」

「……………っふ」

しばらくキョトンとした周子と気まずげな俺が見つめ合う数秒を経て、二人揃って吹き出してしまった。



阿保らしい。 〓阿呆らしい

こんなお互いに気まずい想いをして誰かに相談するそっくりな所も、一番最初に話し合うべき人間にお互い誰よりも遠慮していた事も。

でも、そういうもんなのかもしれない。夫婦ってのは。

まだ、言い切れないけれどもソレはきつと大切に想い合っているゆえの温かな「ヤマアラシのジレンマ」という奴だろうから、謹んでその痛みを楽しませて頂こう。

「ほんま、お互いしようもないなあ」

「まあ、俺らしいと言えばらしい……ほんで、なんか上手い方法は見つかったか？ 言つとくけど、勢いとか、薬とか、浮気で解決とかは論外だからな」

「なはは、その案は大分初期に出てきたわ。みんなの思考もお見通しやねえ」

クツクツと未だにお互い喉を鳴らしながら、なんとなくあいつ等が言いそうなのを適当に上げて見れば見事に当てられたらしい。脳みそが俺もアイツ等も一切進歩していない事が可笑しくてまた笑っている、周子が少しでもだけ雰囲気を変え緊張と甘さが混じったモノに変えて俺に寄りかかってくる。

「うん、ほんで、美嘉ちゃんがうちら向きの奴を必死に考えてくれてな……その、期日内にゆっくり抱き合ったりして身体を慣れさせていくって奴なんやけど、さ」

「……まさかの発案者だな、ソレは」

意外さとの確な提案になんと言えはいいのか迷ったが、普通にありがたい。というか、元々が人の恋愛関係には世話焼きさと細やかさを持ち合わせている彼女が最も親身で分かりやすいサポートをしているので、普通に一番適任だったのかもしれない。

「そつちはっ？」

「……まあ、その、「武士はくわねど……」的なアレだな」

「なんやの、参考にならへんなあ」

ニユアンスは違うが武内さんの提案も全く同じものだったので一

瞬だけ打ち明けるか迷ったが、ココはわざわざ醜聞を広める事は無いだろうという判断で飲み込んだ。

少なくとも、男同士の会議でそんな案が出たというのは少しだけ画面が芳しくないでココはカリスマ様の御威光に縋らせて貰おう。

何より――

「……ちよーつと、反応が素直すぎへんかなあ」

「むしろ、反動が知らんけど我慢しきれんかが自信無いな、コレ」

今まで必死に押し隠してきた最愛の妻を抱けるかも、という期待を持たされただけで痛い位に膨らみ始めたマイサン。ソレを少しだけ恥ずかしそうに眼を逸らす周子が可愛くてこれから始まる地獄とその先の天国に今から頭がどうかしそうになってしまう。

「期間は？」

「折角やし、ここまで来たなら結婚式終わった後のハネムーンで、とか考えとるけど……大丈夫、かな？」

「……頑張る。ルールは？」

「えーつと、軽く調べた所によれば初日は…その、全裸で、見つめ合つて同じベットで寝るんやって。あの、触るのも無しで――ずっと見つめ合つて、好きな人の事を焼き付けるらしい、よ？」

普段から飄々としている周子が恥じらいつつも、何度も俺の顔や、躰、股間をチラチラと見やるその仕草だけで俺の理性はもうグズグズにされかけているのに――まだ、一目目なんだけどコレ本当に大丈夫？ おれ、結婚式中に大変な事になっちゃうじゃない？

そんな不安と期待と絶望が入り混じる中で、とりあえず俺は完全に獣になりつつあるポンコツな脳みそを冷やすために風呂へと向かうのであった、とき。

---

さて、そこからの事は語ろうとすると「長く苦しい日々だった」と

いう一言に尽きる。

美嘉の教えてくれた方法というのを二人であの後に調べて実践してみたのだが、厳しく制限された行動の全てが愛する相手の一挙手一投足を意識させる生殺しのまま性感を高め合っていく恐ろしい儀式であり、結婚式のために長期休暇を取っていなければ確実に職場でエライ事になっていった自信がある。

あの「塩見 周子」が顔を真っ赤にしながらも蕩けた顔で枕元において襲い掛かれないうまま緩やかな時間を過ごす事を考えて頂けば想像がつくだろうか？

正直、寝てらんないっす。

というか、お互いの両親を迎い入れた時に強面の周子の親父さんの相手をしてる時でも周子と肩がぶつかるだけで反応して本気でヤバかった。

それでも何とか堪え切れたのは、結婚式の打ち合わせや段取り。ソレと346メンバーやや同級生達との呑み会が重なって毎日が精も根も尽き果てるくらいにクタクタになっていたおかげでもあるのだろう。

苦勞の甲斐あってか、結婚式は華やかで、和やかに進んでいき——二人揃って祝ってくれる人達の温かさに少しだけ泣いて無事にフィナーレを迎えたのであった。

役場に書類を出すだけでなく、こうやって自分達を支えてくれた人々に感謝と想いを伝える事で俺達はようやく本当の意味で「夫婦」になれたのだと思う。

それで、感動の披露宴の後の2次会3次会はだれもが羽目を外して高らかに笑い、踊り、祝ったせいでそんな余韻も吹っ飛ぶほどに大騒ぎ。

俺たちらしい結婚式だったと、死ぬまで語れる事だろう。

そして、そのまま二日酔いで痛む頭を押さえて旅立った——常夏の島で俺達は遂にその日を迎えたのであった。

二人で何をするでもなく手を繋ぎ、あてもなくブラブラと散歩なんかをして緩やかな時間が流れるその南国でのんびりとした時間を過ごし、その初日を俺たちは終えた。

華やかな街並みも、華美な商店も、賑やかな観光地も——いま、隣で歩く最愛の相手への意識を逸らすには余りにちっぽけに思え、ただただお互いに口数も少なくながった手だけを意識して果てしなく澄んだ海に夕日が沈むのをただ待った。

そして、一番星が地平に輝いた事を確認した二人は何を言うでもなく自分たちの部屋へと戻り、溜まりに溜まった感情を無言のまま身体で示す。

荷物も何もかも玄関に放り投げ、お互いの衣服を興奮で震える手で引き剥がす様に剥きながらベッドに飛び込んでひたすらに抱きしめ合って貪り合うようなキスを交わしあう。

「わるい周子、ちよつともう、限界だ」

「おにーさんっ、ウチもヤバいかもっ。あたま、ちよつとおかしくなつて、やばい」

キスの合間に絞りだしたお互いの言葉は本当にひどいもんで知性の欠片もありやしない。

だが、単純明快なその言葉だけが「嘘」も「恥じらい」も無くシンブルにお互いに響いて行為の熱はひたすらに高まっていく。

周子に至っては、あれだけ怯えていた俺の一物を自ら求める様に腰をくねらせ、俺はそんな単純な事がひたすらに嬉しくどこまでも興奮が高まって——もう、なにもかもを思考することを投げやって最後に、本当に最後の理性を絞りだした。

「周子——いいか？」

「——きて、おにーさん」

荒い吐息の中にお互いの耳元に蕩けきった声が響き、俺達は夢中になってその快楽にるつぽへと堕ちていき、その部屋からは朝になっても激しい物音と嬌声が止むことは無かった、とき。

眩い光がカーテンの隙間から差し込み、海風の香りがゆるりと肌を撫でたのを感じ、目を覚ます。

広々とした海外スイート特有の解放感溢れる部屋の中で起床した俺が体中に押し掛かっていた何かから解放されて清々しい気分浸って一番最初に思ったのは「海外でも朝チュンはあるのだな……」  
“というすつとぼけた感想であった。

そんな俺が次に意識を向けたのは自分の胸元でその柔らかな身体を丸めている嫁さんだ。

朝日に照らされるその銀糸の髪はさらりとして俺の胸板を撥り、小さな品のいい寝息とは対照的に涎を垂らして気の抜けきった顔で俺に抱き着くその姿は猫の様で非常に愛嬌がある。

見れば見る程に美人で、可愛く、ほつとけない——最愛の女のそんな姿が手元にあることが言葉に出来ないくらいに俺は嬉しくて、呆れる程に抱いたその身体をもう一度抱きしめて幸せをかみしめた。

「ん、んあ……あさから、苦しいってば」

それに、寝ぼけ眼で起き出して答える彼女がやっぱり愛おしくてゆっくりと唇を重ねて、緩やかに声を掛ける。

「周子、愛してる」

「ん、うちも——どんぶり一杯に愛してるよん♡」

まさに、お腹いっぱい幸せという奴に浸りながら考える。

さて、今日は彼女とどんな「毎日」を重ねて行こう？

そんな贅沢過ぎる悩みに俺は、残りわずかとなったこのハワイでの思い出作りに頭をこね回し始め——俺の間違い続けた青春は、今日この日に報われる為に合ったのだと幸せに茹だった脳みそでピリオドを打った。

俺の人生、そう考えれば悪くないもんである。

比企谷 八幡 男 26

死にモノ狂いで働いたおかげか現場では今や責任者に近いくらいに出世。社内では同期の社長令嬢とくつつき天下を取ると思われていたがまさかの周子とくつついたせいで阿鼻叫喚の地獄絵図を作りだし結婚式でも気まずい空気を漂わせた伝説の男。

嫁との念願のSEXを迎え、彼のひねくれまくった青春は終わりを迎え幸せな家庭を築いていく事となった。

比企谷 周子 女 26

最愛の男を長い年月の末に射止めた執念の京女。ラブラブで順風満帆な生活だったが根が良家の娘だったためか乙女な部分が出て旦那を生殺しにしまった。

だが、友人たちの助けと助言もありハネムーンで見事に克服し、夫婦の営みに今度はドはまりしてソレはそれで仕事に影響が出て大変だったらしい。もう、べっちょよべっちょのぬっちょぬっちょだ。

そのおかげか初産から双子を賜った。正にハッピーエンド。

結婚式では旦那の会社の社長令嬢に挨拶に行き、「私、猫が好きなだけれどうしても好きになれない品種がいるの」「はえ?」「――

泥棒猫だけは、大っ嫌いな」――」という修羅場を密かに迎えたとかないとか…そういう噂がある。